亀井北

（その3）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

亀井北

（その３）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

巻頭カラー図版

鳥形木製品

序　　文

河内平野のごとく、砂と粘土の互層となった厚い大和川水系の推積土層で覆われたところでは、通常、遺跡の確認は、非常に困難である。

亀井北遺跡は、そのようなことから当初遺跡として周知されていなかったが、南北に隣接する亀井、久宝寺遺跡の調査の所見を基に試掘調査を実施した結果、新たに発見された近畿自動車道天理～吹田線（大阪線）では15番目の遺跡である。

そして、弥生時代以来の河内の〝クニ〟の歩みと河内平野の生成を刻み込んだ亀井、久宝寺、加美の大遺跡にすっぽりと囲まれた位置にあたることから、これら三遺跡の最近の調査大成果を更に補完する遺跡として大いに注目されるところであった。

今回の調査によって、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中、近世の各時期の遺構、遺物を確認したが、特に、弥生、古墳時代においては、亀井、久宝寺、加美の三大遺跡の影響を如実に物語ると共に、当該地域の消長発展と古代史解明に大いに寄与するところとなった。

主遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和61年３月31日

大阪府教育委員会
文化財保護課長　吉房康幸

序　　文

河内平野に包括される古代史は、我国の歴史を知る上で、欠くことの出来ない重要な部分を占めている。

大和川と淀川が形成した三角州は、時々の住民や権力者の力量を反影しながら、刻々と変化して今に至っている。

自然と人間の果てしないかかわりが、河内平野ほど単的に把握され、複雑な変化の中に人間の努力、限界、妥協、克服が見て取れる地域も少ないのではなかろうか。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に発掘調査を依頼され、既に長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、大堀城遺跡、亀井遺跡、久宝寺遺跡、佐堂遺跡、城山遺跡の14遺跡の調査が完了し、多大の成果を挙げてきた。

本書は、近畿自動車天理～吹田線内最後の調査対象遺跡となった大阪市平野区加美福井戸町、同加美新家町、同加美松山町並びに八尾市北亀井町一帯に所在する亀井北遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

河内平野の内部に所在する各種の遺跡の調査は、低湿地における発掘技術の進歩とあいまって、近年急速に実態が明らかとなってきたが、本冊子に記載の諸事実も、これらに付加される時、その及ぼす影響大であると確信するものである。

最後に、限られた調査期間の中で、およそ２ケ年間連続で発掘調査を担当した調査関係者各位の努力に深謝するとともに、調査を御指導いただいた大阪府教育委員会、調査の円滑な推進に多大の援助をおしまれなかった日本道路公団の関係各位に厚く御礼申し上げ、今後とも当センターにより一層の御理解、御支援を願ってやまない。

昭和61年３月

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加　藤　三之雄

例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う八尾市北亀井町、同亀井町、大阪市平野区加美南所在亀井北遺跡の発掘調査概要報告書である。また八尾市亀井町所在亀井遺跡にかかる調査区（KM２―30）の発掘調査概要もあわせて掲載した。
2. 調査は大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用373,849,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和59年３月10日から昭和61年３月31日までの間実施した。
5. 出土遺物の整理作業は現地において、発掘調査と並行して行い、本書の作成にかかる作業は当センター泉北分室において昭和61年１月から昭和61年３月まで行った。
6. 本調査は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本書作成に関係した者は以下の表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林廣喜（60年１月まで）
	専務理事	住羽地米治（60年３月まで）
	事務局長	畔　謙造（60年３月まで）
	専務理事兼事務局長	村田和三郎（60年４月から）
	事務局次長	尾田勝之（60年10月まで、60年４月まで総務課長兼任）
	同	金丸義和（60年11月から）
	総務課長兼庶務係長	阪上允子（60年４月まで主幹兼庶務係長） 主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣、 灰本明子、千野和久、田口宗義、 鎗山洋子、宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　杉本直子、主事　小島容子
調査総括責任者	業務課長	石神　怡（59年３月まで）
	同	泉本知秀（60年４月まで）
	同	中西靖人（60年４月まで主幹兼業務第１係長）
	業務課主幹	吉村信男
長吉分室	業務第２係長	赤木克視（61年１月から業務第１係長） 平井貞子、陣内暢子、大楽康宏、竹原伸次
長田分室	業務第１係	技師　山口誠治

東北分室　　業務第3係長　　山本　彰

立花正治、村上富喜子、三好孝一

また、現地での調査に際しては日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、八尾警察署等に格別の配慮を受けた。

なお調査及び遺物整理においては、以下の学生諸氏の協力を得た。

一柳知子、谷渕美佐（以上京都女子大学）、菊地百合子（橘女子大学）、芝池佳江（甲南女子大学）、住吉充恵（龍谷大学）、松村知実（梅花女子大学）、池田宏樹、中井保夫、八野　学松井隆史（以上同志社大学）、木本　洋、高瀬洋治（以上奈良大学）、笠井浩三（近畿大学）

また遺物観察表の作成にあたっては三宮昌弘（同志社大学）、清水　篤、福原裕子（以上関西大学）の協力を得た。

7. 花粉・珪藻微化石の分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

8. 出土遺物の整理作業については、現地での調査を担当した大楽、竹原があたったが、本書作成には、概ね、古墳時代以前を大楽が、奈良時代以降を竹原が分担して行った。したがって、本文の記述方法等についての統一はあえてしていない。

本書の執筆分担は以下のとおりである。

第1章　赤木克視、第2章第1節　竹原伸次、第2節～第3節　大楽康宏、第4節～第5節竹原伸次、第6節　大楽康宏、第3章　大楽康宏、竹原伸次

9. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドも作成した。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1.　遺構は、以下のアルファベット記号あるいはその名称、４桁の数字で表記した。

ＳＡ…畦畔、ＳＢ…建物、ＳＤ…溝、ＳＥ…井戸、ＳＫ…土壙、ＮＲ…自然流路、Pit…柱穴等

４桁の最初の数字は時代を表わしている。

３…弥生時代、４…古墳時代、６…奈良時代、８…鎌倉・室町時代、０…不明

４桁の２番目の数字は遺構面を表す。すなわち、31は弥生時代第１遺構面、62は奈良時代第２遺構面である。

４桁の３番目、４番目の数字は同一時代・同一遺構面・同種の遺構の一連番号を表しており、概ね、調査区の北側より順に番号を付している。

2.　本書の遺構実測図は国土座標第Ⅱ系の座標を利用しており、標高はすべてＴ．Ｐ．（東京湾標準潮位）を使用した。

3.　本書の遺構実測図に付した地区割については第１章第２節　調査の方法を参照されたい。

亀　井　北

（その3）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　　次

挿 図 目 次

図 版 目 次

付 図 目 次

第1章　は　じ　め　に

第1節　調査にいたる経過

亀井北遺跡は、大阪市平野区加美南から八尾市北亀井町にかけて所在する。府道中央環状線中央分離帯内で建設が進められている近畿自動車道天理～吹田線（通称・大阪線）内に存在する15遺跡の中では、最も新しく発見された遺跡である。路線内での遺跡の範囲は、北は国鉄関西線までで、線路を隔てて久宝寺遺跡と接している。南は国道25号線と交差する亀井交差点北約80mまでで、従来亀井遺跡の北限とされていた所である。

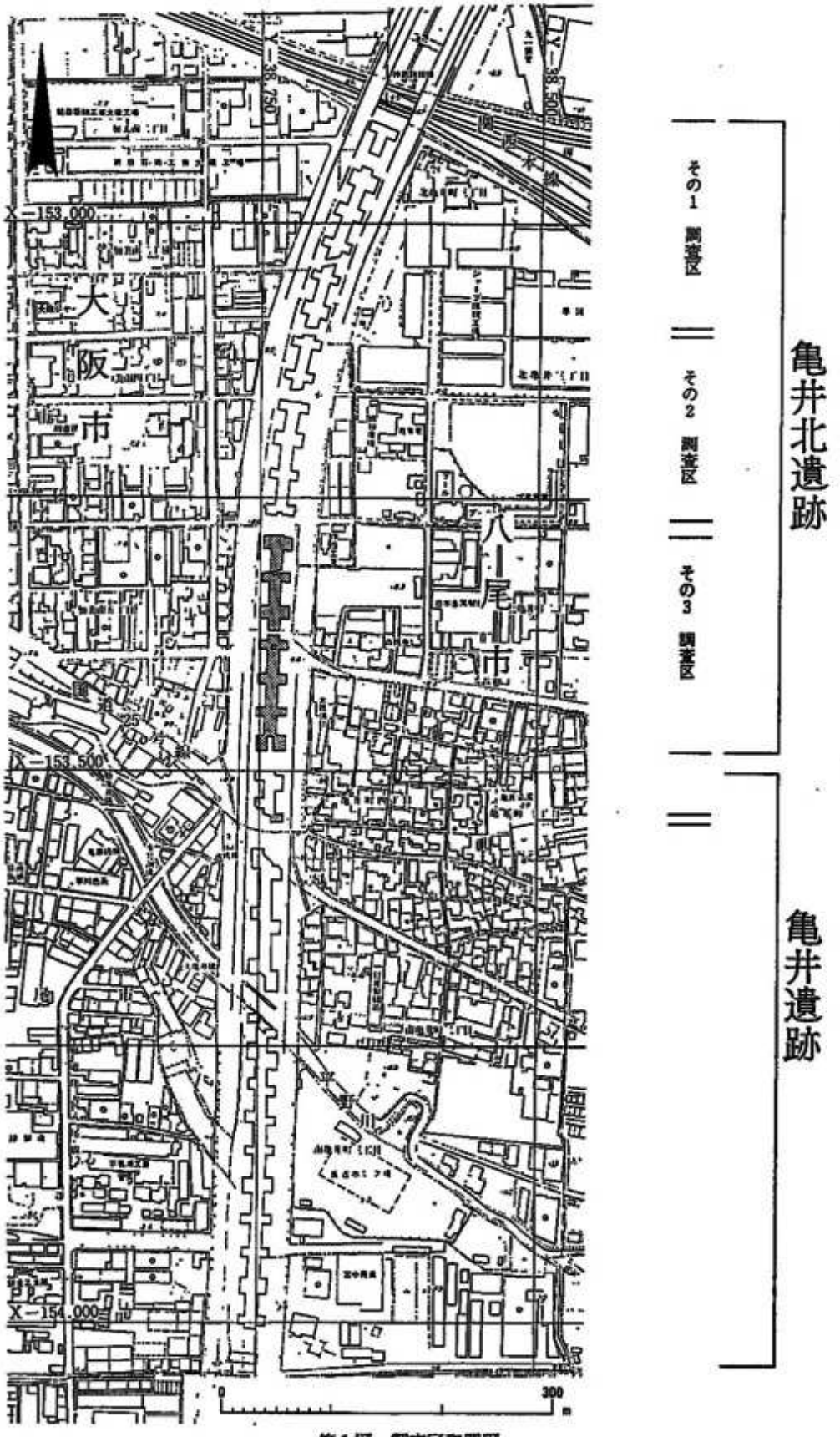
この地域は、昭和48年度に実施された亀井遺跡の実態把握のための第１次調査において、遺跡の範囲外とされていた。それは、道路公団の測量測点でＳＴＡ129＋40付近（亀井北遺跡Ｇトレンチ内）に設定されたNo.32トレンチで遺構、遺物が全く検出されなかったこと、亀井交差点北のＳＴＡ131＋00付近（亀井遺跡Ａトレンチ内）に設定されたNo.33トレンチで砂層中から僅かな土器片が出土したのみであったために、No.33トレンチのやや北が亀井遺跡の北限と判断されたからである。この時の調査は、調査面積が極めて少なかったことと、掘削が機械を主としたものであったために、遺構、遺物の散漫な場所ではそれらを発見できない弱点があった。特に、遺構、遺物の極めて少ない水田面については、ほとんど検出できなかった。このようなことから、広い面積を人力にて調査した本調査においては、新たに相当数の遺構面が検出されている。

この地域が遺跡として認識されるようになったのは、亀井遺跡その１のＡトレンチ、その２の26トレンチにおいて遺構面がさらに北に延びることが明らかになったことと、久宝寺遺跡南地区その２の最南端のＪトレンチにおいても遺構面が途切れなかったことによる。このようなことから、当該地域の少なくとも両端については調査の必要性が生じたために、昭和58年10月から59年２月にかけて当該地域全域にわたって第１次調査を実施することになった。この調査の結果、全域にわたって地表下－4.5mまで遺構面が存在することが判明した。そこで、ただちに亀井北遺跡として本調査に移行することになり、昭和59年３月より調査を開始した。

調査は、ＳＴＡ124＋91から130＋60までの間約570mが対象となったが、調査期間の短縮をはかるためにそれを３分割し、北よりその１、その２、その３調査区とした。その３調査区は、ＳＴＡ128＋69から130＋60までの間191mにＦ～Ｉの４本のトレンチが設定された。

調査の過程で、亀井遺跡との間に一対未調査で残されていた橋脚部を５Ｉ、６Ｉトレンチとして追加調査している。また、亀井遺跡の範囲に属する亀井交差点北東隅のＪ（ＫＭ２－30）トレンチについても、地下埋設管の移設を必要としたため未調査であったが、これも移設の完了後、亀井北その３に含めて調査している。

なお、現地調査は昭和61年２月に終了している。

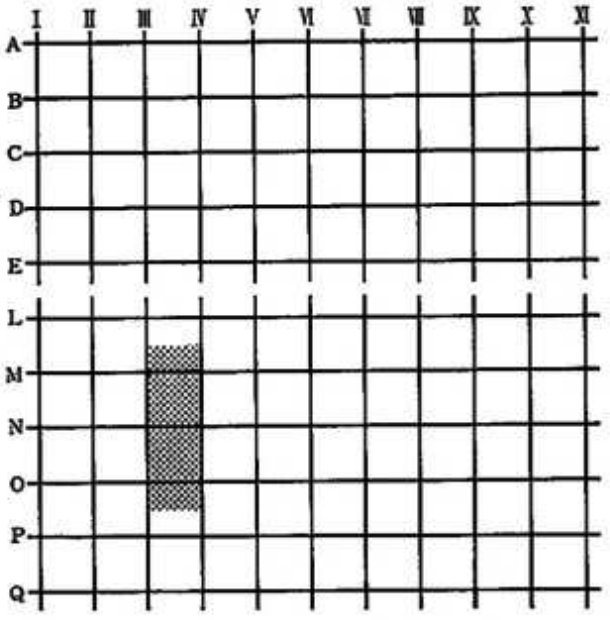

大阪市
八尾市
関西本線
X−153,000
X−153,500
X−154,000
0
300
m
その1 調査区
その2 調査区
その3 調査区
亀井北遺跡
亀井遺跡

第1図　調査区配置図

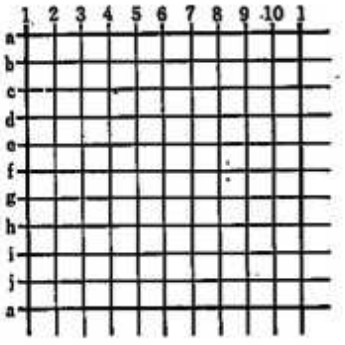
第2節　調査の方法

亀井北遺跡その3の調査は、近畿自動車道天理～吹田線の埋蔵文化財の調査において、瓜生堂遺跡以来採用されている「トレンチ調査方式」で実施された。この方式は、高速道路の高架橋の橋脚の位置を決めるための「トレンチ部の調査」と、それによって決定された橋脚基礎部を対象とする「切拡げ部の調査」の2段階に分けて調査するものである。この方式が採用されたのは、大阪線で最初に調査された長原遺跡の反省からである。長原遺跡においては、橋脚基礎部のみが調査対象であった。ところが、調査の過程で古墳等の保存に値する遺構が検出され、大阪府教育委員会と日本道路公団との間での協議の結果、遺構保存のために橋脚位置が変更された。しかし、その変更した場所でも同様の遺構が検出され、また橋脚位置が変更になるということが何度か繰り返された。その間、多くの時間と経費が費やされた。

こうしたことから、次に行われた瓜生堂遺跡の調査は、以下の方法で実施された。まず「トレンチ部の調査」として、約30mの幅を持つ路線の中央を縦断して幅10mのトレンチを設定し、その範囲で遺構、遺物の分布状況を把握する。現地調査を担当している（財）大阪文化財センターは、速やかにその結果を大阪府教育委員会に報告し、それをもとに大阪府教育委員会は、日本道路公団と協議する。そして、出来るだけ遺構、遺物の破壊の少ない場所に橋脚位置を決定するが、その代わり、決定した橋脚位置は変更しない。その後、「切拡げ部の調査」として、トレンチ部で調査済の部分を除いた橋脚基礎部を調査する。これが「トレンチ調査方式」である。



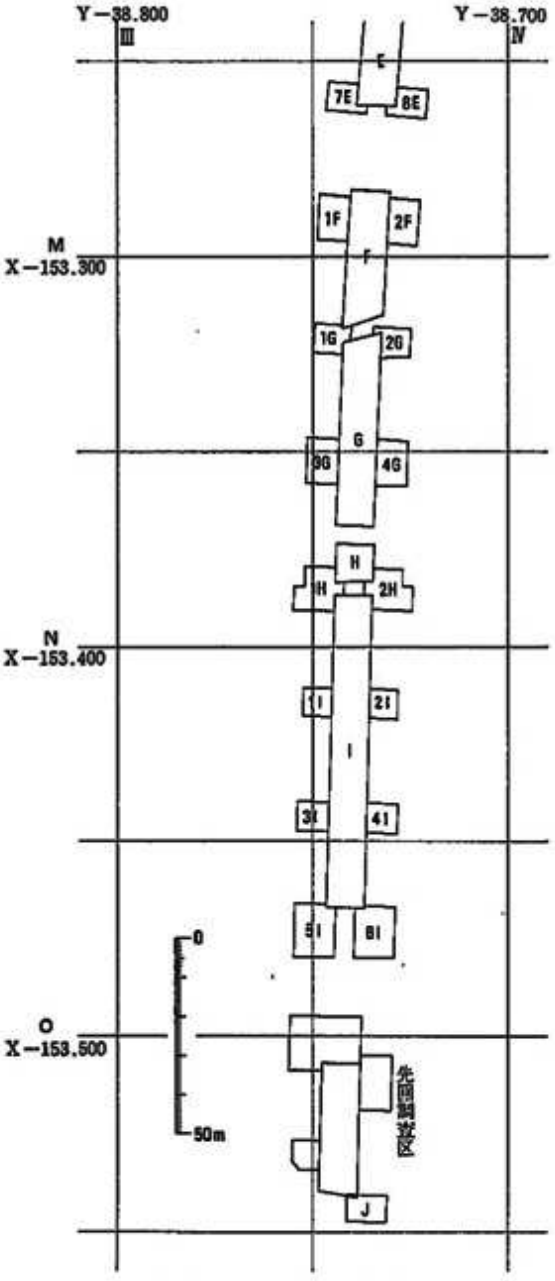
〈大区画〉



〈小区画〉

・大区画は100mグリッド
小区画は10mグリッド
・アミ部分は亀井北その3調査区調査範囲（第3図）
・大区画原点（Aa・I1）は国家座標第Ⅵ系のX－152.100, Y－39.000である。

第2図　地区割の名称



第3図　トレンチ配置及び名称

この方式は、遺構保存と調査期間の短縮との妥協の結果生み出されたものであるが、瓜生堂遺跡の調査が若干の問題はあったものの比較的スムーズに消化されたため、それ以降、すべてこの方式が採用されることになった。

その3調査区は、トレンチが水路、歩道橋、地下埋設管により4分割され、F～Iトレンチと命名された。切拡げ部の調査では、橋脚の両端が調査の対象となるため、原則として左右対称な方形に近いトレンチが並ぶことになる。そこで、切拡げ部のトレンチ番号は、それが属するトレンチ部のトレンチ名を活かし、北西側を1、北東側を2とし、順次南へ同様の方法で命名していくものである。例えば1I、2I、3Iトレンチと呼称される。ただ、亀井遺跡に属するJトレンチについては、例外である。

調査は、GL−4.5mまで掘削するため、SP3型8mの鋼矢板でトレンチを囲い、一段架を架設して安全を期した。また、切拡げ時には、公団の本体工事の関係から8.5mの鋼矢板を打設している。亀井交差点脇のJトレンチについては11mのものを使用した。

地区割については、久宝寺遺跡南地区の地区割を南に延長して使用した。これは、第1次調査の結果から、亀井北遺跡の北半部が遺構分布の上で久宝寺遺跡南地区との関連の強いことが明らかになっていたからである。

この地区割は、国土座標系において東経136°0′、北緯36°0′を原点とする第Ⅱ系の座標を利用したものである。X−152,100.000、Y−39,000.000を基点とし、南へアルファベット大文字、東へローマ数字を使用する100m単位の大区画を設定し、さらにその大区画の中を北西部を基点として10m単位に南へa～j、東へ1～10と細分している。表示はAlalとし、必要に応じてそれを更に南、東へ＋0mとして細分することにしている。その3調査区は、大半がMⅡ、NⅡ区に属するが、Fトレンチの北端部が若干LⅡ区に属している。

第2章　調査の成果

第1節　遺構面と層序

亀井北その3調査区では、現地表下約4.5mまで調査を行なった。土層の観察は、トレンチ部では、各トレンチ西壁、北壁、南壁で行った。また、地区割X軸に合わせて、10m間隔で畔をのこし、調査の綿密化をはかった。切り広げ部では、各トレンチの北壁と、中央環状線側で、土層の観察を行った。トレンチ部、切り広げ部とも調査終了後、約1mの深さで筋掘りを実施し、最終面以下の土層の観察をした。

本調査区は、全長約190mにもおよぶ為、層位は、複雑な様相を示めしている。特にH、Iトレンチでは、自然流路の流入によって遺構面が分断されており、各トレンチにおける同一遺構面の確認に手まどった。

以下、各遺構面を中心に層位の説明をしていきたい（第4図）。

1.　弥生時代遺構面

本調査区では、亀井遺跡調査時には最終遺構面とされていた黒灰色、灰黒色粘土と緑灰色、青灰色粘土の互層を、T.P.+4.4～4.6mで確認した。この互層中より、縄文・弥生時代第1、第2遺構面、弥生時代第1～第5遺構面の計7面の遺構面を確認した。今回の調査では、この互層に便宜的に番号を与えた。これにそって説明すると縄文・弥生第1遺構面は、第5黒色帯、黒灰色粘土をベースとしている。亀井北その2調査区における縄文面に相当すると思われる面である。縄文・弥生第2遺構面は、第4緑色帯、暗青灰色粘土をベースとする。層厚は、10～20cmである。弥生時代第1遺構面は、第4黒色帯、黒褐色粘土をベースとする。層厚は、20～40cmである。弥生前期土器片を1点出土した。弥生時代第2遺構面は、第2緑色帯、淡緑灰色粘土、緑灰色粘土、暗緑灰色粘土をベースとする。層厚は、10～25cmである。弥生時代第3遺構面は、第2黒色帯、暗緑灰色粘土をベースとする。層厚は、15～25cmである。この面で、亀井遺跡Aトレンチにおける弥生中期大溝群と関係あると思われる大溝を検出した。層厚は約10cmである。弥生時代第4遺構面は、第1緑色帯、緑灰色粘土をベースとする。層厚は、10～20cmである。弥生時代第5遺構面は、第1黒色帯、黒灰色粘土をベースとする。層厚は、20～30cmである。弥生時代第6遺構面は、淡青灰色粘土、Iトレンチでは、淡青灰色シルトをベースとする。層厚は、10～30cmである。弥生時代後期の水田と、亀井遺跡Aトレンチにおける弥生後期大溝群と関係あると思われる大溝を検出した。この遺構面の上層には、NR3601のオーバーフローによる砂層が、約40cm堆積している。弥生時代第7遺構面は、青灰色粘土、暗青灰色粘土をベースとする。層厚は、10～20cmである。

2.　古墳時代遺構面

本調査区では、古墳時代遺構面は、4面確認した。古墳時代第1遺構面は、青灰色粘土、青灰色シルトなどをベースとする。層厚は、35～70cmである。Hトレンチでは、古墳時代第1遺構面、NR4101の砂層が、約100cm堆積している。古墳時代第2遺構面は、Iトレンチ Nc ライン以南で検出された。ベースとなる層は、暗灰色シルト、暗灰色砂質シルト、暗灰褐色砂質シルト、暗黄灰色細砂などである。層厚は、30～40cmである。古墳時代第3遺構面は、ベースとなる層が大きく2つに分かれる。また、遺構の様相もベースによって異なってくる。Iトレンチ、Nb ライン以北は、灰色粘土、暗褐色砂質土をベースとしている。大畦畔状の土堤を検出した。水田面であると思われる。Iトレンチ、Nd ライン以南では、暗灰褐色シルト、灰色細砂、暗青灰色シルトなどをベースとし、溝、土壙などを検出した。層厚は、Nb ライン以北の水田と考えられる面は、5～20cm、Nd ライン以南の溝などを検出した面は、約30cmである。古墳時代第3遺構面の上層には、層厚5～20cmで、黒灰色有機質土が堆積している。この層は、植物遺体を多量に含んでおり、一部削平を受けているものの全トレンチで確認した。また、この層は亀井北その1、その2調査区でも確認され、亀井北遺跡全域にわたるひとつの鍵層となっている。古墳時代第4遺構面は、暗灰色粘土をベースとしている。古墳時代後期の水田面である。層厚は、5～30cmである。また、Iトレンチ中央部では、この面から約20mの川幅をもつNR4401が検出された。この遺構面の上層には、NR4401のオーバーフローである古墳時代砂層が約1.0m堆積し、遺構面全体を覆っている。

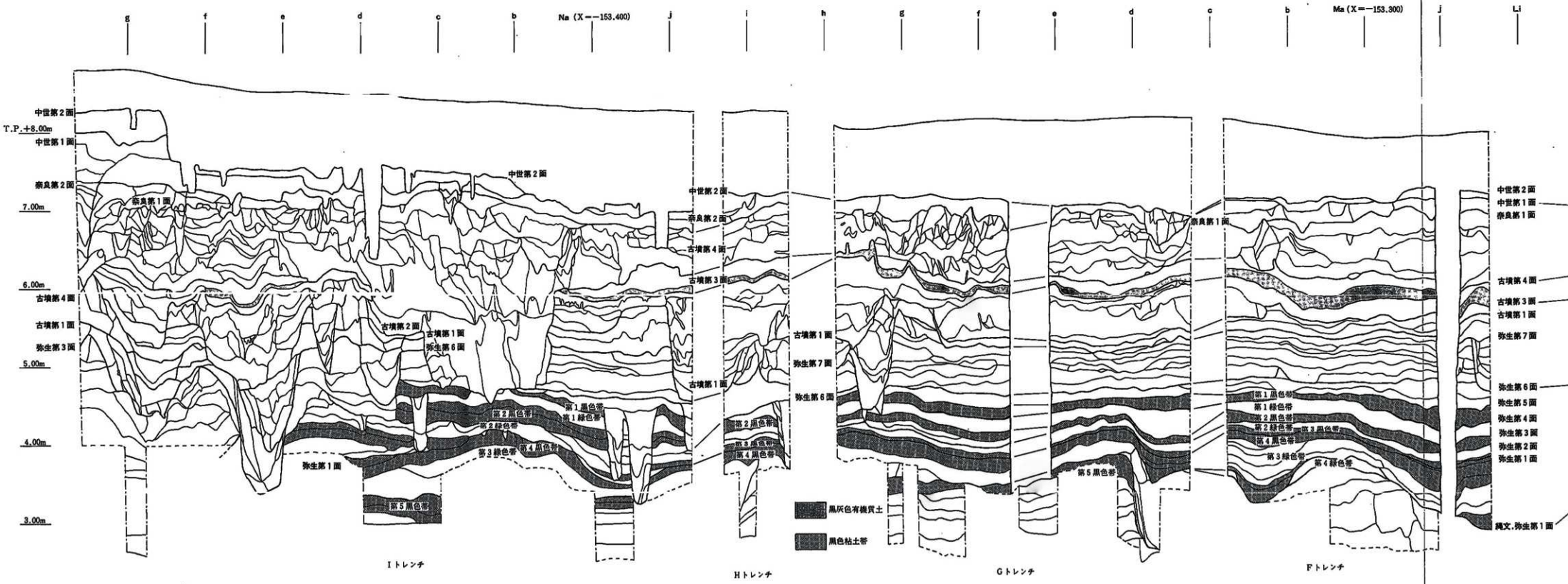
3. 奈良時代遺構面

本調査区では、奈良時代遺構面は、2面確認した。奈良時代第1遺構面は、古墳時代砂層上面の起伏をならした整地土をベースとする。整地土は、暗茶灰色シルト、褐灰色シルト、粘質土、暗灰色シルトなどから構成されている。掘立柱建物に伴う柱穴を多数検出した。

奈良時代第2遺構面は、淡黄褐色砂泥、灰褐色シルト、淡赤褐色シルトなどをベースとしている。これらの層も整地土と考えられる。この面からは、亀井遺跡で検出されていたNR6001（亀井北遺跡その3調査区ではNR6201）の北側肩を検出した。亀井遺跡の調査成果から考え合せるとこの流路は、幅約195m以上にもなる。層厚は、両遺構面とも約20cmである。

4. 中世遺構面

中世遺構面は、2面検出した。中世遺構面で特徴的なことは、Iトレンチ、Nf ライン付近に段が作出されることである。この段は、NR6201の自然堤防を利用して作出されたものと思われ、現在の亀井集落も、この上面に営なまれている。中世第1遺構面は、暗黄褐色砂泥、淡茶褐色シルト、暗灰茶色粘土層をベースとし、中世第2遺構面は、茶灰色粘質土、茶褐色土、淡黄褐色砂泥、暗灰褐色土層をベースとしている。層厚は、両遺構面とも上段で30～40cm、下段で10～20cmである。



第4図　F・G・H・Iトレンチ土層断面図　S=水平1：400　垂直1：40

第2節　弥　生　時　代

亀井北遺跡その3調査区においては、後述するように弥生時代後期以降は遺構の数も増す。出土遺物に関しても同様であるが、それ以前の時期に相当する各遺構面は、遺構自体が少なく、遺物からも、その時期の決定が困難である。将来的には、亀井北遺跡における他の調査区との比較検討を行うことにより、詳細な年代観があたえられなければならないが、ここでは弥生時代第1遺構面とした面より下面は、便宜的に縄文～弥生時代遺構面とした。また本調査区では、調査の方法的な問題つまり鋼矢板等による土止めの強度・安全性の面から、概ね掘削深度を現地表面から4.5mないしは5.0mとしている。したがって各トレンチでの現地表面の高低差により最終掘削面が必ずしも同一面とはならない。それより下層については小規模なサブトレンチを設定して遺構の有無の確認を行うにとどまった。このため、本調査区の最終遺構面である縄文～弥生時代第1遺構面は地山を切り込む遺構面、つまり亀井北遺跡の最終遺構面であるとはいえない。サブトレンチからは遺構、遺物等まったく検出されていないが、5Ｉトレンチのサブトレンチでの試料によって行った珪藻分析からは、T.P.+2.75m付近に縄文海進時の古海岸線があったとされており、縄文～弥生時代第1遺構面より下面に遺構面が存在する可能性はある。

縄文時代から弥生時代中期ごろまでの亀井北遺跡その3調査区は、洪水氾濫にみまわれることなく安定した環境であるが、遺構密度はきわめて低い。弥生時代中期から後期にかけては、調査区内を大河道が流入したり、かなり不安定な状況であるにもかかわらず、遺構、遺物ともに増加する。また水田が経営される。この傾向は古墳時代へと続いてゆく。亀井北遺跡その3調査区において、縄文時代から弥生時代に相当するであろう遺構面は全部で9面検出した。

縄文～弥生時代第1遺構面は自然流路を検出した面で、T.P.+3.4～3.8mを測る。本調査区の北側にあたる亀井北遺跡その2調査区Ｅトレンチで検出された同一と考えられる流路内からは、縄文土器が出土している。またこの自然流路の埋没砂層上面で溝を1条検出している。同第2遺構面はT.P.+3.5～3.7m付近で、蛇行する自然流路を検出している。時期についてはまったく不明である。

弥生時代第1遺構面はT.P.+3.5～4.1mを測り、調査区全域に拡がる。この遺構面のベース層から弥生時代前期と思われる土器片が若干出土しており、この面より上面を弥生時代遺構面とよぶ。溝、ピットなどを検出した。同第2遺構面はT.P.+3.8～4.4mを測る。Ｉトレンチにおいてのみ、溝、土壙、ピットを検出した。また大河道を検出している。同第3遺構面はT.P.+3.9～4.5mを測り、Ｇトレンチでのみ溝とピットを検出した。同第4遺構面はT.P.+4.1～4.7mを測り、Ｉトレンチ中央で溝を1条検出した。同第5遺構面はT.P.+4.3～4.8mを測る。密度は低いながらもほぼ調査区全域で遺構を検出している。同第6遺構面はT.P.+4.7m付近を上面とする水田址の面である。畦畔などが検出され、弥生時代後期と考えられる。同第7遺構面はT.P.+5.1～5.4mを測り、溝、土壙などを検出した。

縄文～弥生時代第１遺構面（付図１　図版２）

縄文～弥生時代第１遺構面は、先にも述べたように、掘削深度の関係から、Ｇトレンチの**Ｍｄ**ライン以北でのみ検出した。この検出面のほとんどが自然流路ＮＲ0101の埋没砂層の上面である。１Ｆトレンチ、２Ｆトレンチではこの砂層を切り込む溝を１条検出している。

ＮＲ0101　１Ｆトレンチで西肩を検出した大河道である。幅、深さともに不明であり、Ｆトレンチのサブトレンチでは**Ｔ.Ｐ.**+2.5m（肩からの深さ1.3m）まで掘削したが、底を確認できなかった。またＧトレンチ中央部のサブトレンチでは砂層が確認されず、おそらくは**Ｍｄ**ラインと**Ｍｅ**ラインの間で大きく蛇行した肩が存在すると思われる。遺物はまったく出土せず、その時期は不明であるが、亀井北遺跡その２調査区の南部Ｅトレンチでもこの**ＮＲ0101**と考えられる流路が検出されており、これより縄文土器が出土している。当該期の大河道である可能性が高い。

ＳＤ0101　１Ｇトレンチ、２Ｇトレンチで、地区割で言うと**Ⅱ６・Ｍｂ**、**Ｍｃ**区と**Ⅱ７**、**Ⅱ８・Ｍｃ**区で検出した溝である。Ｇトレンチ部分では北壁セクション等により検出できなかった。２Ｇトレンチ東端より１Ｇトレンチ東端まではほぼ東西方向であるが、１Ｇトレンチで大きく北へ曲がる。幅1.4～3.0m、深さ0.2～0.4mを測り、埋土は淡灰色細砂または淡青灰色粘質シルトである。

縄文～弥生時代第２遺構面（付図１　図版２）

縄文～弥生時代第２遺構面は縄文～弥生時代第１遺構面と同様にＧトレンチ**Ｍｄ**ライン以北でのみ検出した自然流路の流れる面である。

ＮＲ0201　Ｆトレンチ、１Ｆトレンチで検出した自然流路である。Ｆトレンチ北端、１Ｆトレンチでは幅約９ｍを測り、Ｆトレンチ南端では幅約６ｍほどである。深さは0.6～0.7mで、埋土は淡青灰色粘土など青灰色系粘土と黒色粘土などの黒灰色系粘土がほぼ互層となっている。ほとんど流れのないよどみであったと考えられる。

弥生時代第１遺構面（付図２　図版３）

弥生時代第１遺構面は調査区全域に拡がる遺構面であるが、遺構密度は低い。わずかにＦトレンチでピット１基、Ｉトレンチ・１Ｉトレンチ・２Ｉトレンチで溝３条を検出したのみである。調査区全体にほぼ均等に堆積する黒褐色土層をベースとしている。

Pit 3101　Ｆトレンチ北端、**Ⅱ７・Ｌｉ**区で検出したピットである。東西0.35m・南北0.4mの楕円形を呈し、深さは0.25mを測る。断面はすり鉢状で埋土は淡灰色粘土である。他にピットは検出されず、その性格は不明である。

ＳＤ3101・3102・3103　Ｉトレンチ北半部、１Ｉトレンチ、２Ｉトレンチで検出した溝群である。ＳＤ3101はＩトレンチの**Ⅱ６・Ｎｂ**区、ＳＤ3102はＩトレンチと１Ｉトレンチ、**Ⅱ６**、**Ⅱ７・Ｎｂ**区、ＳＤ3103は２Ｉトレンチの**Ⅱ７・Ｎｂ**区でそれぞれ検出した。幅は0.4m前後であり、深さは0.05～0.1mである。埋土は各溝ともに黒灰色粘土である。幅が均等なことなどから人工的なものであることは明らかであるが、性格については不明である。

弥生時代第2遺構面（付図3　第5～7図　図版3～5）

弥生時代第2遺構面は調査区全域に拡がるが、南半部においてのみ遺構が認められた。Ｉトレンチで溝1条、土壙3基、ピット2基を検出し、南端には河道が存在する。調査区北半は淡緑灰色粘土層をベースとしているが、南半では緑灰色粘土層あるいは暗緑灰色粘土層となる。

ＳＤ3201　Ｉトレンチ中央部のⅠ6、Ⅱ7・Ｎｃ区で検出した溝である。主軸はＮ―68°―Ｅで、幅は2.0～3.0m、深さ0.1mを測る。北肩の一部を上面、弥生時代第4遺構面のＳＤ3401によって削られている。埋土は暗灰緑色粘土・淡灰茶色微砂混合層でわずかに植物遺体を含む。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＫ3201　Ｉトレンチ北端のⅠ6・Ｍｊ区で検出した土壙である。北半を上面、弥生時代第6面の自然流路ＮＲ3601に削りとられている。残存部で東西1.8m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰緑色粘土で、遺物はまったく出土しなかった。

ＳＫ3202　Ｉトレンチ中央部のⅠ6・Ｎｃ区で検出した土壙である。一部をＳＤ3201に削られており全体は不明であるが、長楕円形を呈すると思われる。短径は1.0m、長径は2.5m程度と思われ、深さは0.1mである。埋土は黒灰色シルトで、遺物は出土しなかった。

ＳＫ3203　Ｉトレンチ中央部のⅠ6・Ｎｃ、Ｎｄ区で検出した土壙である。一部は西壁セクションにかかるが、検出部分で南北1.0m、深さ0.15mを測る。埋土は黒灰色シルトで、遺物は出土しなかった。

Pit 3201　Ｉトレンチ北半、Ⅱ7・Ｎａ区で検出したピットである。直径は0.5m、深さ0.1mを測り、埋土は暗灰緑色粘土である。

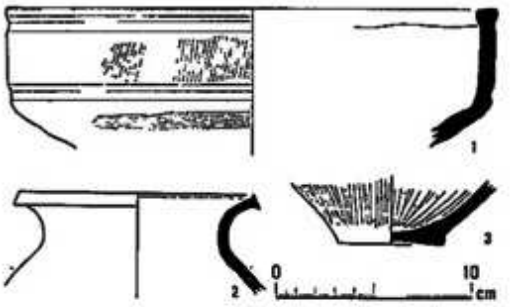
Pit 3202　Ｉトレンチ北半、Ⅱ6・Ｎｂ区で検出したピットである。直径は0.4m、深さ0.1mを測り、埋土は暗灰緑色粘土である。

Pit 3201、3202ともに性格は不明であるが、両ピットとも規模、埋土とも類似しており、関連があるものと考えられる。

ＮＲ3201（第5～7図）　調査区南端を南東から北西へと流れる自然流路である。右岸(北岸)をＩトレンチおよび3Ｉトレンチで、左岸（南岸）を5Ｉトレンチにおいてそれぞれ検出した。流れの方向は調査区内においてはほぼ直線的で、川幅は約20mを測る大河道である。Ｆトレンチなどと同様に、鋼矢板による土止め強度等の関係から川底の確認はできず詳細は不明ではあるが、流心付近に設定したテストピットによると深さ3m以上あると思われる。このＮＲ3201は、ほとんどが粗砂、砂礫、シルトによって埋没しており、それらが複雑な互層となっている。またこれらの層からの遺物の出土は見なかった。この砂礫層により河道がおおかた埋没し、その後には深さ0.3～0.5mのよどんだ状態の流路になったものと思われ、暗灰色粘土、暗茶灰色粘土などを埋土としている。最終的には、幅10m程度の浅い流路となり完全に埋没する。

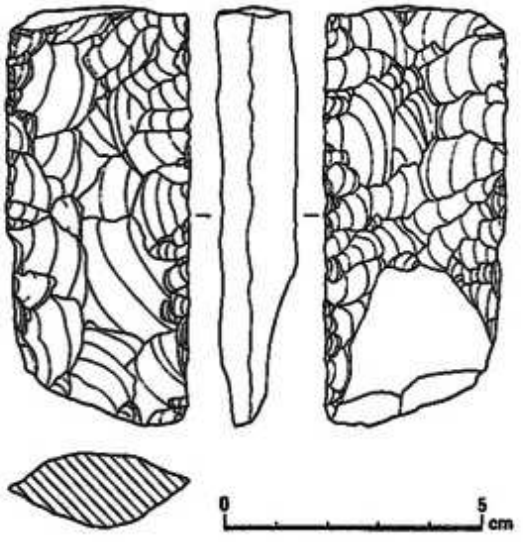
調査地周辺にはこの時期の河道はみあたらず、おそらくはこのＮＲ3201が同時期における平野川の流路であると思われる。

遺物はほとんどが上層の粘土層からの出土である。土器、石器、木製品などコンテナ2箱分ほどである。ここでは土器3点、石器1点、木製品1点をそれぞれ図化した。



第5図　NR3201出土遺物(1)

第5図の1はかなり大型になると思われる壺の口縁部である。復元口径は25cmで、口縁端部は水平な面をなし、端部外面直下と頸部への変換点直上にヨコナデによるゆるい凹線を施す。この凹線の間は粗いハケ調整をタテ方向に行い、頸部上端は同一原体のハケ調整をヨコ方向に施している。2は小型の壺の口頸部で、復元口径は11.8cmを測る。口縁端部はわずかにつまみ上げる。調整は不明である。3は壺の底部である。底部径は5.4cmを測る。外面は細かいヘラミガキを、底部はナデを施しており、内面は細い竹管状のものでヘラケズリされている。全般にていねいなつくりで、全体は不明であるが、器形的には水差しになるかもしれない。



第6図　NR3201出土遺物(2)

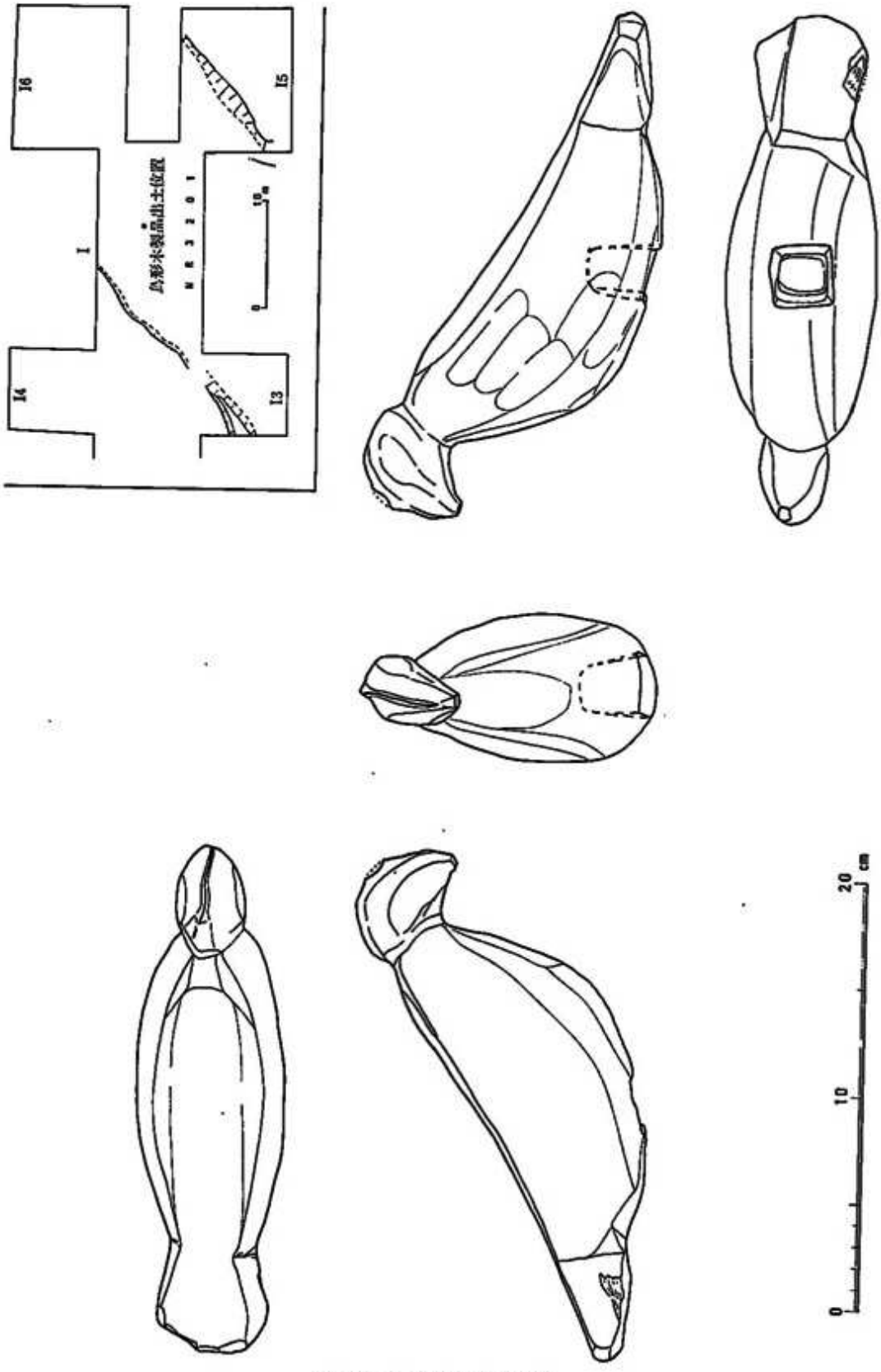
第6図は石槍である。河道の堆積土層中より出土したため、若干のローリングを受けている。

先端部および基部を欠損している。しかし先端部については、折れ面があまりローリングを受けていないことから、廃棄された後に折れたものと思われる。

調整加工は、両側縁より施されており、素材の剥離面はすべて除去されているが、正面側の調整はやや粗雑である。

残存部分は長さ8.2cm、幅3.5cm、厚さ1.6cmをそれぞれ測り、断面はレンズ状を呈している。石材はサヌカイトである。

第7図は鳥形木製品である。この鳥形木製品はほとんどローリングを受けておらず、右側面がわずかに痩せているが、ほぼ原形を保っている。使用材の樹種はコウヤマキである。全長25.6cm、胴部の幅6.8cm、胴部の厚さ7.8cmを測る。腹部には2.7×2.7cmのほぼ正方形、深さ3.5cmの孔を穿っている。頭部は、嘴より後頭までが6.0cm、幅が3.2cmを測り、頭上には鳥類の部位名称でいう「冠羽」を表現していると思われる突起帯をもつ。先端は若干欠損している。嘴は短くやや曲がっているようである。頭部側面は、「耳羽」や「頬」などの鳥類の頭部の特徴を、面をとることによって表わしている。頸部はよくくびれ、頸部から胴部にかけては、大きくふくらませることによって翼のたたまれた状態を造りだしている。「尾羽」は最大幅5.2cmを測り、尾端が弧を描



第７図　ＮＲ3201出土遺物(3)

く丸形とよばれる尾形である。

頭部がやや左右不対称であり、尾部裏面の左側に製作時の割れと思われる欠損があり、すこし不定形ではあるが、全体的には鳥の細部観察をしっかり行った写実的なものといえよう。

弥生時代第3遺構面（付図4　図版6）

弥生時代第3遺構面は調査区全域に拡がるが、遺構はGトレンチにおいて検出された溝1条、ピット1基のみである。またIトレンチ南半は上面の自然流路などに削られている。暗緑灰色粘土層をベースとしている。

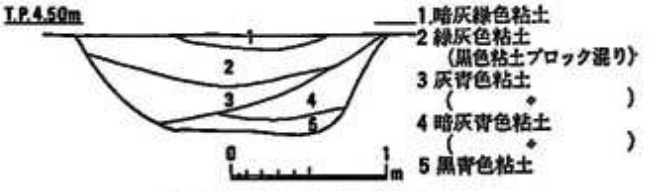
SD3301　Gトレンチ南半、Ⅱ6・Me区で検出した溝である。幅0.3～0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は淡緑灰色粘土である。3Gトレンチでは検出されなかった。

Pit 3301　Gトレンチ中央、Ⅱ7・Md区で検出したピットである。南北0.4m、東西0.3mの隅丸長方形で、深さは0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。他にピットは検出されず、その性格は不明である。

弥生時代第4遺構面（付図4　第8図　図版6）

弥生時代第4遺構面は調査区全域に拡がるが、弥生時代第3遺構面同様、Iトレンチ南半は自然流路などに削られている。遺構はIトレンチ中央で溝1条を検出したのみである。ベース層は各トレンチとも緑灰色粘土であり、北がわずかながら低い。

SD3401（第8図）　Iトレンチ中央のⅡ6、Ⅱ7・Nc区で検出した東西溝である。幅2.0～2.2m、深さ0.5～0.6mを測る。断面は逆台形で、溝の主軸はN－83°－Eである。



第8図　SD3401土層断面図

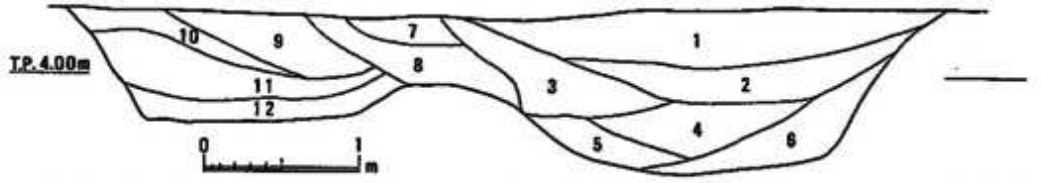
埋土は第8図のとおりであるが、2層～4層は黒色粘土ブロックを含んでいる。この各ブロック土は同質で、また堆積状況などから、このSD3401は開削後それほど時間を経ずに、その掘削土をもちいて埋めたものと思われる。遺物はまったく出土しなかった。

弥生時代第5遺構面（付図5・6　第9図　図版6・7）

弥生時代第5遺構面は調査区全域に拡がる遺構面であるが、Meライン付近より南は自然流路等に削られている。遺構は溝4条、ピット6基を検出している。ベース層は黒灰色粘土である。

SD3501　2Fトレンチ、Ⅱ8・Li、Lj区で検出した南北溝である。西肩のみを検出したが、幅、深さともに不明である。埋土は検出部分においては暗灰色粘質砂泥と淡灰緑色粘土の互層である。

SD3502　Hトレンチの北西隅、Ⅱ6・Mh区で検出した溝である。南肩のみで、幅と深さは不明であるが、北肩はGトレンチでは検出されていない。このSD3502の埋土は、暗青灰色粘土・淡緑灰色粘土・黒灰色粘土・黄茶褐色粘土混合層で、これは、下面の弥生時代第4遺構面SD3401と同様に、開削後、その掘削土を再び埋めもどしたものと考えられ、開削から埋めもどしま



1 暗灰色・黒灰色・緑灰色混合粘土　2 暗灰色粘土(黒灰色粘土・緑灰色粘土ブロックを若干含む)　3 灰色粘土(黒灰色粘土ブロックを若干含む)
4 暗灰色粘土　5 緑灰色・黒灰色混合粘土　6 暗灰色粘土(黒灰色粘土ブロックを含む)　7 緑灰色粘土　8 灰色粘土(緑灰色粘土ブロックを含む)
9 緑灰色粘土(黒灰色粘土ブロックを含む)　10 暗灰色粘土(黒灰色粘土ブロックを若干含む)　11 緑灰色粘土(暗灰色粘土ブロックを含む)
12:黒灰色粘土(緑灰色粘土ブロックを若干含む)

第９図　ＳＤ3503土層断面図

での時間は短いものと思われる。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＤ3503（第９図）　Ｉトレンチ北端部のⅢ６、Ⅲ７・Ｍｊ区で検出した東西に走る溝である。幅は西壁で6.3m、東壁で5.2m を測る。断面は西半はW形を、東半は逆台形を呈し、深さは 0.4～1.0mである。主軸は東西から南北に約5°偏る。埋土は第９図のとおりである。このＳＤ3503はＳＤ3502と同じく、各埋土層にブロックを含んでいたり、ベースとなる各層（上層から、黒灰色粘土・緑灰色粘土・灰黒色粘土・暗緑灰色粘土など）が混ざりあった状態でこの溝の埋土になっているところから、掘削土によって人為的に埋められたものと考えられる。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＤ3504　Ｉトレンチ中央部のⅢ６、Ⅲ７・Ｎｄ区で検出した溝である。幅は3.0～4.0mほどで、深さは0.1mを測る。埋土は灰青色粘土である。遺物はまったく出土しなかった。

Pit 3501　３Ｇトレンチ、Ⅲ６・Ｍｆ区で検出したピットである。直径約0.6m の円形で、断面すり鉢状、深さ0.15mである。埋土は暗灰色粘土である。

Pit 3502　同じく３Ｇトレンチ、Ⅲ６・Ｍｆ区で検出したピットである。Pit 3501から中心で2.4m隔たる。直径約0.5mの円形で、断面半円形、深さ0.15mである。埋土は暗灰色粘土である。

Pit 3503　Pit 3502の南西0.8mに位置するピットである。直径約0.6mの円形で、断面すり鉢状、深さ0.15mである。暗灰色粘土を埋土とする。Pit 3501・Pit 3502 とともにその性格については不明である。

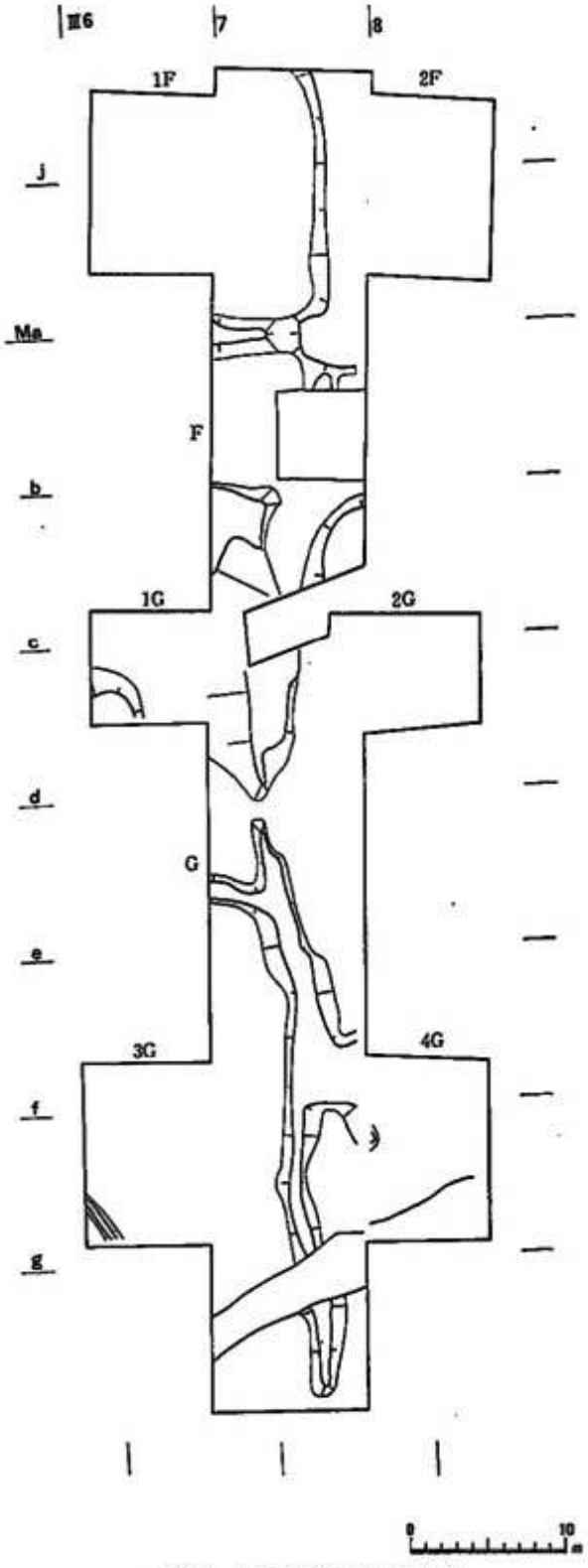
Pit 3504　Ｉトレンチ北端のⅢ６・Ｍｊ区で検出したピットである。ＳＤ3503 の北肩近くに位置する。直径0.4mの円形で、深さは0.1m、埋土は灰色粘土である。

Pit 3505　Ｉトレンチ北端のⅢ６・Ｍｊ区で検出したピットである。ＳＤ3503の北肩近くに位置する。直径0.3mの円形で、深さ0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。

Pit 3506　Ｉトレンチ北端のⅢ６・Ｍｊ区で検出したピットである。Pit 3506 から 1.6m隔たる。直径0.45mの円形で、深さ0.25mを測る。

Pit 3504・Pit 3505・Pit 3506の３ピットの性格は不明ではあるが、付近に他のピットがなく、ＳＤ3503の肩近くに集中すること、また、Pit 3504 と Pit 3506 を結んだ線とＳＤ3503 の主軸がほぼ直交することなどから、Pit 3504・Pit 3505・Pit 3506とＳＤ3503 とは関連を もつものと思われる。

弥生時代第６遺構面（付図７・８　第10～13図　図版８・９）



第10図　弥生時代後期水田畦畔

弥生時代第６遺構面は調査区全域に存在する。調査区の北半は比較的大規模な畦畔によって区画された水田址の面である。またＩトレンチ南半は畦畔が認められず、溝３条を検出した。Ｈトレンチ付近では自然流路を検出している。この遺構面のベースとなる層は淡青灰色粘土であるが、Ｉトレンチあたりではややシルト質になる。Ｇトレンチ北端からＦトレンチにかけては、層厚0.1～0.2mほどの青灰色粘質シルトが被る。

水田面（第10・11図）　Ｆトレンチから Ｉトレンチ北半にかけて、Ｎｂライン以北で検出した。Ｎｂラインのすぐ南側は、上面の古墳時代第４遺構面の大河道ＮＲ4401により削られており、この遺構面はなくなっている。

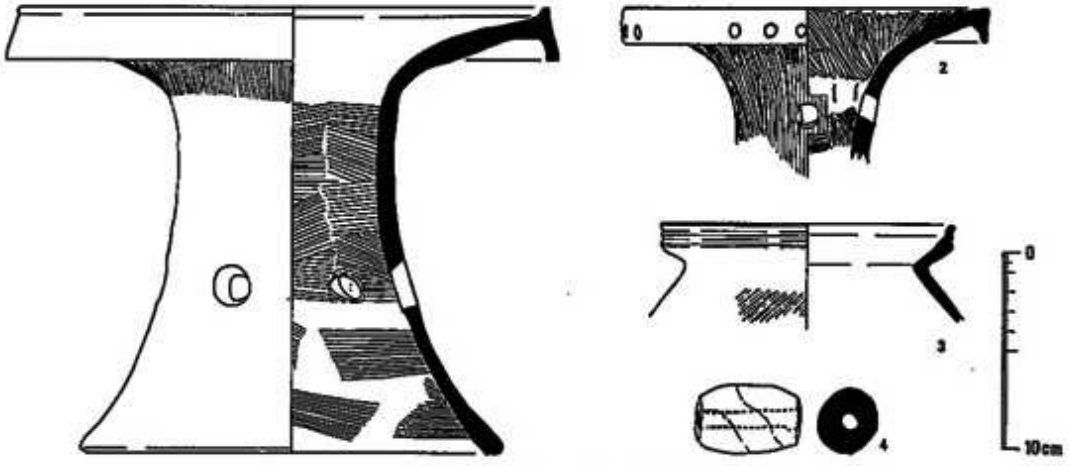
ＦトレンチからＧトレンチにかけては下幅で約２～３ｍ、高さ 0.1m 前後の畦畔で区画された水田である。畦畔は、のこりがわるく詳細が不明な点が多いが、一辺30m前後の、おそらくは方形の区画であると思われる。ほぼ東西・南北の区画で、１Ｆトレンチから Ｆトレンチ北半西側、２Ｇトレンチから Ｇトレンチ北半東側、３Ｇトレンチから Ｇトレンチ南半西側で、それぞれ大きな区画がある。それらの間には小さな区画が存在する。また各畦畔には水口と考えられる２～３ｍの切れ目がある。

各畦畔は断面台形で、水田面のベースである淡青灰色粘土とほぼ同質の土層である。水田耕土をかきあげ、または削り

だして構築したものと思われる。Gトレンチの畦畔のわきには深さ数cmほどの溝状のくぼみがあり、この部分の土を利用して畦畔を積みあげた可能性が強い。

Iトレンチの自然流路NR3601の南側でも畦畔を検出した。この畦畔はFトレンチ・Gトレンチのものよりやや小規模で、下幅0.4〜0.5m、上幅0.2〜0.3m、高さ0.05mを測る。方向はほぼ東西・南北になる。畦畔の残りがわるく、水田の区画は確認できなかった。

以上のような弥生時代第6遺構面の水田は、畦畔の方向がほぼ一定つまり、東西・南北に基準をもった区画によって構成されていると思われ、またこの水田面は亀井北遺跡その3調査区より北にも拡がり、かなり広大なものである。この水田面はNR3601など一帯の流路の氾濫により一気に埋没して廃絶するものと思われ、黄灰色系の粗砂が亀井北遺跡のほぼ全体に被る。本調査区では0.2〜0.4mの厚さである。この砂層帯からはかなりの遺物が出土したが、10cm四方にも満たない小片が多く、またローリングも激しいため図化できるものは少ない。概ね弥生時代全般を通じて遺物が出土している。4点を図化した。



第11図　弥生時代後期砂層出土遺物

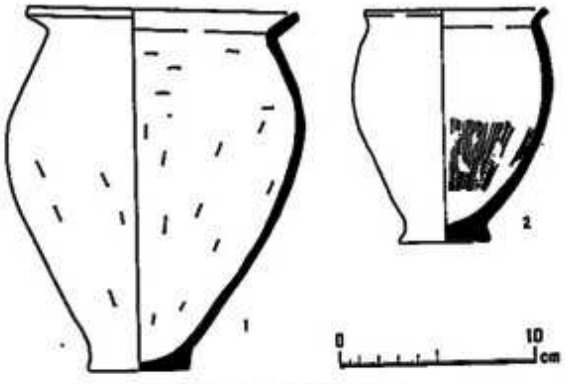
1は器台である。口径26.7cm、底径19.8cm、器高22.8cmを測る。胴部から口縁へは屈曲し、口縁端部は下方に拡張し、また上方へつまみあげる。胴部に円形の透しを6個穿つ。2は器台の口縁部から胴部にかけてである。胴部から口縁にかけては屈曲し、口縁端部は下方へ拡張する。口縁部はハケ目をなで消した後にヘラミガキを行う。口縁端面には直径0.7cmの竹管状原体による刺突文が3個一単位でめぐる。胴部は内面ハケ目、外面ヘラミガキで、透しを4個穿つ。3は甕の口頸部で、口径14.6cmを測る。口縁端部を上方へヨコナデによってつまみあげる。4は土錘で長さ5.4cm、最大径3.4cm、重さ66.2gを測る。親指と人さし指の圧痕を残す。

足跡　弥生時代第6遺構面の水田のほぼ全域で検出された。Fトレンチ、Gトレンチでは、畦畔上にかなり多くみられる。この遺構面で検出した足跡の総数は2,010ほどである。足跡の大きさは22〜24cmほどのものが多く、中には足をすべらせた状態を示すものや、歩行の状態を追えるものもある。それぞれの埋土は、上層の弥生時代後期の砂層と同様の粗砂、細砂などである。

ＳＤ3601　Ｉトレンチ中央部の▌６・Ｎｄ区で検出した溝である。幅は2.5～3.0mあり、深さは最深部で0.6mほどである。このＳＤ3601は、後述のＳＤ3602にほぼ直角につながる。またその部分が一段高く土堤状になっており、その手前はくぼむ。ＳＤ3602からの取水を意識した施設かもしれない。埋土は黄灰色系の砂層で、水田の埋没と同時に埋ったものと思われ、水田に関連のある溝である可能性をもつ。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3602（第12図）　４Ｉトレンチ、Ｉトレンチ中央部、３Ｉトレンチと、調査区を横切る大溝である。地区割でいう▌６、▌７、▌８・Ｎｅ区を走る。幅は５～８ｍほどで、深さは1.2～1.5mである。主軸は南側の肩から類推すると、だいたいＮ―70°―Ｅである。これは亀井遺跡北端の大溝群の方向とほぼ同じである。埋土は下層が粘土で徐々に埋まり、最終的には、弥生時代第６遺構面全体と同一時期に氾濫性の砂層によって埋没したものと思われる。遺物は、下層の粘土層よりの出土がほとんどであるが、細片が多く、２点のみを図化した。

１・２ともに甕である。１は、口径13.7cm、器高18.8cmを測る。口縁はくの字形に折れ、口径より体部最大径の方が大きい。体部外面の下半はヘラケズリのまま、上半はナデ、同内面はヘラケズリを行う。２は口径8.1cm、器高12.0cmのかなり小型で、体部外面の上半はナデ、下半はヘラケズリの後にナデ、同内面は上半はナデ、下半はハケ目を残している。

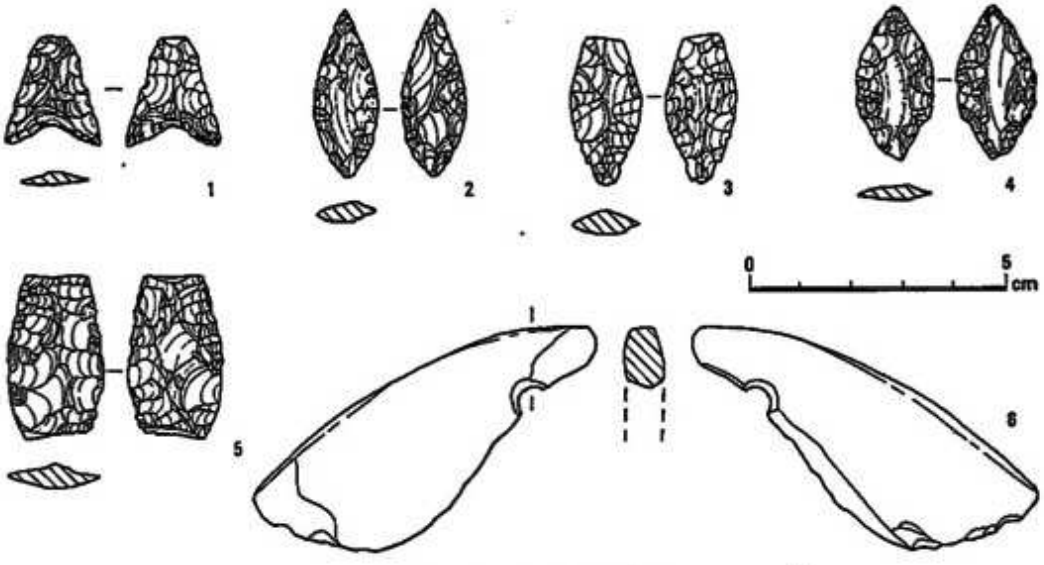


第12図　ＳＤ3602出土遺物

ＳＤ3603　４Ｉトレンチの▌７、▌８・Ｎｅ区で検出した溝である。北側の肩のみを検出した。Ｉトレンチでは検出しておらず、大きく彎曲して南へ走るものと思われる。埋土は上層が淡灰色細砂で一連の砂層と思われ、下層は灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

ＮＲ3601（第13図）　Ｈトレンチ、１Ｈトレンチ、２Ｈトレンチ、Ｉトレンチ北端で検出した流路である。ほぼ南東から北西へ流れる。幅13～15m、深さは0.6mほどを測り、古墳時代第４遺構面の水田を切っている。このＮＲ3601のオーバーフローと考えられる砂層が調査区全体に拡がる。流路自身もほとんどが砂層によって埋まっている。埋没砂層からは多量の遺物が出土し、全部でコンテナ10箱ほどになる。しかし、ほとんどが数cm四方ほどの細片で、ローリングもひどく、土器に関しては図化できるものはないが、弥生時代前期から後期までの遺物を含む。ここでは石器のみを図化しえた。

ＮＲ3601からは、石鏃５点、石庖丁１点、剥片31点が出土したが、製品のみを図示した。１は凹基無茎式石鏃である。先端部を欠損している。正・裏面ともに両側縁から微細な調整加工が施されている。残存長2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。石材はサヌカイトである。２は凸基無茎式石鏃である。正・裏面とも、両側縁から調整加工が施されているが、側縁部のみにとどま



第13図　ＮＲ3601出土遺物

り、両面に素材の剥離面をのこしている。全長3.3cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。石材はサヌカイトである。３は凸基有茎式石鏃である。先端部、基部を欠損している。正・裏面とも、両側縁から微細な調整加工が施されている。残存長2.9cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。石材はサヌカイトである。４は凸基有茎式石鏃である。基部を欠損している。正・裏面とも、両側縁から調整加工が施されているが、両面とも素材の剥離面をのこし、また茎部の調整が不充分なことから、未製品であると思われる。残存長3.0cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。石材はサヌカイトである。５は、先端部および基部を欠損するため、形態は不明である。正・裏面とも、両側縁から微細な調整加工が施されている。残存長3.1cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmを測る。石材はサヌカイトである。６は石庖丁であるが、全体の３分の１を残すにとどまる。割れ面に紐孔の一部を残す。ローリングのため、刃部、使用痕などは不明であるが、肩部には研磨痕が認められる。残存長は6.6cm、高さ4.3cm、厚さ0.8cmを測る。石材は緑泥片岩である。

弥生時代第７遺構面（付図９・10　第14図　図版10・11）

弥生時代第７遺構面は、同第６遺構面を埋没させた弥生時代後期砂層の直上に堆積したシルトや粘土をベース層にしている。またＩトレンチ南半はシルト、粘土などが複雑に堆積している。溝12条、土壙６基の遺構と自然流路、落ち込みを検出した。各遺構からは遺物がほとんど出土せず、時期の決定はしかねるが、上面との関係などから、弥生時代の最終遺構面とした。

ＳＤ3701・3702・3703　　３Ｇトレンチ、Ⅱ６・Ｍｅ、Ｍｆ区で検出した小溝群である。３Ｇトレンチ付近は暗緑灰色粘土をベースとしている。各溝とも幅ほぼ0.3mで、深さは0.05mほどである。埋土は暗青灰色粘土である。

これら３条の溝は、幅、深さ、埋土ともに同様であり、人工的なものであることは確実であるが、その性格については明らかではない。

ＳＤ3704　４Ｇトレンチの▌８・Ｍｅ、Ｍｆ区を走る溝である。ベース層は３Ｇトレンチなどとほぼ同質である。幅1.0～1.2m、深さ0.15mほどであり、埋土は黒灰色粘土である。遺物はまったく出土しなかった。このＳＤ3704は、後述のＳＤ3705にほぼ直角につながっており、両溝は関連があるものと考えられる。

ＳＤ3705　４Ｇトレンチから Ｇトレンチにかけて走るかなり大きな溝である。地区割でいえば、▌７、▌８・Ｍｆ区と▌６、▌７・Ｍｇ区にまたがる。溝の方向はＮ―64°―Ｅに主軸をもち、幅は3.0～4.5mである。深さは0.5～0.8mあり、埋土は大部分がＳＤ3704の埋土に類似した黒灰色系の粘土で、上層最終埋土は灰色粘土である。遺物はまったく出土しなかった。Ｇトレンチ西壁付近でＳＤ3706に切られている。

ＳＤ3706　３Ｇトレンチ、Ｇトレンチ、Ｈトレンチ、２Ｈトレンチの各トレンチを走る、検出長にして40数mの溝である。２Ｈトレンチ南半からは２条にわかれる。溝の主軸はＮ―30°～40°―Ｗである。幅は、肩が調査範囲外であるところが多く、不明な点が多いが、1.0～3.0mほどと思われる。深さは0.2～0.3mほどである。埋土は地点によって若干異なるが、概ね砂まじりの暗灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＤ3707　２Ｈトレンチの北東隅、▌８・Ｍｉ区で検出した。２Ｈトレンチ付近のベース層は灰色粘質砂混である。溝としたが、東側の肩が調査範囲外で詳細は不明である。検出部分での深さ0.3m、埋土は黒灰色粘土で、遺物は出土しなかった。

ＳＤ3708　２Ｈトレンチの▌７、▌８・Ｍｉ区で検出した溝である。東端はＳＫ3701に切られ大きく弧を描いて南壁から調査範囲外となる。幅0.9～1.7m、深さ0.1～0.15m、埋土は砂まじりの暗灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3709　２Ｈトレンチの▌７・Ｍｉ区で検出した溝と思われる遺構である。幅1.1～1.5m、深さ0.1mを測る。埋土はＳＤ3708と同じ砂まじりの暗灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3710　Ｉトレンチ北東隅と２Ｈトレンチにまたがって、▌７・Ｍｉ区で検出した。ＳＤ3709を切っている。Ｈトレンチでは検出されず、南側も調査範囲外のため不明な点が多いが、ここでは溝とした。幅２m前後、深さ0.2～0.3m、埋土は暗灰色粘土である。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＤ3711　Ｉトレンチの▌６・Ｍｊ区で検出した小溝で、幅0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は灰色粘土で、ＳＤ3701～3703と同様の遺構と思われる。

ＳＤ3712　Ｉトレンチ中央と２Ｉトレンチ、３Ｉトレンチで検出した溝である。地区割では▌８・Ｎｂ区と▌６、▌７・Ｎｃ区、▌５、▌６・Ｎｄ、Ｎｅ区である。幅は一定ではなく、3.0～5.0mを測る。深さは0.4～0.7mで、埋土は下層が黒色粘質砂泥、上層は淡黄灰色砂や暗灰褐色シルトなどの砂層である。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＫ3701　２Ｈトレンチ、▌８・Ｍｉ区で検出した土壙である。東半部は、既設地中管の養生

などの関係で不明である。検出部分から、隅丸方形のプランをもつと思われる。深さは0.2mほどで、埋土は黒灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ3702　Ｉトレンチ北端、Ⅱ７・Ｍｊ区で検出した土壙である。北半は上面、古墳時代第１遺構面から切り込む自然流路ＮＲ4101によって削られており、詳細は不明であるが、おそらくは楕円形のプランと思われる。現存部分で、東西1.8m、深さ0.15mを測る。埋土は暗青灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ3703　Ｉトレンチ北端、Ⅱ７・Ｍｊ区で検出した土壙である。ＳＫ3702の西に位置する。不定形のプランをもち、南北1.1m、東西1.3m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰茶色粘質砂泥である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ3704　Ｉトレンチ北端、Ⅱ７・Ｍｊ区で検出した土壙である。ＳＫ3702同様、ＮＲ4101に北半を削られ、詳細は不明である。現存最大幅が0.9m、深さ0.05mを測る。埋土は暗青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ3705　Ｉトレンチ北端、Ⅱ６・Ｍｊ区で検出した土壙である。ＳＫ3704の西に位置する。楕円形のプランをもち、長径1.3m、短径0.9m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰茶色粘質砂泥で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ3706　Ｉトレンチ北部、Ⅱ６・Ｎａ区で検出した土壙である。楕円形のプランをもち、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰茶色粘質砂泥で、遺物は出土しなかった。

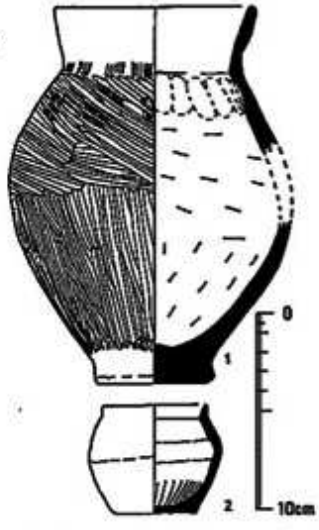
ＮＲ3701　調査区北端の１Ｆトレンチ、Ｆトレンチの Ⅱ６、Ⅱ７・Ｌｉ区で検出した自然流路である。南岸を約13m検出したが、あとは調査範囲外で詳細はまったく不明である。検出部分での深さは約1.5mである。埋土は淡灰色系の粗砂・細砂が中心である。遺物は出土しなかった。

落ち込み3701　Ｉトレンチと４Ｉトレンチで検出した。地区割ではⅡ７、Ⅱ８・Ｎｅ、Ｎｆ区にあたる。東半は調査範囲外であり全体は不明であるが、南北約15m、深さは0.2mほどである。

落ち込み3702（第14図）　Ｉトレンチから６Ｉトレンチで、地区割では、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｎｇ区とⅡ７・Ｎｈ区において検出した。不定形な落ち込みで、底も起伏に富んでいる。おそらくは自然流路のたまりであると思われる。深さは、Ｉトレンチ付近で0.6m、６Ｉトレンチでは0.6～0.8mほどである。埋土は粘土、シルト、砂層が複雑に堆積している。

遺物は若干出土したが、細片が多く、ほぼ完形で出土したものから２点を図化した。両方とも６Ｉトレンチの落ち込み最下層からの出土である。

１は壺で口径10.0cm、器高20.3cmを測る。器形的には短頸壺で、卵形の体部と短い口頸部をもつ。端部は丸くおさめられている。調整は、体部外面の下半がハケの後、たて方向のヘラミガキ、上



第14図　落ち込み3702出土遺物

半はハケの後、やや粗いななめ方向のヘラミガキを施す。内面はヘラケズリで、体部と口頸部の接合時のユビオサエを残す。2は小型の無頸壺で、口径5.2cm、器高5.6cmを測る。胴のはった体部をもち、口縁はわずかにつまみあげる。全体はナデによって仕上げているが、底部内面には成形時の強いハケ目を残す。また体部上半と下半の接合痕を外面に、またその時の強いナデが内面にみられる。

落ち込み3703　5Ⅰトレンチの6・Ng、Nh区で検出した落ち込みである。西側および南側が調査範囲外であり、詳細は不明である。深さは0.3～0.4mぐらいである。埋土は暗灰色粘土を中心にしており、遺物はほとんど出土しなかった。

また、この落ち込み3703と落ち込み3704との間に土堤状の盛り上がりが存在する。これは、下幅約2.4m、上幅0.7～1.2m、高さ0.2～0.3mを測り、断面はカマボコ形である。人工のものと思われるが、性格は不明である。

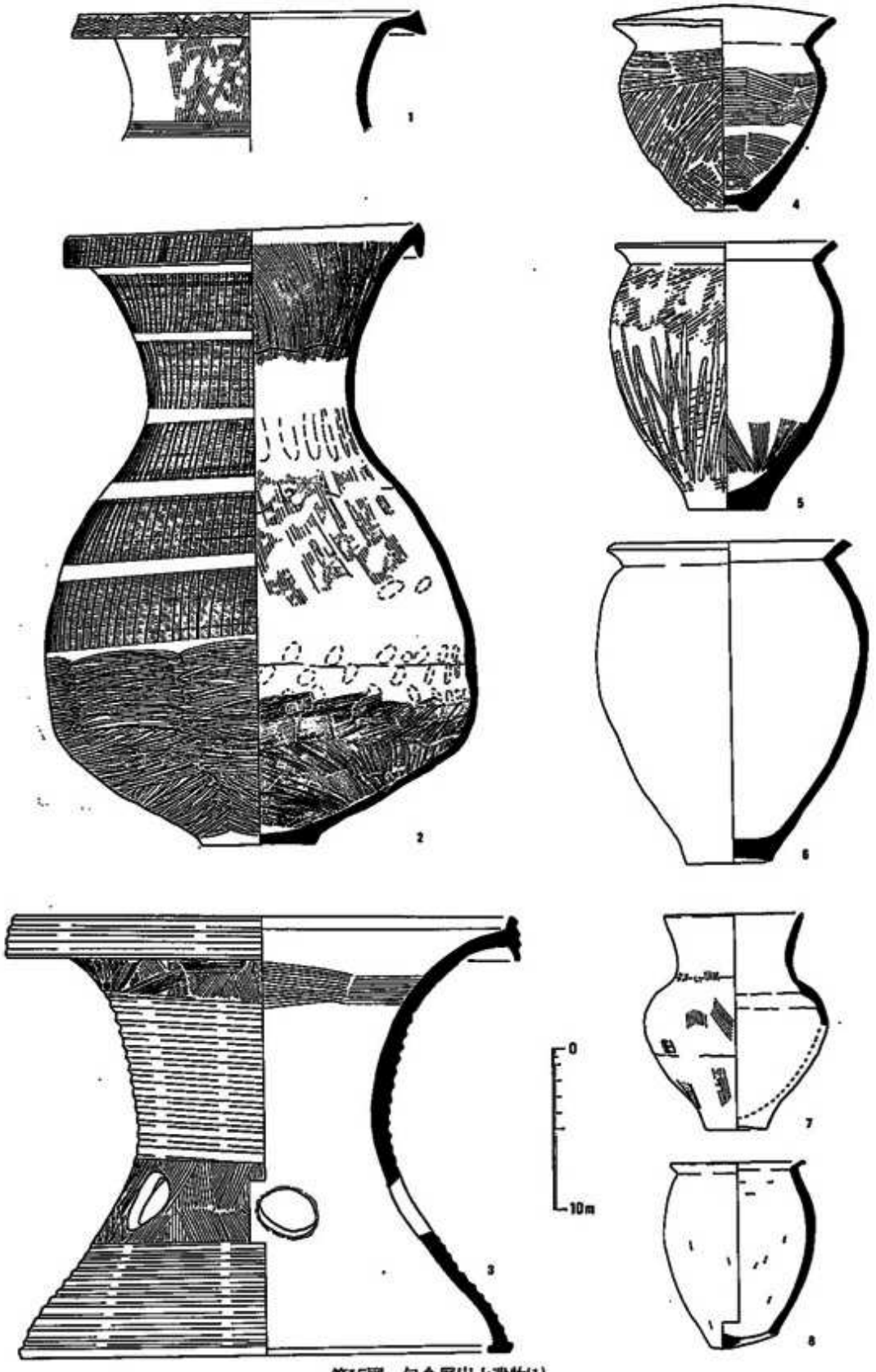
包含層出土の遺物　(第15・16図)

これまで述べてきたように、弥生時代における亀井北遺跡その3調査区は、亀井遺跡として調査を行った地域にくらべると、圧倒的に遺構、出土遺物ともに少ない。まさしく亀井北遺跡その3調査区が、弥生時代の集落としての亀井遺跡の縁辺部であることを物語っていよう。

ここではこれまでに図示した各遺構などからの出土遺物の他の、それぞれの遺構面のベース層や遺構面に被る土層、いわゆる包含層出土の遺物を説明する。

ここでは10点を図化した。それぞれの出土層および地点は、1～3がⅠトレンチ南端の緑灰色砂まじりシルト層で、弥生時代第5遺構面のベース層に相当すると思われる。4～7はⅠトレンチの弥生時代第6遺構面のベース層相当層から、8は同じく4Ⅰトレンチの弥生時代第6遺構面ベース層からの出土である。9・10は4Ⅰトレンチの弥生時代第7遺構面のベース層からの出土である。それぞれの土器は完形またはそれに近い。

1は壺の口縁部である。口径21.2cmを測る。口縁部は大きく開く。口縁端部は、口縁をやや下方へ屈曲させ、上方は断面三角形に拡張し端面をつくる。調整は、頸部外面がハケ目、内面ナデ、口縁部はヨコナデである。口縁端面には6条単位の原体によるクシ描波状文を、また頸部には同一原体によるクシ描直線文を施す。2は壺でほぼ完形である。口径20.8cm、器高38.7cm、底部径7.1cmを測る。体部下半から上半への屈曲部はかなり下方にあり、頸部から口縁にかけてはゆるやかに開く。口縁端部はゆるやかに開く。全体にていねいなつくりで、外面の調整は、体部下半がよこ方向のヘラミガキを緻密に行う。同上半は施文のためナデで仕上げる。内面は、体部下半がこまかいハケ調整を行い、一段目の接合部はヨコハケ、二段目はユビオサエの後に粗いナデ、体部上半はハケ調整の後に粗いナデ、頸部は接合時のユビオサエの上から粗いナデ、口縁部はたて方向のハケ目、端部はヨコナデをそれぞれ施す。文様は、口縁端面に16条単位のクシ描簾状文を、頸部から体部上半にかけて39条単位のクシ描簾状文を5帯施している。3は器台である。口径30.7cm、底部径30.2cm、器高27.8cmを測る。底部から口縁部にかけてはゆるやかなカーブを描

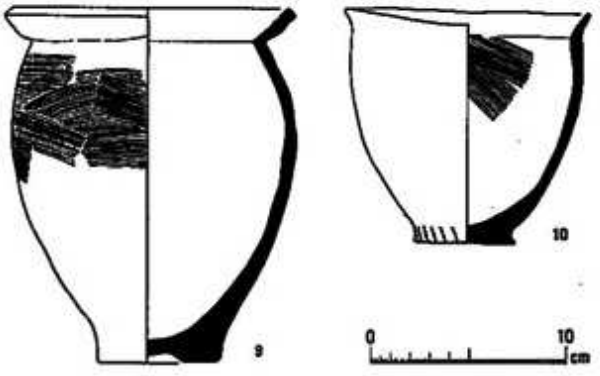


第15図　包含層出土遺物(1)

き、口縁端部は上下に拡張する。調整は外面がハケ、内面は一部によこ方向のハケ目をのこすが他はナデを行う。裾部と胴部そして口縁の端面に凹線をめぐらせる。また裾部と胴部の凹線文帯の間に直径4.0cmほどの円形の透しを5個穿つ。

4は甕である。かなりひずんでいるが、口径約13.5cm、器高12.8cmを測る。体部下半はななめ方向のタタキ、同上半はよこ方向のタタキをもちいる。内面はよこ方向のハケ調整を行う。底部はあげ底である。5は甕である。口径13.5cm、器高16.7cmを測る。体部外面の下半は、タタキの後に粗いナデを施し、その上に粗いヘラミガキを行う。同上半はタタキの後に粗いナデを施す。内面は底部がたて方向のハケ目、その他はていねいなナデを行う。6も甕で、口径14.3cm、器高20.2cmを測る。口縁はくの字形に折れ、端部は面をもつ。体部は、内・外面ともていねいなナデを行っている。底部はややあげ底である。

7は短頸の壺である。口径8.5cm、器高13.5cmを測る。肩がすこし張り、短かい口頸部をつけ、端部は丸い。体部中央と頸部に成形時の接合痕がのこる。調整はハケの後にナデによって仕上げている。部分的にハケ目がのこる。ややあげ底である。8は小型の甕である。口径8.2cm、器高11.7cmを測る。かなり粗いつくりで、内・外面ともヘラケズリの後に粗いナデを行う。底部には焼成後の穿孔がある。



第16図　包含層出土遺物(2)

9は甕である。口径14.0cm、器高18.2cmを測る。体部はあまり張らず、頸部には口縁接合痕がのこる。調整は、体部外面の上半にややこまかいハケ目をのこす他は、ほとんどナデによって仕上げている。底部はあげ底である。10も甕である。ややひずんでいるが、口径約12.5cm、器高12.0cmを測る。体部径より口径が上まわり、頸部のくびれも少ない。体部内面にわずかにハケ目をのこすが、全体に粗いナデによって仕上げている。底部は成形時の指頭による圧痕が残る。

第3節　古　墳　時　代

古墳時代における亀井北遺跡その3調査区は、弥生時代における様相にくらべると、やや安定した環境になりつつあり、遺構数も増加する。特にＩトレンチ南半ではほぼ同一方位に主軸をもった溝が各時期にわたって刻まれ、何らかの区画の存在としてとらえられる。また古墳時代中期には、弥生時代後期より途絶えていた水田が再び営まれるようになる。しかしその水田もやがて埋没し、奈良時代末まで遺構はみとめられない。

亀井北遺跡その3調査区において、古墳時代に相当すると考えられる遺構面は全部で4面検出された。

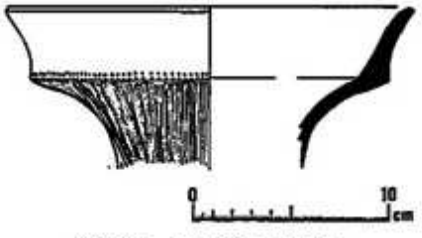
第1遺構面はＴ.Ｐ.＋5.5～5.7m前後で、溝・土壙・自然流路などを検出した。古墳時代前期の遺構面であると考えられる。第2遺構面はＩトレンチ南半（Ｎｃライン以南）のみに存在する。Ｔ.Ｐ.＋5.9m前後で、溝2条と自然流路を検出し、その時期は古墳時代前期～中期に当たる遺構面である。第3遺構面はＴ.Ｐ.＋5.7～6.3mを測り、Ｉトレンチ南半（Ｎｄライン以南）では、溝・土壙を検出した。それより北側は、大畦畔になると思われる土堤を検出し水田址と考えられる。時期は古墳時代中期である。第4遺構面は、ほとんど調査地区全域に拡がる小畦畔で区画された水田址の面で、Ｔ.Ｐ.＋6.0～6.3mを測る。古墳時代後期に相当する。またこの面で幅約20mの河道を検出している。この河道の氾濫堆積による砂層が調査地区一帯を覆い、厚い砂層帯をなしている。その砂層の上面は、Ｔ.Ｐ.＋6.8～7.2mを測る。

古墳時代第1遺構面（付図11・12　第17～20図　図版12）

古墳時代第1遺構面は調査区全域で検出された。調査区北半、Ｆトレンチ・Ｇトレンチでは青灰色粘土を、調査区南半、Ｉトレンチでは青灰色系のシルトなどをベースとしている。

この遺構面では溝3条と土壙1基の遺構と自然流路を検出した。

ＳＤ4101（第17図）　Ｉトレンチの北端部、Ⅱ6、Ⅱ7・Ｍｊ区で検出した東西方向に走る溝である。一部分が自然流路ＮＲ4101に切られている。幅は3.0～4.2m、深さは0.1～0.2mを測る。埋土は緑灰色粘質シルト、灰緑色粘土などである。



第17図　ＳＤ4101出土遺物

遺物は若干出土したが、細片がほとんどで、1点のみ図化した。複合口縁の壺の口縁部で、口径は20.4cmを測る。口縁部はヨコナデ調整を行い、頸部はていねいなヘラミガキ調整を行っている。口縁の屈曲部分には2個一単位の刺突文を全周に施している。

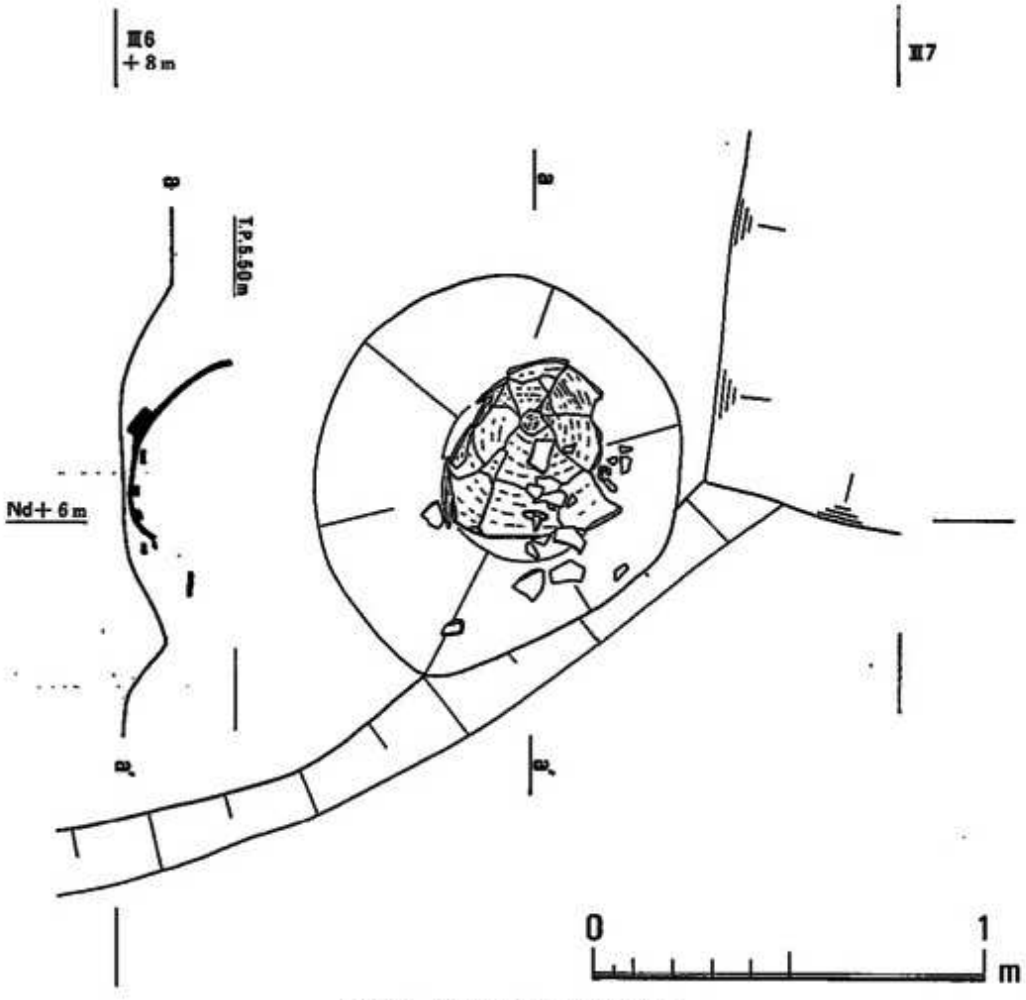
ＳＤ4102　Ｉトレンチ中央部のⅡ6、Ⅱ7・Ｎｃ区で検出した東西溝である。主軸はＮ—60°～70°—Ｅで、幅は2.6～4.0m、深さは0.3～0.4mを測る。埋土は二層にわかれ、上層が暗青灰色粘質シルト、下層が灰茶色粘土である。遺物は壺・甕などの破片が出土したが、いずれも細片

で図化できるものはなかった。

ＳＤ4103　Ｉトレンチの中央部、Ⅱ６・Ｎｄ区で検出した東西方向の溝である。主軸はＳＤ4102とほぼ平行である。南側の肩が、上面である古墳時代第２遺構面から切り込むＳＤ4203によって削りとられている。したがって全体は不明であるが、残存部分で深さ0.2～0.3mを測り、埋土は暗灰褐色砂質シルトである。出土遺物は、壺の破片、高杯の脚部などがあったが、いずれも細片のため図化できるものはなかった。

ＳＫ4101（第18・19図）　Ｉトレンチ中央部、Ⅱ６・Ｎｄ区で検出した土壙である。長径1.1m、短径0.9mの楕円形プランをもち、深さは現存部分で0.15mを測る。長軸はほぼ南北方向である。このＳＫ4101は溝ＳＤ4103の北側の肩を切っており、この溝の埋没後にこの土壙が穿たれている。

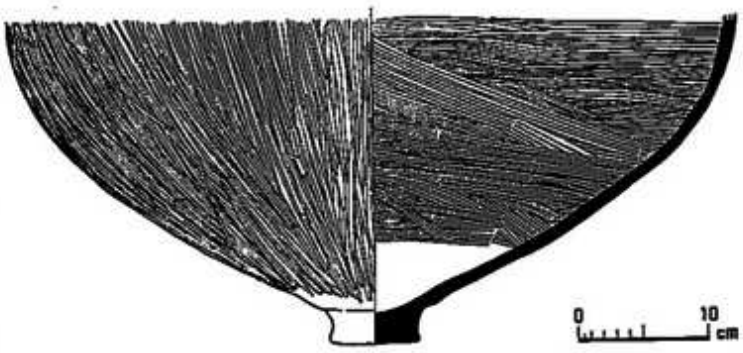
この土壙からは、かなり大型になる壺の底部から体部下半にかけてが出土した。口縁、体部上半は出土しなかったが、上面の古墳時代第２遺構面のＳＤ4203によって削平されているものと思われる。本来は完形に近い壺が置かれていたものと思われ、おそらくはその性格として壺棺が考



第18図　ＳＫ4101平面図・断面図

えられる。人骨・副葬品などは出土しなかった。

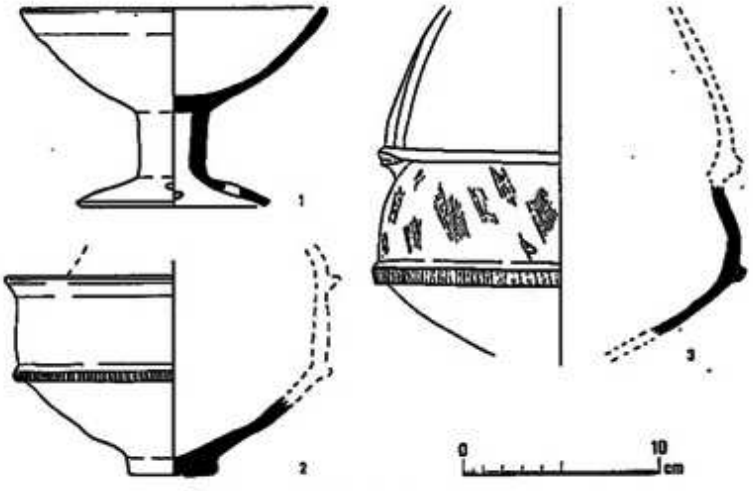
この壺は底部径7.0cm、残存する体部の最大径が55.8cmを測る大型品で、外面はていねいなヘラミガキによる器面調整を行い、内面は、底部のすこし上方から体部までを横方向のハケによって調整を行っている。ハケ目は比較的粗い。



第19図　ＳＫ4101出土遺物

ＮＲ4101（第20図）　Ｆトレンチ南端からＧトレンチ、Ｈトレンチ、Ｉトレンチ北端にかけて、ＭｂラインからＮａラインの間で検出した自然流路である。かなり不安定な流路で、その幅も不規則であり流れの方向もつかめなかった。おそらくは沼状の落ち込みとそれに流入する流路であろう。深さはＦトレンチ南端からＧトレンチ南端にかけては0.4m、Ｇトレンチ南端からＩトレンチ北端まで0.8mを測る。灰色系の粗砂、細砂などにより一気に埋没したようである。埋土最上層は暗青灰色粘質砂泥（植物遺体まじり）である。

遺物は各トレンチで若干出土した。いずれも細片が多い。またこの遺構面の時期より古いものもかなり含まれている。ここでは３点を図化した。いずれも、１Ｈトレンチ、Ⅱ５・Ｍｉ区のＮＲ4101最上層から出土した遺物である。



第20図　ＮＲ4101出土遺物

１は高杯で、坏部口径15.2cm、脚底部径9.2cm、器高10.2cmを測る。椀形の坏部と低く裾が開く脚部をもつ。脚裾部には直径0.8cmほどの円形の透しを４個穿っている。坏部内外面・脚部外面はナデにより仕上げている。全体的には粗いつくりである。２は手焙形土器である。覆部は欠損しており、鉢部のみを残す。腹部には貼付け突帯をめぐらせ、その端面には刻み目を施す。３も手焙形土器で、底部と覆部の一部が欠損している。２にくらべ腹部がはっており、貼付け突帯もしっかりしている。鉢部の口縁端部は覆部との接合部分では突帯となっている。ここでは図化しなかったが、覆部には金属工具によると思われる綾杉文が描かれている。

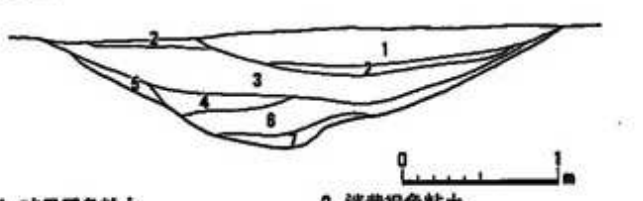
古墳時代第２遺構面（付図13　第21～23図　図版13）

古墳時代第２遺構面は調査区の南側、Ｉトレンチ中央以南のみに存在する遺構面である。この面のベースとなる層はまちまちであり、かなり不安定な遺構面である。

この遺構面では溝２条と自然流路１本を検出した。

ＳＤ4201　Ｉトレンチの中央部である▮６、▮７・Ｎｃ区において検出した溝である。溝の主軸はＮ―60°～70°―Ｅである。北側の肩は上面、古墳時代第４面から切り込む自然流路ＮＲ4401によって削られている。現存する幅は2.5～4.2m、深さは約0.5mを測り、埋土は上層が暗灰茶色粘土、下層が暗灰色粘質シルト（植物遺体まじり）である。遺物は細片のみ出土した。

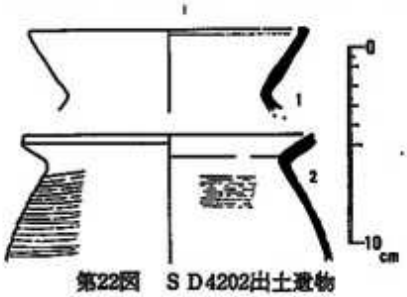
ＳＤ4202（第21・22図）　Ｉトレンチ中央部の▮６、▮７・Ｎｃ区から▮６、▮７・Ｎｄ区にかけて検出した溝である。主軸はＮ―52°―Ｅで、幅が3.0～3.3m、深さは0.7～0.8mを測る。埋土は第21図に示したとおりであるが、下層から順に細砂・微砂などで埋没してゆき、最終的には淡黄褐色粘土、暗黒灰色粘土で埋まる。このＳＤ4202の性格は不明であるが、すぐ南側を流れるＮＲ4201と平行しており、計画的に開削された大溝であると思われる。



1 暗黒灰色粘土　2 淡黄褐色粘土
3 淡灰色微砂・暗灰色粘質泥砂（植物遺体まじり）混合層
4 灰白色微砂（粘土まじり）　5 暗灰色粘質微砂
6 灰白色粘質細砂　7 暗灰色粘質土

第21図　ＳＤ4202土層断面図

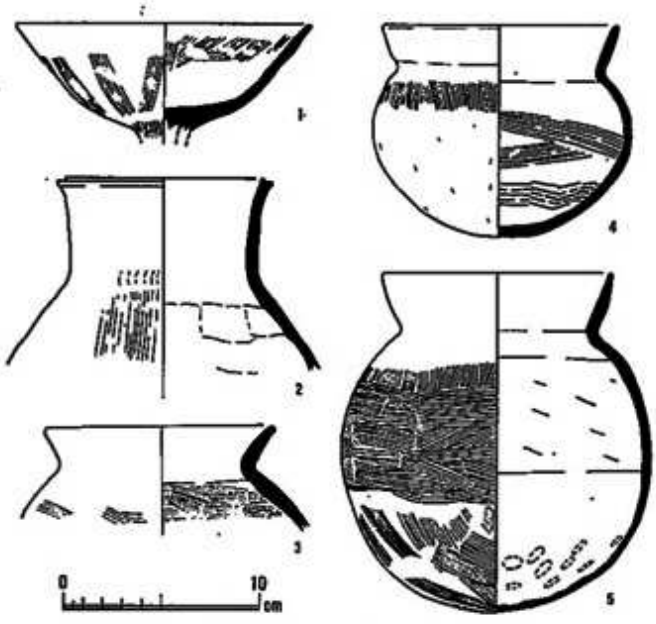
遺物は、ほとんどが下層の細砂・微砂層よりの出土であるが、細片が多く、ここでは２点のみ図化した。１は甕の口縁部で、頸部以下は欠損している。復元口径は13.2cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整を施している。２は甕の口縁部である。腹部以下は欠損している。復元口径は14.6cmを測る。外面はタタキによって仕上げ、内面は粗いハケ調整を行っている。この甕は混入したものと思われる。



第22図　ＳＤ4202出土遺物

ＮＲ4201（第23図）　Ｉトレンチ中央部および３Ｉトレンチ、４Ｉトレンチにかけて、地区割でいえば、▮６、▮７・Ｎｄ区、▮５、▮６、▮７・Ｎｅ区において検出した自然流路である。流れの方向は北東から南西に向いている。幅はＩトレンチ付近では8.0～8.5mであるが、３Ｉトレンチ付近では幅が拡がっており南北両方の肩が調査範囲外であるが、12m以上になるものと思われる。深さは0.6～0.8mを測り、西側の方がわずかに深い。埋土は灰黄色・茶灰色系の粗砂・砂礫が中心であり、比較的大きな礫がまじる層もある。かなり短い時間で一気に埋没したように考えられる。

遺物は土器が中心であるが、杭・流木など、あわせてコンテナに２箱分ほど出土した。いずれも細片が多く、またかなりのローリングを受けているものも多かった。ここでは５点を図化した。



第23図　ＮＲ4201出土遺物

１は高杯の杯部であり、脚部は欠損している。坏部口径は14.8cmを測る。口縁端部はヨコナデ、杯部の内外面はともにハケによる調整を行っている。２は壺の口縁部から肩部にかけてである。復元口径は10.1cmを測る。口縁はヨコナデにより端部を水平方向につまみだし、これにより端面に段をつくりだしている。肩部外面は粗いハケ目、内面は粘土帯接合時のおさえを残す。３は甕の口縁部で口径は、11.3cmを測る。口縁部にヨコナデ、体部外面はハケの後に粗いナデ、内面はていねいなハケ調整を施す。４は壺でほぼ完形である。口径12.0cm、器高10.8cmを測る。口縁部はヨコナデ、頸部にはあまり強くないナデを施す。体部外面はヘラケズリの後、粗いナデを施し、肩部はたて方向のハケを全周させる。内面は粗いハケ目。５は甕でほぼ完形である。口径は11.6cm、器高は17.3cmを測る。球形の体部をもち、口縁部はヨコナデ、体部外面の上半はたて方向のハケの後、よこ方向のていねいなハケによる調整を行い、下半は粗いななめ方向のハケで仕上げる。体部内面は、頸部の接合時の強いナデを残し、上半はヘラケズリを行う。下半はナデを施すが、成形時の指頭圧痕が多数残存している。

古墳時代第３遺構面（付図14・15　第24～27図　図版14・15）

古墳時代第３遺構面は調査区全域で検出されたが、上面の古墳時代第４遺構面から切り込む自然流路ＮＲ4401を境にして北と南では様相が異っている。北側はＮｂライン付近以北で、主に灰色粘土層をベースとし、Ｉトレンチでは一部暗褐色砂質土層がベースとなる。南側はＮｄライン付近以南で、ベースは下面の古墳時代第２遺構面の上に被るシルト・細砂層であるが、安定した層ではない。北側は水田址と考えられ、大畦畔状の土堤を４条検出した。南側においては、溝４条、土壙２基、自然流路１本を検出した。

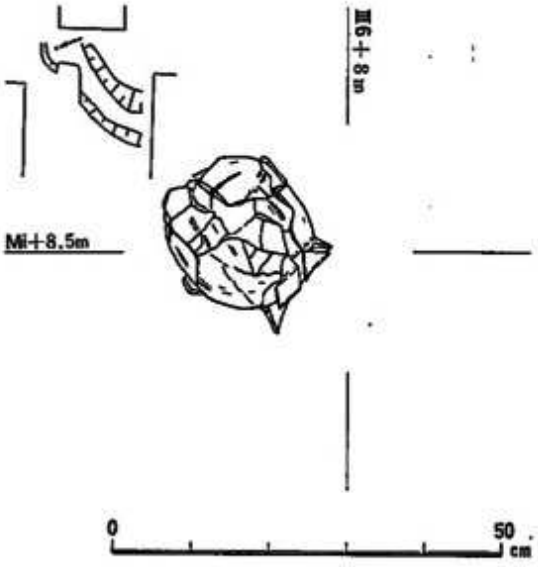
ＳＡ4301　１Ｇトレンチ、Ⅱ６・Ｍｃ区で検出した大畦畔状遺構である。幅は1.7～2.0m、高さ0.1mを測る。トレンチ中央の攪乱をはさんで北側では検出されておらず、攪乱部分にその端があり、これより南西方向へ延び、おそらくはＳＡ4302にとりつくものと思われる。この大畦畔は、古墳時代第３遺構面のベースである灰色粘土層をそのまま盛ることによって構築していると思われ、実際には、ベース土層と盛土層の識別はできなかった。

ＳＡ4302　３Ｇトレンチ、Ｇトレンチ南端部、Ｈトレンチにかけて、Ⅱ６・Ｍｆ、Ｍｇ区およ

びⅡ7・Mh、Mi区で検出した大畦畔状遺構である。検出した延長は30数mであり、さらに3Gトレンチから調査範囲外へと続く。全体的にやや弧を描きながらHトレンチで終る。後世の攪乱を受けていたり、調査範囲外であったりで全体は不明であるが、3Gトレンチでは幅約3.5m、高さ約0.5mを、Hトレンチでは高さ約0.4mをそれぞれ測る。畦畔の盛土は、SA4301と同じく、水田面ベースとなる灰色粘土とほとんど識別できず、おそらくは水田の土をかきあげて構築したものと思われるが、部分的にやや砂粒が多くまじることもある。またHトレンチ部分では植物遺体を多く含んでいた。

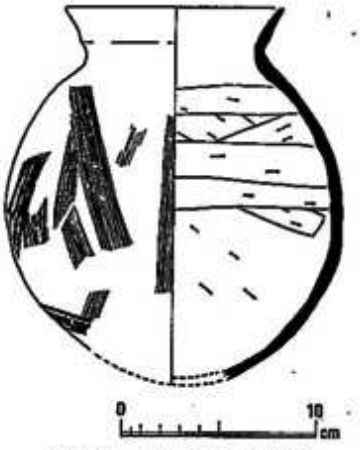
SA4303　2Hトレンチの Ⅱ7、Ⅱ8・Mi区で検出した大畦畔状遺構である。このSA4303は今回、古墳時代第3遺構面で検出した大畦畔状遺構の中ではSA4301とともに比較的幅の狭いもので、その値は1.5～2.0mを測る。また高さは0.1～0.2mである。ほぼ直線的で、南北両端ともに調査範囲外へと延びる。畦畔の盛土は灰色粘土で水田面ベースと同じ土層である。

SA4304（第24・25図）　Iトレンチ北端部、Ⅱ6、Ⅱ7・Mi、Mj区で検出した大畦畔状遺構である。HトレンチおよびIHトレンチでは検出されず、HトレンチとIトレンチの間付近で終っているようである。大きく弧を描き、Ⅱ7・Mj区より東へ延びて調査範囲外となる。一部後世の攪乱に削られてはいるが、幅は3.2～4.0m、高さは約0.5mを測る。このSA4304は古墳時代第3遺構面において検出した大畦畔状遺構の中で唯一、盛土層とベース土層が明確に区別できるものである。Iトレンチ北端でいうと、水田耕土となろう土層は暗灰色砂混り粘土であり、大畦畔を構成する盛土は暗黄褐色粘土である。この土層はかたくしまっており、かなり堅固な土堤である。（第27図）



第24図　SA4304遺物出土状況図

このSA4304の盛土層から土師器甕が1点、ほぼ完形で出土している。この土器はIトレンチ北壁近くの大畦畔西肩付近から出土し、口縁を南東方向へ向けて倒れた状態であった。掘方は検出されず、盛土を行う際に埋め込まれたものと思われる。口径は11.0cm、器高は19.3cmである。口縁部はヨコナデ、体部外面は粗いハケ調整を行う。また体部内面上半はヘラケズリのまま、内面下半はヘラケズリの後、粗いナデを施している。



第25図　SA4304出土遺物

ＳＤ4301　Ｉトレンチ中央のⅠ6・Ｎｄ区で検出した溝である。主軸はＮ—60°～65°—Ｅである。幅は約0.8m、深さ約0.1mを測り、埋土は上層が暗灰色粘土、下層は黄灰色中砂である。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＤ4302　Ｉトレンチ中央部、Ⅰ6・Ｎｄ区で検出した溝である。北側の肩はＳＤ4301に切られており、詳細は不明であるが、主軸はＮ—60°～70°—Ｅで、深さは約0.1mである。埋土は暗灰色粘質シルトと黄灰色粗砂および黄灰色粗砂である。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＤ4303（第26図）　Ｉトレンチ中央部、Ⅰ6・Ｎｄ区で検出した溝で、幅0.6～0.8m、深さ0.2mを測る。主軸はＮ—60°—Ｅである。埋土は、上層が黒灰色粘土で、下層が淡灰黄色粗砂および灰色粘質砂泥（小礫まじり）である。

第26図　ＳＤ4303出土遺物

遺物は若干出土したが、細片が多く１点のみ図化した。須恵器の杯身で、復元口径9.8cm、同器高4.4cmである。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。ヘラケズリは底部の½ほどであり、ロクロの回転方向は時計まわりである。

ＳＤ4304　Ｉトレンチ中央部、Ⅰ6・Ｎｄ区で検出した溝で、主軸はＮ—60°～70°—Ｅである。幅は0.9～1.1m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土は上層が暗灰色粘質土で、下層は灰黄色粗砂・暗灰色粗砂である。遺物はまったく出土しなかった。

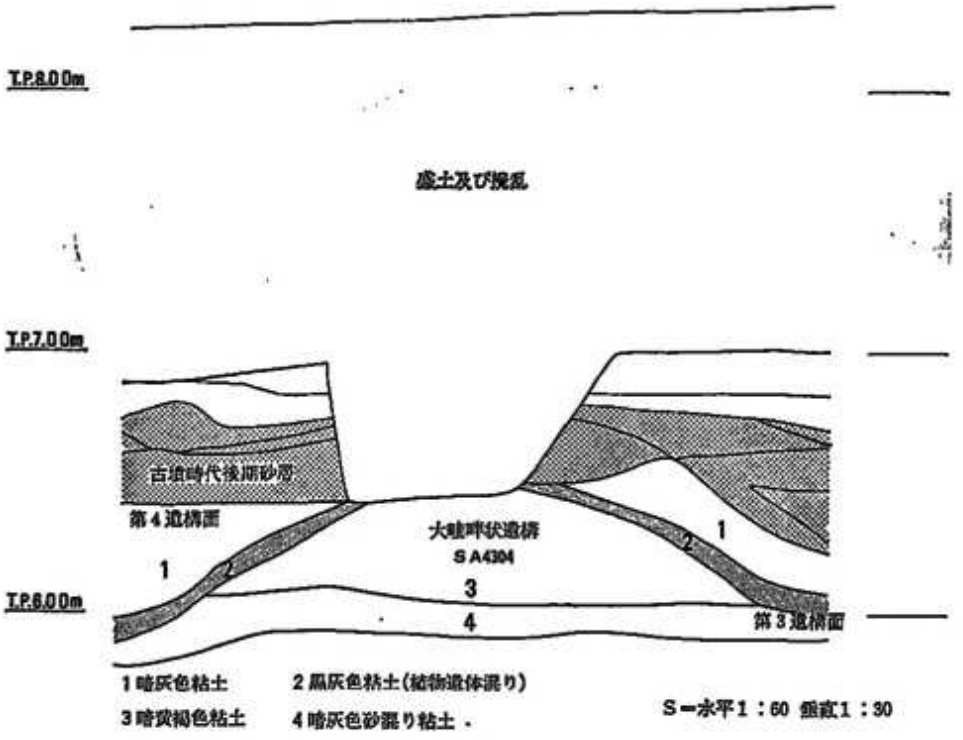
ＳＫ4301　Ｉトレンチ南半、Ⅰ6・Ｎｆ区で検出した大型の土壙である。西側は調査範囲外となり全体は不明である。検出部分で南北5.0m・東西5.5mあり、おそらくは楕円形を呈するものと思われる。深さは0.3～0.4mを測り、埋土は上層が暗灰色粘土であり、下層は厚さ0.1～0.2mほどの暗灰色砂混りシルトである。遺物は細片が数片出土したのみである。

ＮＲ4301　Ｉトレンチ南半部、３Ｉトレンチおよび４Ｉトレンチ、地区割ではⅠ5、Ⅰ6、Ⅰ7・Ｎｅ区を流れる自然流路で、東から西へ流れるものと思われる。４ＩトレンチとＩトレンチの境付近で西へ流れを曲げる。幅はＩトレンチにおいて7.0～8.5mを、深さは約0.7mをそれぞれ測る。遺物は細片のみの出土で図化しえなかった。

古墳時代第４遺構面（付図16・17　第27～31図　図版16～18）

古墳時代第４遺構面は調査区全域において検出された。Ｉトレンチ中央で検出された自然流路ＮＲ4401を境にしてこの古墳時代第４遺構面の様相は異っている。ＮＲ4401より北側は、そのほとんどが暗灰色粘土層をベースとし、多数の小畦畔によって細かく区画された水田址である。またＮＲ4401より南側は、やはり暗灰色粘土層をベースとするが、小畦畔などは検出されず、溝３条と土壙１基を検出している。この古墳時代第４遺構面は、亀井北遺跡その３調査区で検出された縄文～弥生時代・古墳時代を通じてもっとも安定した遺構面である。下面の古墳時代第３遺構面の水田址とともに、弥生時代後期より途絶ていた水田経営を再開する。

古墳時代第４遺構面と下面の同第３遺構面との関係を説明すると（第27図）、まず、古墳時代第３遺構面の大畦畔を中心とした水田が廃絶する。これはおそらくは水没によるものであろうと



第27図　古墳時代第3遺構面・第4遺構面関係図（Ｉトレンチ北壁）

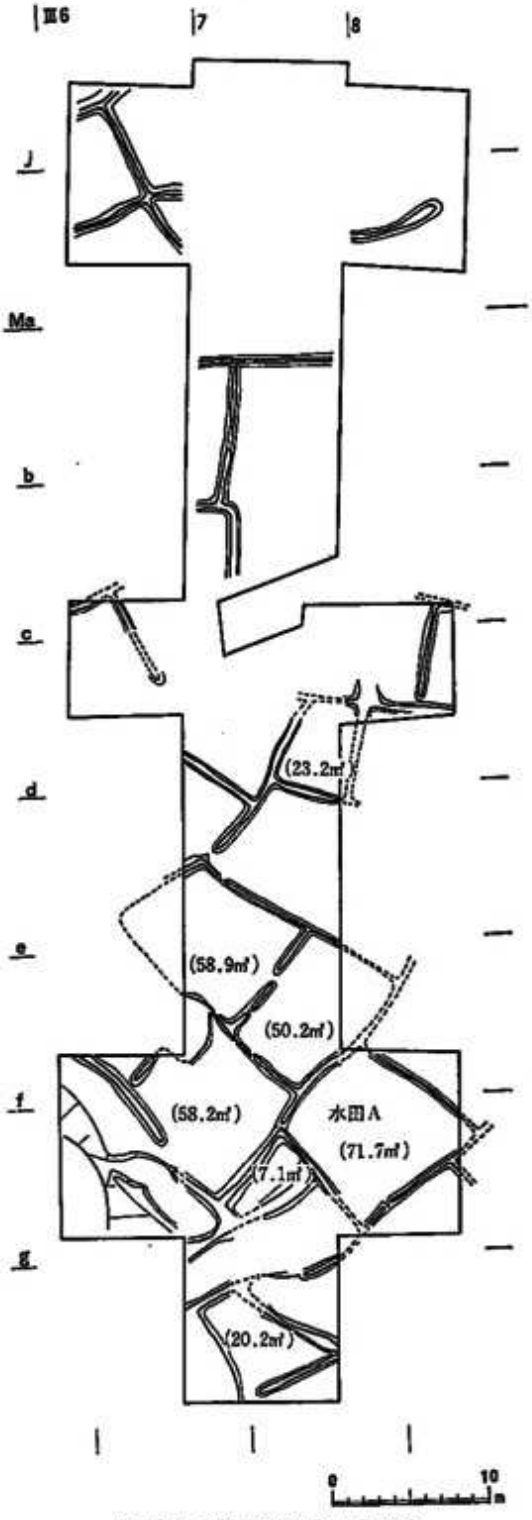
思われ、その結果として植物遺体をかなり多く含む黒灰色粘土層が厚さ0.1～0.2mでほぼ均等に第3遺構面の水田址を覆う。この黒灰色粘土層の上にさらに暗灰色粘土が堆積し、古墳時代第4遺構面の耕土となる。したがって黒灰色粘土層を間層として両遺構面が確実に分離されることになる。しかし両遺構面は時期的にそう隔たったものではないと考えられる。

水田面（第28～30図）　古墳時代第4遺構面では小畦畔によって区切られた水田面が調査区ほぼ全域、正確には自然流路ＮＲ4401の北側に拡がる。各トレンチで小畦畔を検出した。畦畔の残りがよくない部分があったり、またＦトレンチ北半は調査時の湧水が多く小畦畔を検出できなかったりで、やや途切れる部分もあるが、調査区全体で30枚以上の水田を確認した。

畦畔は概ね、下幅0.5～0.8mで、上幅は0.3～0.5mほどである。高さは、残りのよいもので0.1～0.15mほどあるが、ほとんどが0.05m程度である。畦畔の肩は実際には直に切っていたと思われるが、検出したものは崩落しており、断面は偏平なカマボコ形である。これらの畦畔は水田耕土である暗灰色粘土を盛りあげることによりつくりだしており、畦畔と水田耕土とを分けることはできない。

畦畔の方向に一定した規則性はなく、計画的な区画割りが存在するとは思えない。おそらくは微地形的な要因、つまり用水の取・排水のための高低差の必要により、コンターに直交させて、またコンターと平行に畦畔を作るものと思われる。この弥生時代第4遺構面の畦畔でいえば、東西あるいは北南～南東方向のものがコンターに直交すると思われる。

水口は一枚の水田に2ヶ所以上みられるものもある。この水口は畦畔を全部あるいは上半を長さ0.3〜0.5mにわたって切りとったり、水口になる部分に最初から畦畔をつくらない場合とがあると考えられる。後者はGトレンチのⅡ7・Me区の畦畔のように、一直線にならず、はすかいになる。水口には特別な施設はなく、切った部分に土を盛ることによって閉じたものと思われる。



第28図　古墳時代後期水田畦畔
（　）は復元水田面積

水田一枚の規模はかなりばらつきがあり、比較的大きな面積の水田とかなり小規模なものがある。設定したトレンチが狭小であって水田一枚全部が確認できたものはないが、復元した面積は、もっとも小さいもので7.1㎡、大きなもので100㎡、他に20㎡前後のものと50〜60㎡のものがある。プランも長方形、台形のものが多いが不定形のものもある。

水田A（第28図）は古墳時代第4遺構面で検出した水田の中ではもっとも規模がよくわかるものである。Gトレンチ南半および4Gトレンチで検出した。正方形に近い四角形で、各辺は北西7.6m、南西8.2m、南東9.6m、北東9.6m（いずれも復元長）で、面積は71.7㎡である。水口は検出できたものだけで2ヶ所ある。1つは西側のコーナーで、もう一つは南側コーナー近くの南東辺である。前者は水田Aのレベルの方が高く排水用、後者は逆に水田Aのレベルが低く取水用の水口と考えられる。水田内のレベルはほぼ一定で、水田Aの場合T.P.+6.02m〜T.P.+6.06mである。

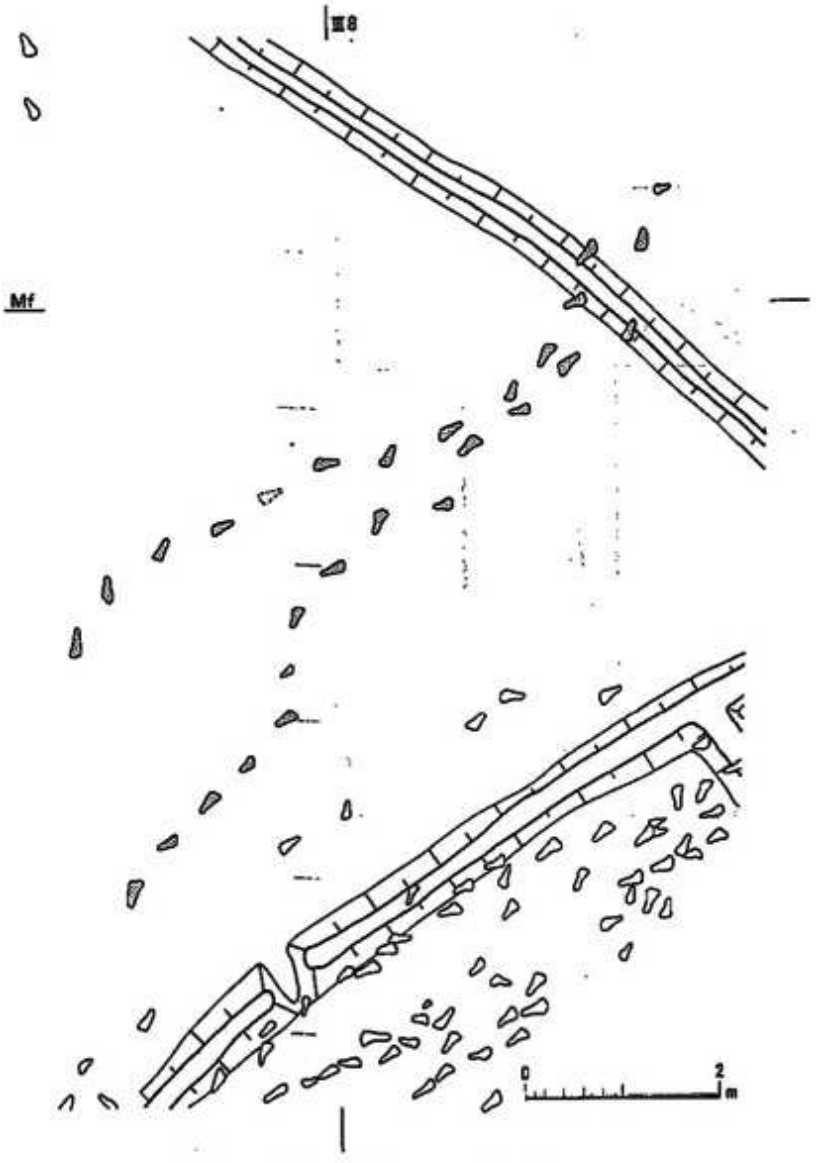
この古墳時代第4遺構面の水田は、NR4401などの氾濫によると思われる砂層によって覆われ、廃絶する。想像をたくましくすれば水口が開いたままであることから、季節的には秋から春にかけてであると思われる。

足跡（第29図）

古墳時代第４遺構面では、調査区のほぼ全域にわたって多数の足跡を検出した。足跡の総数は700弱ほどにのぼる。足跡の深さがそれほどなく、検出しえていないものもあわせると1,000以上になるものと思われる。

それぞれの足跡は水田面に刻みこまれており、この古墳時代第４遺構面を覆っている黄灰色系の粗砂を中心とした砂層により埋没している。したがって黄灰色の斑点として検出できる。

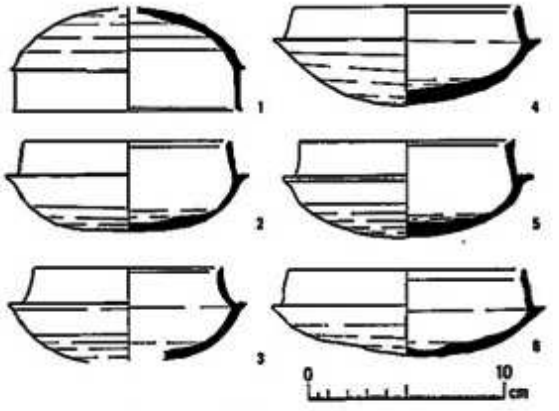
足跡の大きさは、残りのよいもので22～28cmほどであり、25cm前後のものが多い。足跡の深さも数cmのものが中心であるが、15cmほど残っているものもある。相対的に深いものほど、指やつちふまずなどの足の細部の痕跡を残している。



第29図　古墳時代後期水田足跡検出状況
アミは歩行状態の明確なもの

足跡は、集中している部分とそうでないところがあるが、これはその時の水田面のかたさが反映しているものと思われる。また畦畔上にはあまり足跡が検出されず、むしろ畦畔をさけて歩行しているようである。歩行状況をたどれる足跡は各トレンチで数ケ所確認できた。その大部分が数歩ないしは10歩前後である。４Ｇトレンチ中央の足跡（第29図）は30歩ほどを検出している。Ｉトレンチの方向から北東へ向いて10歩ほど歩き、４Ｇトレンチ北東隅の畦畔をまたいだ後に、また元の方向へも10歩ほどもどる。同一人物の一連の歩行にもかかわらず、足跡の大きさがまちまちである。ベース層の乾燥などによる収縮率の差などが表われていると思われる。

この古墳時代第4遺構面のベース層である暗灰色粘土はほとんど遺物を含まない層であるが、Hトレンチと I トレンチで須恵器の杯がわずかながら出土した。1～5はHトレンチの Ⅱ7・Mh区、6はIトレンチの Ⅱ6、Ⅱ7・Mj区よりの出土である。1は杯蓋で復元口径11.5cm、同器高5.3cm である。かなり高い天井部をもち、口縁部は垂直にさがる。端部は段をもつ。天井部は自然釉が付着している。2は杯身で口径10.5cm、器高4.6cm を測る。たちあがりはやや内傾し、端部は面をなしている。ロクロの回転方向は時計まわりである。3は杯身で復元口径9.7cm、たちあがりはわずかに内彎ぎみに内傾し、端部は面をもつ。ロクロの回転方向は逆時計まわりである。4は杯身で口径11.4cm、器高5.0cmを測る。たちあがりは内傾し、端部は面をもつ。ロクロの回転方向は時計まわりである。5は杯身で口径11.0cm、器高4.9cm を測る。たちがありは内傾し、端部は面をもつ。ロクロの回転方向は逆時計まわりである。6は杯身で口径12.0cm、器高4.4cm を測る。比較的偏平な底部をもち、たちあがりは薄く、内傾している。端部は面をもつ。ロクロの回転方向は時計まわりである。



第30図　暗灰色粘土層出土遺物

SD4401　4Iトレンチ、Ⅱ7、Ⅱ8・Ne区で検出した溝である。幅2.5m前後、深さ0.2～0.3mを測る。やや弧を描き、両端は調査範囲外である。埋土は灰色粘質シルトであり、遺物はまったく出土しなかった。

SD4402　4Iトレンチ、Ⅱ7、Ⅱ8・Ne区で検出した溝である。幅1.8～3.7m、深さ0.1～0.2mを測る。SD4401に切られている。Iトレンチでは検出されず、4IトレンチとIトレンチの境付近で大きく南へまがるものと思われる。埋土は暗灰白色微砂である。遺物はまったく出土しなかった。

SD4403　4Iトレンチ、Ⅱ7、Ⅱ8・Ne区で検出した溝である。幅1.2m前後、深さ0.1mを測る。SD4402とほぼ平行に弧を描いている。埋土は上層が灰色細砂で、下層はSD4402と同質の暗灰白色微砂である。遺物はまったく出土しなかった。

SK4401　1Gトレンチ、Ⅱ6・Mb区で検出した土壙である。長辺約1.5m、短辺約0.8mの隅丸長方形のプランをもち、長軸の方向はN－68°－Wである。深さは約0.4mを測る。埋土は淡灰色微砂と暗灰色粘土ブロックである。遺物はまったく出土しなかった。

このSK4401は水田耕土である暗灰色粘土層を切っており、また、上層の砂層に乱れがなく、水田廃絶前に掘削・埋没したことはたしかであるが、水田耕作に関係する遺構とは考えられない。

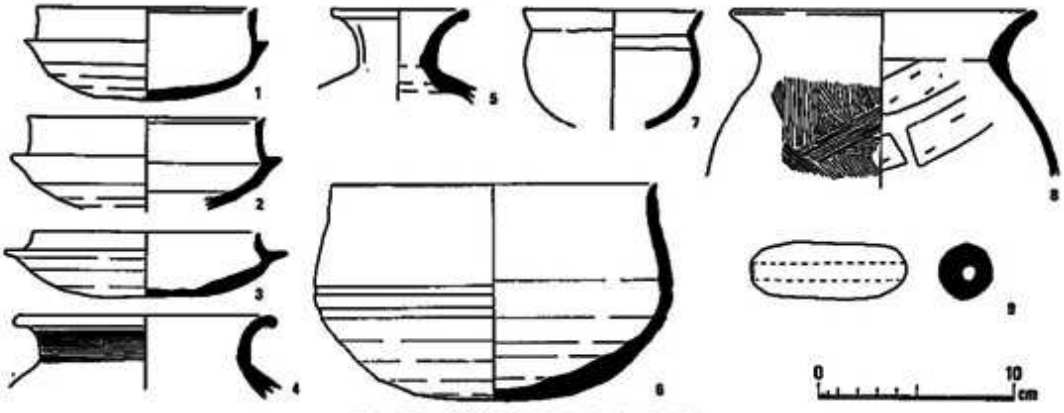
SK4402　4Iトレンチ、Ⅱ7・Ne区で検出した土壙である。長辺約3.4m、短辺約1.3mの隅丸長方形のプランで、長軸の方向はN－62°－Wである。埋土は暗灰色粘土ブロックを含む暗

灰色細砂であり、深さは0.1〜0.2mである。遺物はまったく出土しなかった。

このＳＫ4402はＳＫ4401と同様の遺構と思われ、そのプラン、埋土ともに共通しているが、遺構の性格は不明である。

ＮＲ4401および古墳時代砂層（第31図）　ＮＲ4401はＩトレンチ中央で検出した、東から西へ流れる大河道である。幅約22cm、深さは1.5〜1.7mほどである。かなり急な流れがあったと思われ、２ＩトレンチやＩトレンチの左岸（南岸）では、岸がかなりえぐられオーバーハングしている。このＮＲ4401は洪水性の氾濫により一気に埋没したものと思われ、層厚が１m近くもある砂礫層や粗砂を中心とした堆積層をもつ。この時期の平野川系の一流路と思われる。

古墳時代砂層はＮＲ4401や付近の河道からのオーバーフローによって堆積したものと思われ、本調査区のみならず、亀井北遺跡全体に存在する。この砂層の堆積により、古墳時代第４遺構面の水田は廃絶してしまう。その時期は古墳時代後期であり、その後しばらくは亀井北遺跡に遺構があらわれない。再び安定した所となり、集落が築かれるのは奈良時代後半である。



第31図　古墳時代後期砂層出土遺物

ＮＲ4401からはコンテナ１箱分、古墳時代砂層からはコンテナ３箱分の遺物が出土したが、いずれも細片が多く、また激しいローリングを受けている。９点を図化した。２〜６・８はＮＲ4401から、１・７・９は古墳時代砂層からの出土である。１は杯身で口径11.2cm、器高4.8cmでやや丸みのある底部と内彎したのち垂直に上るたちあがりをもつ。口縁端部は段をなす。２は杯身で、復元口径12.0cmを測る。たちあがりはやや内彎し、端部は面をなす。ロクロの回転方向は時計まわりである。３は杯身で口径11.6cm、偏平な底部と短いたちあがりをもつ。４は甕で口頸部のみである。口径13.0cmで、口縁部は大きく外へ開き、端部は丸くおさめる。頸部にはカキ目調整を施す。５は提瓶の口頸部と思われる。口径6.8cm、口縁は外反し、端部は丸い。頸部にヘラ描沈線をたて方向に施す。６は鉢で口径16.5cm、器高11.1cmを測る。体部中ほどがややふくらみ２条の沈線を施す。ロクロの回転方向は時計まわりである。７は小型壺である。口径9.0cm、丸底で口縁はくの字に外反する。頸部内面に強いユビナデを残す。８は甕で、体部下半以下は欠損する。口径15.7cm、外反する口縁をもち、体部外面はハケ、内面はヘラケズリのままである。９は土錘である。長さ7.9cm、直径約2.8cm、重さ62.5gを測る。

第4節　奈　良　時　代

亀井北その3調査区では、古墳時代第4遺構面を覆うＮＲ4401による古墳時代砂層が堆積した後、再び人々が生活を営み始めるのは、奈良時代も後半になってからと考えられる。これは、本調査区からは、明確な遺構に伴う飛鳥、奈良時代前半の遺物が出土しなかったことによる。またこの時期になると、本調査区における遺構のあり方は一変する。それは、古墳時代以前にはみられなかった掘立柱建物跡および柱穴群が検出されたことである。本調査区は、弥生、古墳時代においては、水田址、溝などを中心とした、いわば生産域としての場であったように思われる。そして、集落の中心が亀井遺跡側にあったことは、その調査により明らかである。しかしながら、掘立柱建物跡、柱穴を多数検出したことで、この時期には本調査区が、集落の中心となっていたのではないかと考えられる。

本調査区では、奈良時代に相当する遺構面は2面検出された。

奈良時代第1遺構面は、Ｆ、Ｉトレンチで検出した。Ｇ、Ｈトレンチおよび、Ｆ、Ｉトレンチの一部は、後世の削平を受けている。標高約Ｔ.Ｐ.+6.60～7.70mを測り、南に行くに従い高くなっていく。掘立柱建物、柱穴群、溝、土壙を検出した。奈良時代第2遺構面は、Ｈ、Ｉトレンチと Ｆトレンチ Ｍｂライン以南で検出した。Ｆトレンチ Ｍｂライン以北とＧトレンチでは後世の削平を受けているが、Ｇトレンチでは一部包含層が残存している。標高約Ｔ.Ｐ.+7.00～7.20mを測り、この面も南に行くに従い高くなっていく。掘立柱建物跡、柱穴群、井戸、溝、土壙を検出した。

奈良時代第1遺構面（付図18・19　第32図～35図　図版19～22）

奈良時代第1遺構面は、古墳時代砂層最上面の起伏をならした整地土をベースとしている。古墳時代砂層最上面は、起伏が激しく、これを整地するには非常な労力が必要であったと思われる。この為、ベースとなる層は多種多様で、Ｆトレンチでは、暗茶灰色シルトを中心とし、Ｉトレンチでは、褐灰色シルト、粘質土、暗灰色シルトなどを中心として構成されている。

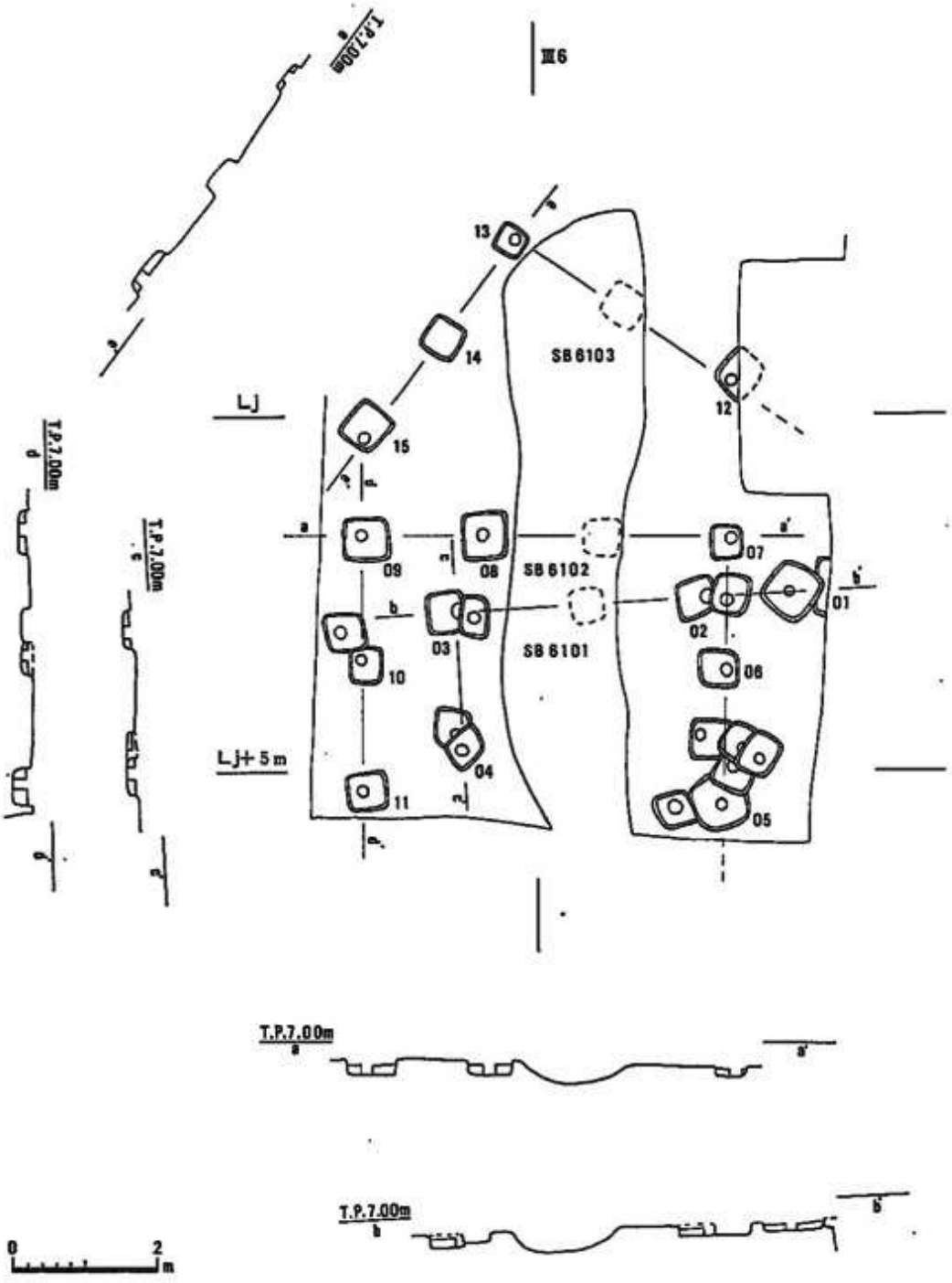
この面は、前記のようにＧ、Ｈトレンチおよび、Ｆ、Ｉトレンチの一部が後世の削平を受けている。また、遺構面が残存している所でも削平を受けているらしく、柱穴など遺構の分布に非常にかたよりがあり、深さも0.1～0.3mと浅かった。

この遺構面からは、掘立柱建物跡6棟、溝6条、土壙2基、自然流路を検出した。掘立柱建物跡については、調査が幅10mのトレンチ部と面積約100㎡の切り拡げ部に限定されていたこと、及び後世の削平の為、完全に検出できた建物はなかった。この為、今回の調査でははは柱穴が2方向に続くもののみを掘立柱建物跡とし、その他、柱穴が3個以上ならぶものは柱穴列として、建物跡からは除外した。

ＳＢ6101（第32図）　　ＩＦトレンチ南側で検出した。3間以上×1間以上の南北主軸の掘立柱建物である。規模は桁行約1.8m以上、梁行約5.4m以上を測る。柱間距離は、桁行、梁行とも約

1.8mである。南北主軸方向は、N−3°−Wとほぼ真北に近い。柱穴掘り方は、一辺約0.5〜0.8mの方形で、深さは約0.15〜0.18mであり、底面は、T.P.+6.6m前後で一致している。Pit 6101を除き柱あたりを確認した。埋土は、灰褐色粘質砂泥である。遺物は出土しなかった。

SB6102（第32図）　1Fトレンチ南側、SB6101より約1.5m西側で検出した。3間×2間以上の南北主軸の掘立柱建物である。規模は桁行3.6m以上、梁行約5.1mを測る。柱間距離は、



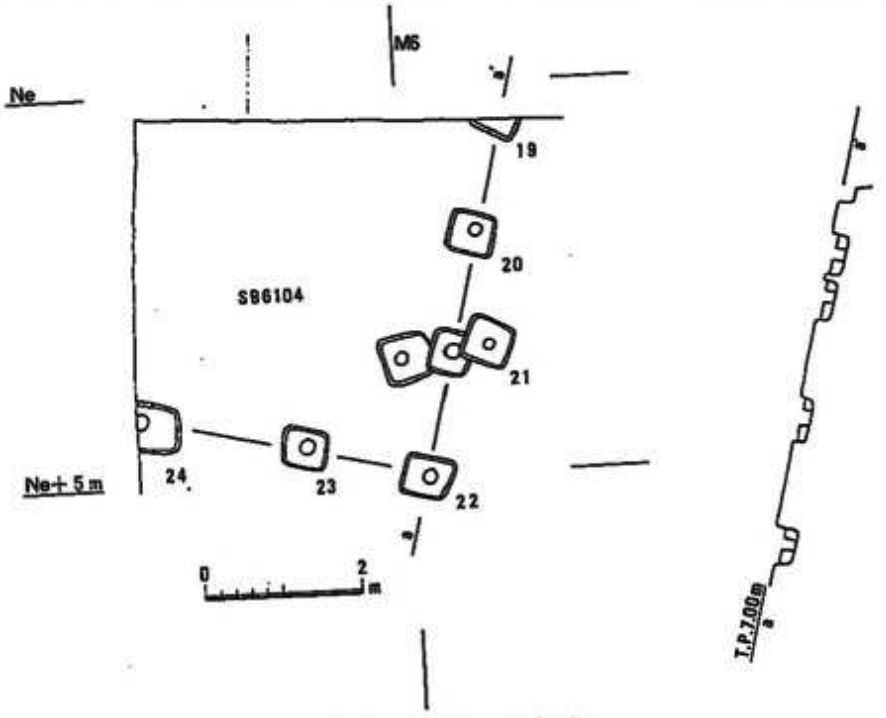
第32図　SB6101、SB6102、SB6103平面図・断面図

桁行約1.8m、梁行約1.7mを測る。南北主軸方向は、ＳＢ6101と同様N—3°—Wと真北に近い。柱穴掘り方は一辺約0.5～0.8mの方形で、深さは、約0.15～0.3mであり、Pit 6111を除いて、底面はＴ.Ｐ.+6.6m前後で一致している。全ての柱穴から柱あたりを確認した。埋土は、茶灰色細砂、粘質砂泥などである。遺物は出土しなかった。

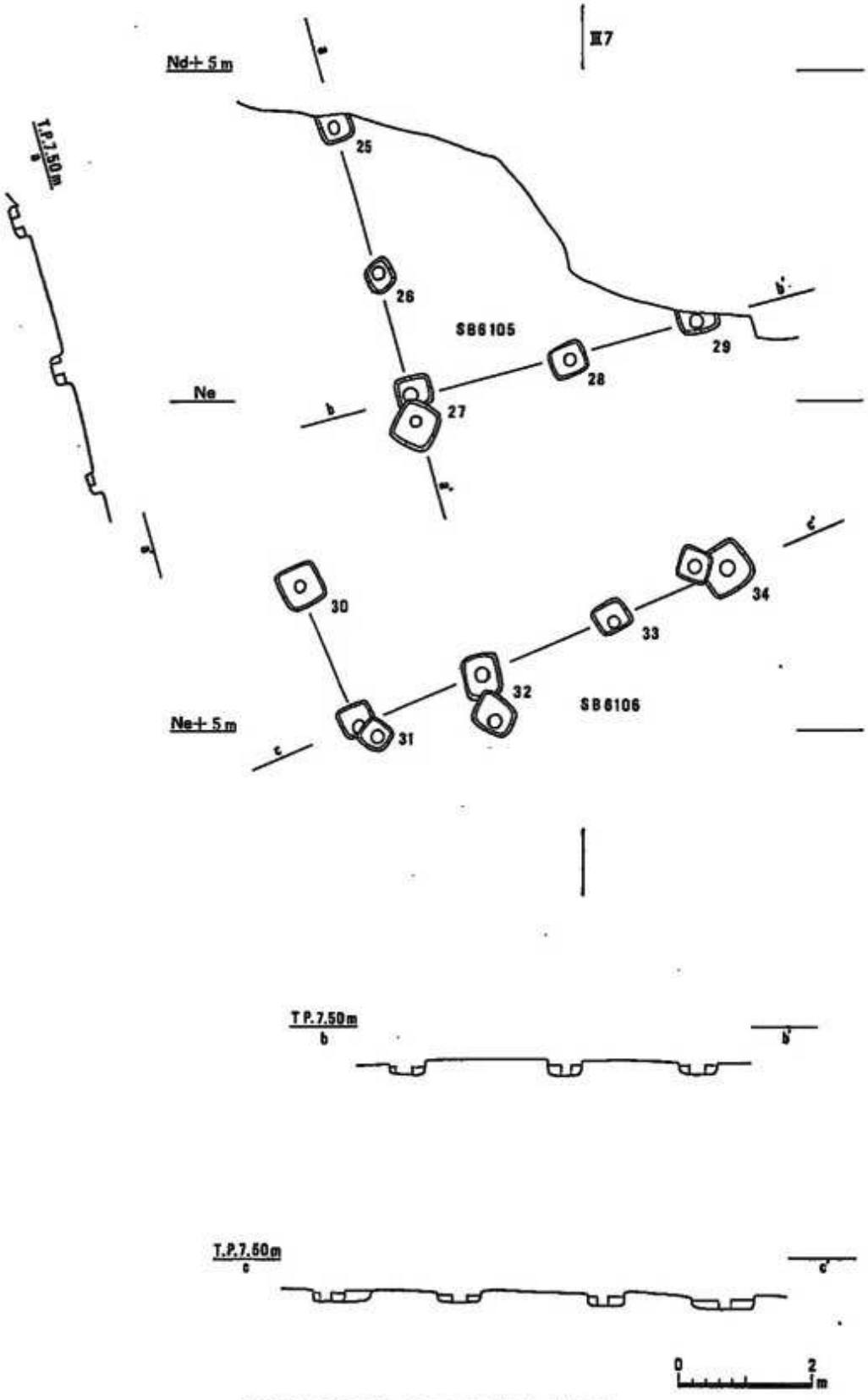
ＳＢ6103（第32図）　１Ｆトレンチ中央部で検出した。２間以上×２間以上の南北主軸の掘立柱建物跡である。規模は約3.6×3.6m以上である。柱間距離は、約1.7m である。南北主軸方向は、N—37°—Eで、約40°ほど東にふっている。柱穴掘り方は、一辺約0.4～0.6mの方形で、深さは、約0.1～0.2mであり、底面はＴ.Ｐ.+6.6m 前後で一致している。Pit 6114を除き柱あたりを確認した。埋土は、褐灰色細砂、灰色細砂などである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ6104（第33図）　３Ｉトレンチ中央部で検出した。２間以上×３間以上の南北主軸の掘立柱建物である。規模は、桁行約4.8m以上、梁行約3.8m以上を測る。柱間距離は、桁行約1.6m、梁行約1.6～1.9mを測る。南北主軸方向は、N—14°—Eで、約15°東にふっている。柱穴掘り方は、一辺約0.6mの方形で、深さは約0.2～0.3mであり、Pit 6122を除いて、底面はＴ.Ｐ.+6.7m前後で一致している。全ての柱穴から柱あたりを確認した。埋土は、上下２層に分かれ、上層は灰褐色シルト、下層は淡褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ6105（第34図）　Ｉトレンチ中央部で検出した。２間以上×２間以上の南北主軸の掘立柱建物跡である。規模は約4.7×4.0m以上である。柱間距離は、Pit 6125～27間が約2.3～2.5mを測り、Pit 6127～29間が約2.0mを測る。東西方向に柱間距離は長い。南北主軸方向は、N—11°—Wである。柱穴掘り方は、一辺約0.4～0.6mの方形で、深さは約0.1～0.2mであり、底面はＴ.Ｐ.



第33図　ＳＢ6104平面図・断面図



第34図　ＳＢ6105、ＳＢ6106平面図・断面図

+6.8m 前後で一致している。全ての柱穴から柱あたりをを確認した。埋土は、淡褐色シルトなどである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ6106（第34図）　Ｉトレンチ中央部で検出した。３間以上×１間以上の南北主軸方向の掘立柱建物である。規模は、約6.0×1.8m以上である。柱間距離は、Pit 6130～31が約1.8m を測り、Pit 6131～34間が約1.9～2.4mを測る。東西に柱間距離が長い。方向は、N－22°－W である。柱穴掘り方は、一辺約0.5～0.7mの方形で、深さは、約0.1～0.2mであり、底面は T.P.+6.8m 前後で一致している。全ての柱穴から柱痕を確認した。埋土は、淡褐色シルトなどである。遺物は出土しなかった。

柱穴列6101　Ｆトレンチ南端で検出した。２間分の柱穴列である。柱間距離は、約1.8m を測る。方向は、N－18°－E である。柱穴掘り方は、一辺約0.7～1.0mの方形で、深さは、約0.1m である。底面は、T.P.+6.7m 前後で一致している。埋土は、茶灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

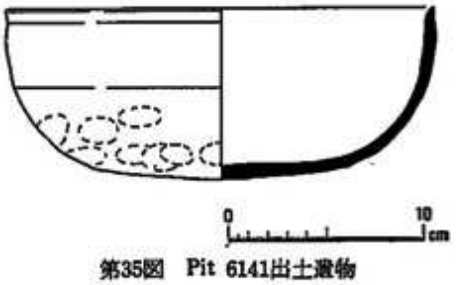
柱穴列6102　３Ｉトレンチ北端で検出した。２間分の柱穴列である。柱間距離は、Pit 6135～36間が約1.5 m、Pit 6136～37間が約1.7 mを測る。方向は、N－85°－W である。柱穴掘り方は、一辺約0.5～0.6mの方形で、深さは約0.2mである。底面は、T.P.+6.7m前後で一致している。埋土は、上下２層に分かれ、上層は淡褐灰色シルト、下層は灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

柱穴列6103　３Ｉトレンチ中央部で検出した。２間分の Pit 列である。柱間距離は、Pit 6138～39間が約1.6m、Pit 6139～40間が約1.4m を測る。方向は、N－18°－E である。柱穴掘り方は、一辺約0.6mの方形で、深さは約0.3mである。底面は、T.P.+6.7m前後で一致している。埋土は、上下２層に分かれ、上層は淡褐灰色シルト、下層は、灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

柱穴群　奈良時代第１面では、前記したような掘立柱建物跡や柱穴列の他にも、柱穴が多く検出された。総数で約 280 個を数える。柱穴の方向性は、掘立柱建物跡との関係から、ほぼ真北を向くもの、東に10～20°ふるもの、東に40°ふるものの、３種類が考えられる。これらの柱穴の前後関係は、切り合いからみて、東にふるものほど新しくなるようである。

また、柱穴の規模は、一辺0.4～0.6mの方形ものと、一辺0.8～1.0mの方形ものに分けられる。しかし、方向性による柱穴の規模の規則性はみられない。埋土は、ベース層をそのまま埋め戻したものが、ほとんどをしめる。

これらの柱穴の大半からは、遺物の出土はなかったが、10数個の柱穴から土器類の出土をみた。土師器、須恵器の細片が多く、図化できるものは１点しかなかった。第35図は、Pit 6141から出土した鉢である。平底に近い底部をもち、口縁部はほぼ垂直に



第35図　Pit 6141出土遺物

立ち上る。口縁端部はわずかに外反している。調整は、内外面上面はヨコナデ、外面下部は指オサエの後ナデ、内面はナデ調整である。

ＳＤ6101　Ｆトレンチ、２Ｆトレンチ北端、Ⅱ７、Ⅱ８・Ｌｉ区において検出した溝である。北側肩は、調査区外の為検出できなかった。深さ約0.2mを測る。ほぼ東西に走る溝である。埋土は暗茶灰色シルトである。遺物は、土師器、須恵器が出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＤ6102　１Ｆトレンチ、Ⅱ６・Ｌｉ区において検出した溝である。ほぼ東西方向の溝で、主軸方向は、Ｎ—60～70°—Ｅで、幅0.6～0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は、茶灰色粘質砂泥である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6103　Ｆトレンチ、２Ｆトレンチ、Ⅱ７、Ⅱ８・Ｌｊ区において検出した溝である。ほぼ東西方向の溝で、ＳＤ6101とは約11mの間隔をおいて平行に走っている。幅約0.6m、深さ0.3mを測る。埋土は、３層に分かれ、上層が褐灰色粘質土、中層が茶褐色粘土、下層が暗灰褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6104　Ｆトレンチ、Ⅱ７・Ｌｊ、Ｍａ区において検出した溝である。ほぼ南北方向の溝で、主軸方向はＮ—10°—Ｅである。撹乱によって、その全様は明らかにできなかったが、残存長約12m、幅約1.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は、茶灰色粘質砂泥である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6105　Ｉトレンチ、Ⅱ６・Ｎｅ区において検出した溝である。ほぼ南北方向の溝で、主軸方向はＮ—90°—Ｅである。ピットに切られており、残存長は約1.0m、幅0.3m、深さ0.03mである。埋土は、茶灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6106　Ｉトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｎｇ区において検出した溝である。ほぼ東西方向の溝である。幅0.7～1.0m、深さ約0.1mを測る。埋土は２層に分かれ、上層が暗茶灰色砂泥、下層が暗黄灰色砂泥である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6101　Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｆ区で検出した土壙である。径約1.5mのほぼ円形プランを呈する。深さは約0.3mを測る。埋土は、３層に分かれ、上層が茶褐色粘質土、中層が暗茶褐色粘質砂泥、下層が淡青灰色シルトである。遺構の性格は、まったく不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6102　Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｆ区で検出した土壙である。径約1.3mのほぼ円形プランを呈する。深さは約0.3mを測る。埋土は、６層に分かれる。上層から①層・赤褐色砂泥、②層・茶褐色砂泥、③層・淡青灰色シルト、④層・暗褐色砂泥、⑤層・淡黄褐色砂泥、⑥層・暗褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

ＮＲ6101　Ｉトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｎａ、Ｎｂ区で検出した自然流路である。ほぼ東西に流れている。川幅約12m、深さ約0.7mほどの小河川である。埋土は、褐灰色シルト、淡灰褐色シルト、褐灰色シルトなど、シルト質の土層であり、流れは比較的ゆるやかであったようである。遺物は出土しなかった。

奈良時代第２遺構面（付図20・21　第36図～47図　図版22～25）

奈良時代第2遺構面は、淡黄褐色砂泥、灰褐色シルト、淡赤褐色シルトなどをベースとしている。これらの層も整地土層と考えられる。この面は、前述のようにFトレンチMbライン以北、Gトレンチが削平を受けていた。しかし、Gトレンチでは一部包含層が残存しており、3Gトレンチでは、井戸1基を検出した。

この面は、奈良時代第1遺構面とは、遺構のあり方が異なる。奈良時代第1遺構面では、G・Hトレンチが後世の削平を受けていたものの、ピットは全トレンチで検出された。しかし、奈良時代第2遺構面になると、ピットは、F・Hトレンチ以北にしか検出されなくなる。かわって、Iトレンチでは、溝群が検出されるようになる。このことから、この時期になると、何らかの理由で、Iトレンチ以南は、居住域として利用されなくなるのかもしれない。

これの理由のひとつとして、NR6201が考えられる。この自然流路は、亀井遺跡では、NR6001として南側の肩が検出されている。今回の調査でこの流路の北側の肩を検出した。川幅は、約195mほどもあり、非常に大きな自然流路である。

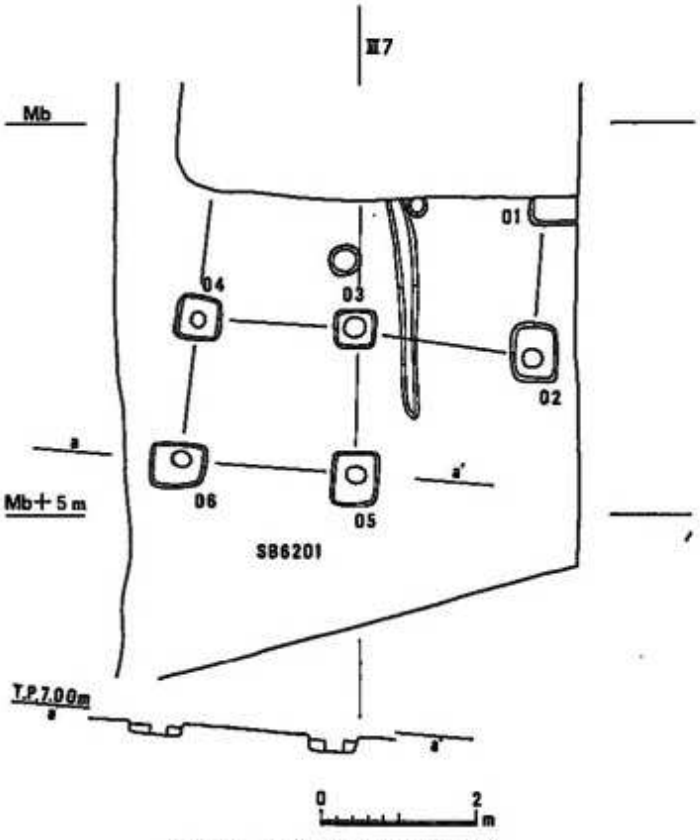
この流路は、この時期における平野川であると思われる。この為、NR6201に近いIトレンチ周辺では、氾濫その他何らかの理由で、居住域としては適さなくなっていったのではないかと考えられる。

この面からは、掘立柱建物跡、溝、土壙、井戸、自然流路を検出した。

SB6201（第36図）

Fトレンチ南端で検出した2間×2間以上の総柱の掘立柱建物跡である。南東端の柱穴は検出できなかったのでPit 6201～04とPit 6205～06は別棟かもしれない。

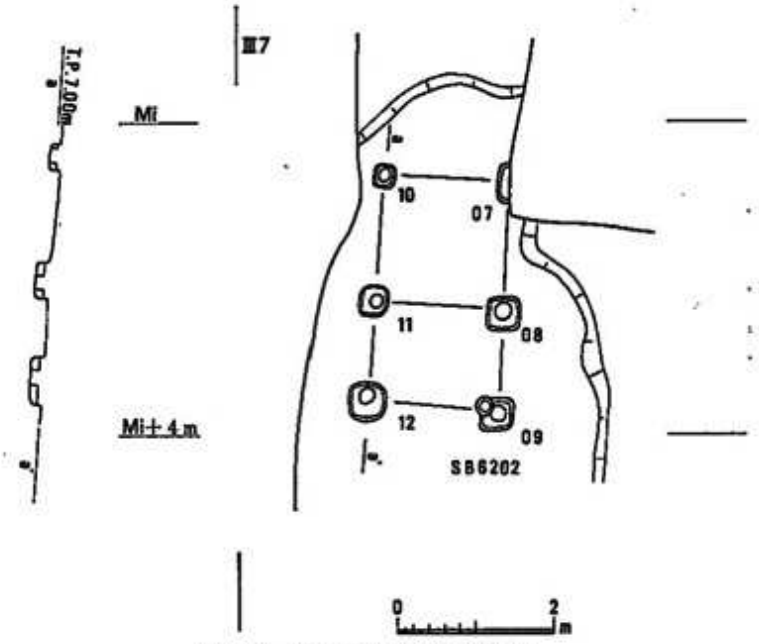
規模は、約4.4×4.4mである。柱間距離は、1.8～2.2mである。南北主軸方向はN－8°－Eである。柱穴掘り方は、一辺、約0.5～0.6mの方形で、深さは、約0.15mであり、底面はT.P.+6.7m前後で一致している。Pit 6201以外で柱あたりを確認した。埋土は、茶灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。



第36図　SB6201平面図・断面図

ＳＢ6202（第37図）

Ｈトレンチ中央部で検出した。１間以上×２間以上の総柱の掘立柱建物跡である。規模は、約1.7×2.9mである。柱間距離は約1.4～1.7mである。南北主軸方向は、Ｎ―5°―Ｅである。柱穴掘り方は、一辺、約0.3～0.5mの方形で、深さは、約0.15mであり、底面はＴ.Ｐ.+6.9m前後で一致している。全ての柱穴から柱あたりを確認した。埋土は、淡灰色砂質シルトである。Pit 6208より土師器杯が出土したが、細片の為図示できなかった。



第37図　ＳＢ6202平面図・断面図

柱穴群　奈良時代第２遺構面では、柱穴は約80個検出した。柱穴の方向性、切り合い関係については、ほぼ奈良時代第１遺構面と変化していない。しかし、柱穴の規模については、0.4～0.6mのものだけになる。埋土は、ベース層をそのまま埋め戻したものが多い。遺物は、奈良時代第１遺構面と同様に非常に少なく、わずかに数個の柱穴のみである。土師器・須恵器の細片が多く図化できるものはなかった。

ＳＤ6201　Ｆトレンチ、Ⅱ７・Ｍｂ区で検出した溝である。ほぼ南北方向の溝で、主軸は、Ｎ―5°―Ｗである。試掘壙によってその全様は明らかにすることはできなかったが、残存長約2.5m、幅0.2～0.3m、深さ0.03mを測る。埋土は、茶灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6202～6204・6208～6209　Ｈトレンチ、１Ｈトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｍｈ、Ｍｉ区で検出した溝群である。東西方向の溝で、主軸は、Ｎ―70～75°―Ｗとほぼ一致している。幅は、ＳＤ6204が約0.3mと細いが、他の溝は、約1.0～1.4mを測り、ほぼ同一の規模である。深さは、約0.05mと一致している。埋土は、ＳＤ6203が暗青灰色粘土、他の溝は茶灰色シルト系である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6205　２Ｈトレンチ東部、Ⅱ８・Ｍｉ区で検出した溝である。南北方向の溝で、主軸は、Ｎ―20°―Ｅである。幅は約0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は、暗茶灰色粘質砂泥である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6206　２Ｈトレンチ北部、Ⅱ７・Ｍｉ区で検出した溝である。北東から南西方向の溝で、主軸は、Ｎ―45°―Ｅである。幅は約0.4m、深さ約0.05mを測る。埋土は灰色シルトである。遺

物は出土しなかった。

ＳＤ6207　２Ｈトレンチ北部、Ⅱ７・Ｍｉ区で検出した溝である。南北方向の溝で、主軸は、Ｎ―20°―Ｅである。ＳＤ6206の西約１ｍに位置する。幅は約0.5～0.7m、深さ約0.08mを測る。埋土は淡茶灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6210～6212　Ｉトレンチ北部、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｍｊ、Ｎａ区で検出した溝群である。東西方向の溝で、主軸は、Ｎ―70～74°―Ｗとほぼ一致する。幅は約2.0m、深さ 0.1m を測る。埋土はＳＤ6210が淡黄褐色粘質砂泥、他は暗灰茶色シルトである。ＳＤ6211より須恵器が出土したが、細片の為図化できなかった。

ＳＤ6213　Ｉトレンチ北部、Ⅱ７・Ｍｊ、Ｎａ区で検出した溝である。南北方向の溝で、主軸は、Ｎ―10°―Ｅである。ＳＤ6211を切っている。幅は約1.2m、深さ0.05mを測る。埋土は、灰茶色シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6214　Ｉトレンチ北部、Ⅱ７、Ｎａ区で検出した溝である。南北方向の溝で、主軸は、Ｎ―25°―Ｅである。南側は攪乱によって切られている。残存長約5.0m、幅約0.9m、深さ約0.1mを測る。埋土は、茶灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6215　２Ｉトレンチ東部、Ⅱ７、Ⅱ８、Ｎｂ区で検出した溝である。南北方向の溝で、主軸は、Ｎ―5°―Ｅである。南側は、西にふくらんでおり、東側の肩は調査区外の為検出できなかった。深さ約 0.5m である。埋土は、上下２層に分かれ、上層が茶褐色砂まじり粘土、下層が暗灰色砂まじり粘土である。遺物は、出土しなかった。

ＳＤ6216・6217　Ｉトレンチ、１Ｉトレンチ、Ⅱ５、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｎｂ区で検出した溝群である。東西方向の溝で、主軸は、Ｎ―70°―Ｗである。幅は、ＳＤ6216が約0.8m、ＳＤ6217が約2.5～４ｍ、深さは、ＳＤ6216が0.1m、ＳＤ6217が 0.3m である。埋土は、両溝とも灰褐色砂泥である。ＳＤ6217より、土師器・須恵器が出土したが、細片の為図化できなかった。

ＳＤ6218～6221　Ｉトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｎｃ区で検出した溝群である。東西方向の溝で、主軸は、Ｎ―80°―Ｗで一致している。幅は約0.2～0.4m、深さ約 0.05m を測る。埋土は全て暗茶褐色粘質土である。ＳＤ6220より須恵器が出土したが、細片の為図化できなかった。

ＳＤ6222　Ｉトレンチ、Ⅱ６・Ｎｄ区で検出した溝である。東西方向の溝で、主軸はＮ―85°―Ｗである。幅は約2.7m、深さ 0.35m を測る。埋土は、暗灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

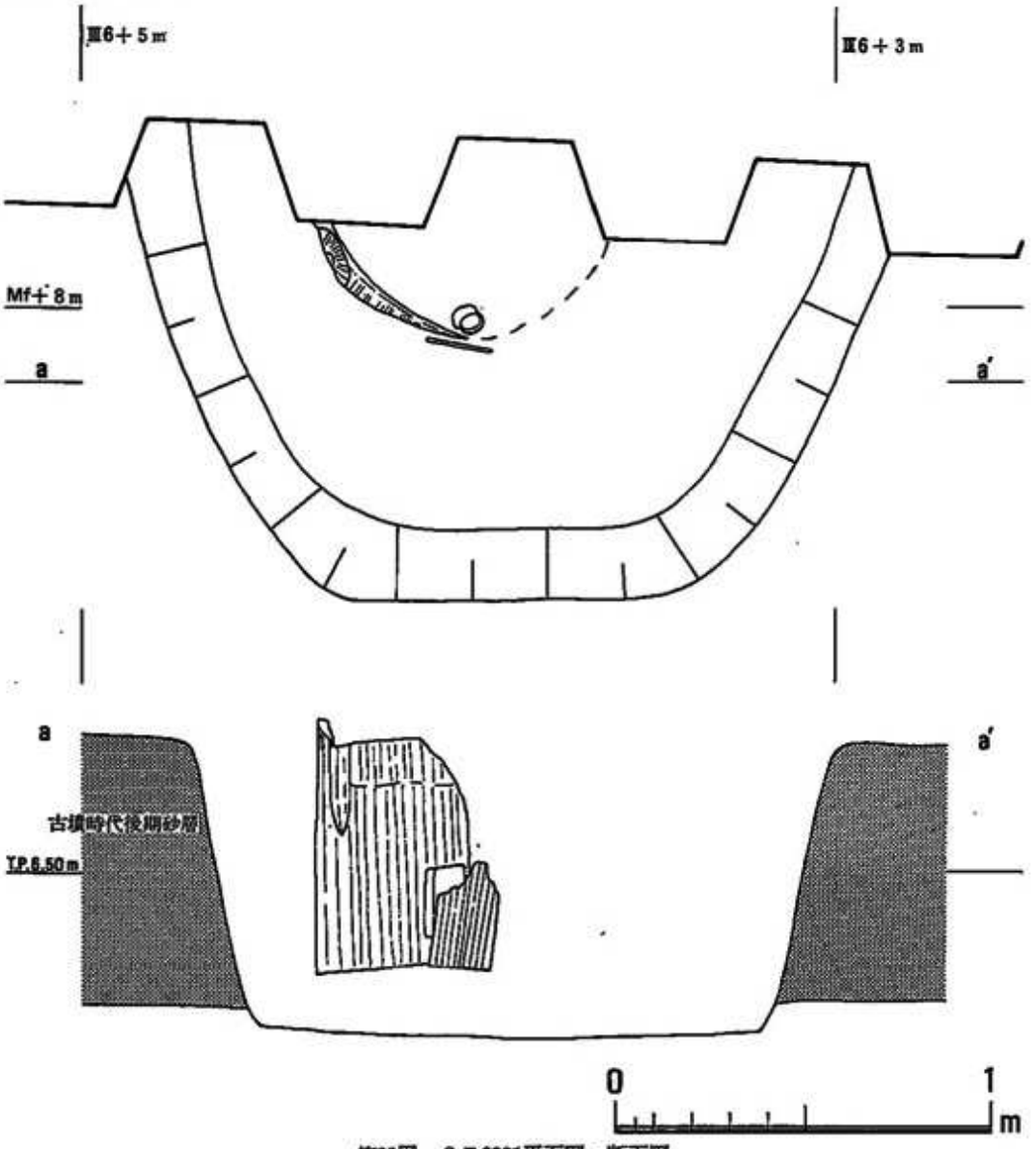
ＳＤ6223　Ｉトレンチ、Ⅱ６・Ｎｅ、Ｎｆ区で検出した溝である。ほぼ南北方向の溝である。幅は約1.1m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

Ｈトレンチから Ｉトレンチにおける溝のあり方は、東西方向の溝と、南北方向の溝の２群に分けられる。新旧関係は、ＳＤ6211とＳＤ6213のあり方から南北方向の溝が新しい。東西方向の溝群は主軸がＮ―70～80°―Ｗとほぼ一致しており、５～10m 間隔で２～５本の溝群があるという規則性をもっている。これらの溝の性格は、耕作に起因するものではないかと思われる。

ＳＫ6201　１Ｇトレンチ、Ⅱ６・Ｍｂ区で検出された。北側は、調査区外で検出できなかった。長径１ｍ以上、短径約0.9mの楕円形プランを呈するものと思われる。深さは約0.2mを測る。長軸は、ほぼ南北方向である。土師器、須恵器が出土したが、細片の為図化できなかった。

ＳＫ6202　Ｈトレンチ南部、Ⅱ７・Ｍｉ区で検出された。南側は、調査区外で検出できなかった。長径1.2m 以上、短径約１ｍの楕円形プランを呈するものと思われる。深さは約 0.4m を測る。長軸は、ほぼ南北方向である。埋土は大別して２層に分かれ、上層より、暗茶褐色粘質土、青灰色粘質土、青灰色シルト、淡青灰色粘土の順に堆積している。遺物は出土しなかった。

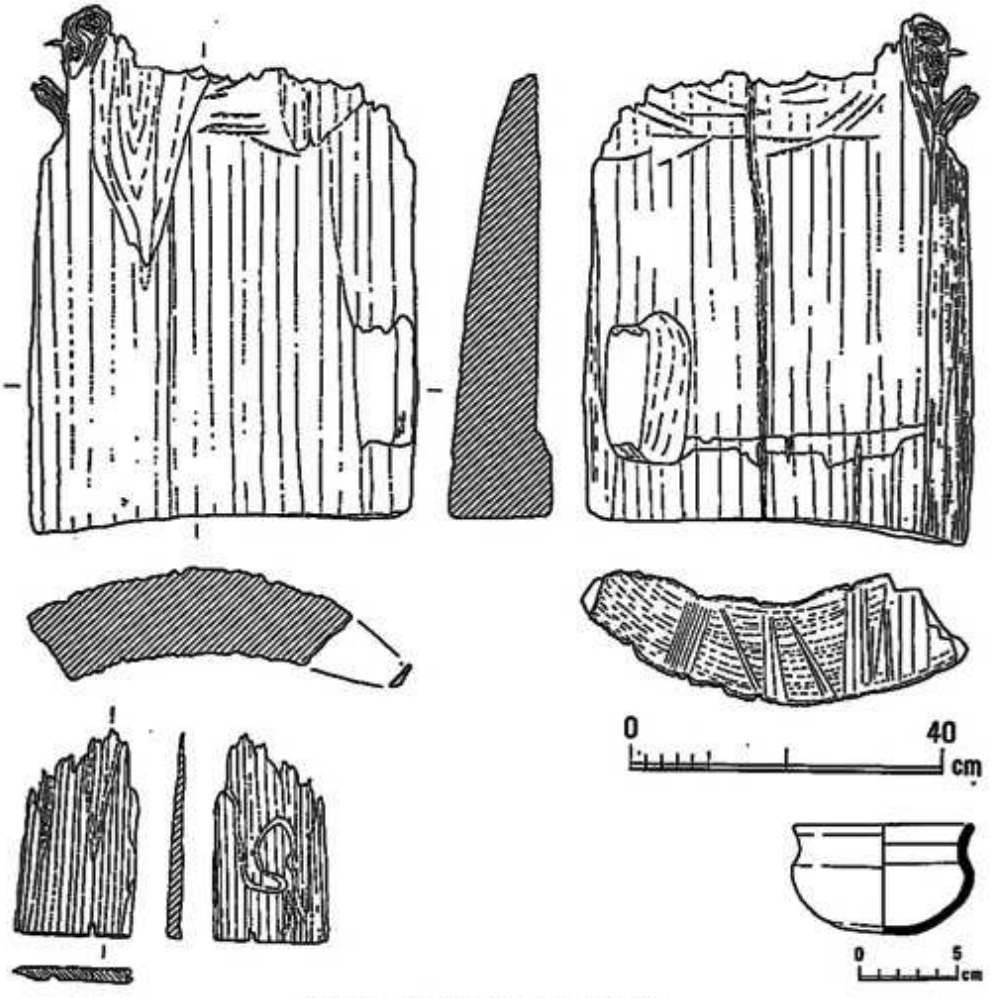
ＳＫ6203　Ｉトレンチ中央部、Ⅱ７・Ｎｃ区で検出された。一部調査区外になるが、径約1.4ｍの円形プランを呈するものと思われる。深さは約0.2mを測る。埋土は暗灰褐色シルトである。土師器、須恵器片が出土したが、細片の為図化できなかった。



第38図　ＳＥ6201平面図・断面図

ＳＥ6201（第38図・39図）　３Ｇトレンチ南部、Ⅱ６・Ｍｆ区で検出された。南側は調査区外で検出できなかったが、径２ｍ前後の円形プランを呈するものと思われる。深さは、約0.75ｍで古墳時代砂層を掘りぬいている。井戸枠内には、灰褐色シルトが堆積し、井戸枠外は、古墳時代砂層をそのまま埋め戻していた。

この井戸から出土した井戸枠は、南側を矢板に切られており、その全様を明らかにすることができなかった。全長68cm、残存幅49cm、幅18cmを測る。杉材を使用している。転用井戸枠と思えるが、何から転用されたかは不明である。木の丸味をそのまま利用しており、裏面下部に段を有している。上部には、正、裏面から手斧によるけずり痕がみられる。底面は、鋸によって切断されている。正面右下に、長さ10cm、幅９cmほどの穴が穿たれている。この穴は、井戸枠に転用される前からあったものらしく、井戸枠として利用する際に外側から、全長25cm、幅15cmほどの杉板材でふさいでいる。この井戸からは、土師器、須恵器が出土したが、全て井戸枠の内側から出土した。。出土した土師器、須恵器は、細片となっているものが多く、ここでは完形の小形広口壺のみを図化した。



第39図　ＳＥ6201井戸枠・出土遺物

NR6201（第40図～47図）　Ⅰトレンチ南部、5Ⅰ、6Ⅰトレンチ、Ⅱ6、Ⅱ7・Ng区で検出した。奈良時代後期における平野川と思われる大河川である。この自然流路は、亀井遺跡発掘調査時にNR6001として確認されていた。しかし、亀井遺跡調査時には、南側の肩の上がり始めをX＝－15365000付近で検出したのみであった。今回の調査では、この自然流路の北側の肩をNg（X＝－15346000）＋5m付近で検出した。計算してみると川幅は、約195mにもなる。

北側肩の検出面は、標高T.P.+7.40mである。これから急激に約1.7mほど落ち込み、川床に至っている。川床は、標高T.P.+5.35～5.75mで、南に徐々に傾斜しているが、強くえぐられる所もあり、流れの速さを思わせる。埋土は、総て細砂、あるいは粗砂である。この砂層中より、コンテナ10箱の遺物が出土した。

5Ⅰトレンチ、6Ⅰトレンチでは川床より杭列を2列検出した。

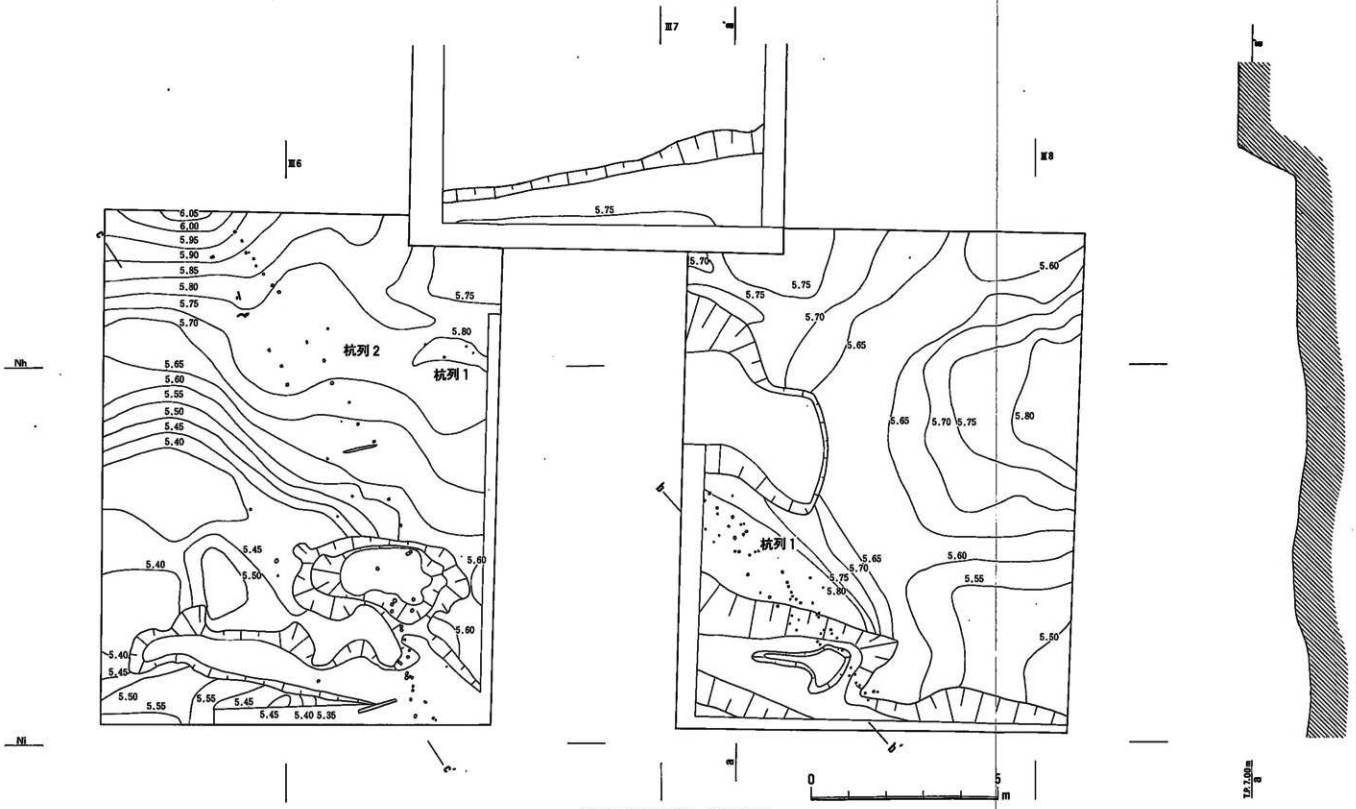
杭列1は、5Ⅰトレンチから6Ⅰトレンチにかけて、Ⅱ6、Ⅱ7・Ng、Nh区で検出した。北西から、南東にほぼ直線的にのびており、南は調査区外に続いている。杭列の方向は、NR6201の流れの方向から、約30°ほど東にふっている。62本の杭がほぼ垂直に打ちこまれている。杭は2列に打ちこまれている。幅は約1mほどであり、南に行くに従い幅は狭くなる。また、杭の配列、間隔もかなりふぞろいである。

検出された杭は、直径約10cmである。長さは、30cm前後のもの、50cm前後のもの、100cm前後のもの、と大別して3種類に分けられる。総て自然木で、樹皮がついたまま先端を3～4方向から斜めに尖らせている。

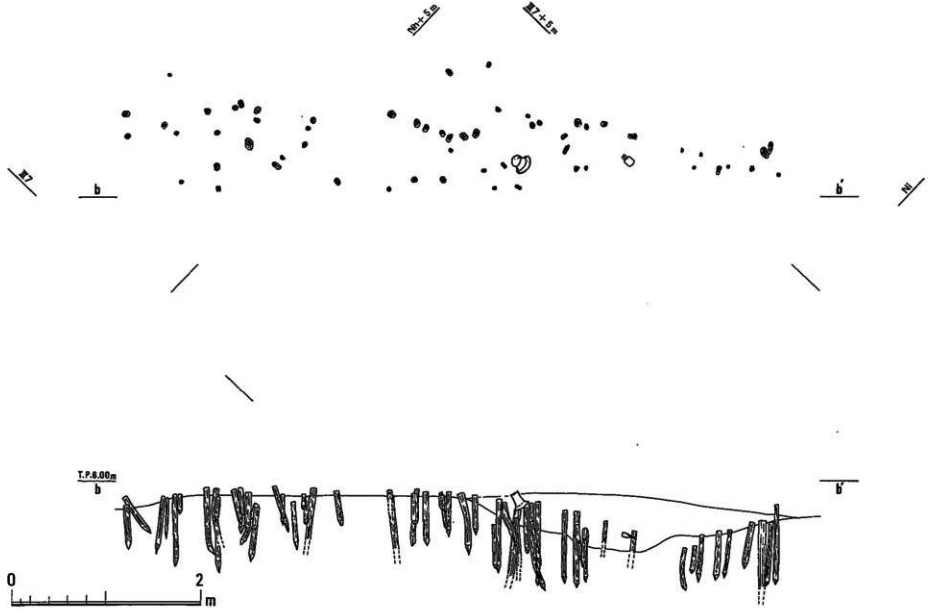
杭列2は、5Ⅰトレンチ、Ⅱ5、Ⅱ6・Ng、Nh区で検出した。北西から南東にほぼ直線的にのびており、北、南とも調査区外に続いている。杭列の方向はNR6201の流れの方向から、杭列1と同様、約30°ほど東にふっている。53本の杭が、ほぼ垂直に幅1mほどの間隔で2列平行に打たれているが、Nh＋7m、Ⅱ6＋3m付近で1列になる。また、横に打たれている杭もある。各列間の杭間距離はかなり規則的であり、3～8本の杭が一単位となって30cm間隔、70cm間隔と、等間隔で打ちこまれている。

検出された杭は、杭列1と同じで直径約10cm、長さ30cm前後、50cm前後、100cm前後、の3種類に大別できるが、長いものは150cm以上の杭もある。杭は自然木そのままを利用したものが多いが、加工木を利用したものが8本認められた。正方形、あるいは長方形の角材を利用している。自然木、加工木とも先端を3～4方向から斜めに尖らせている。

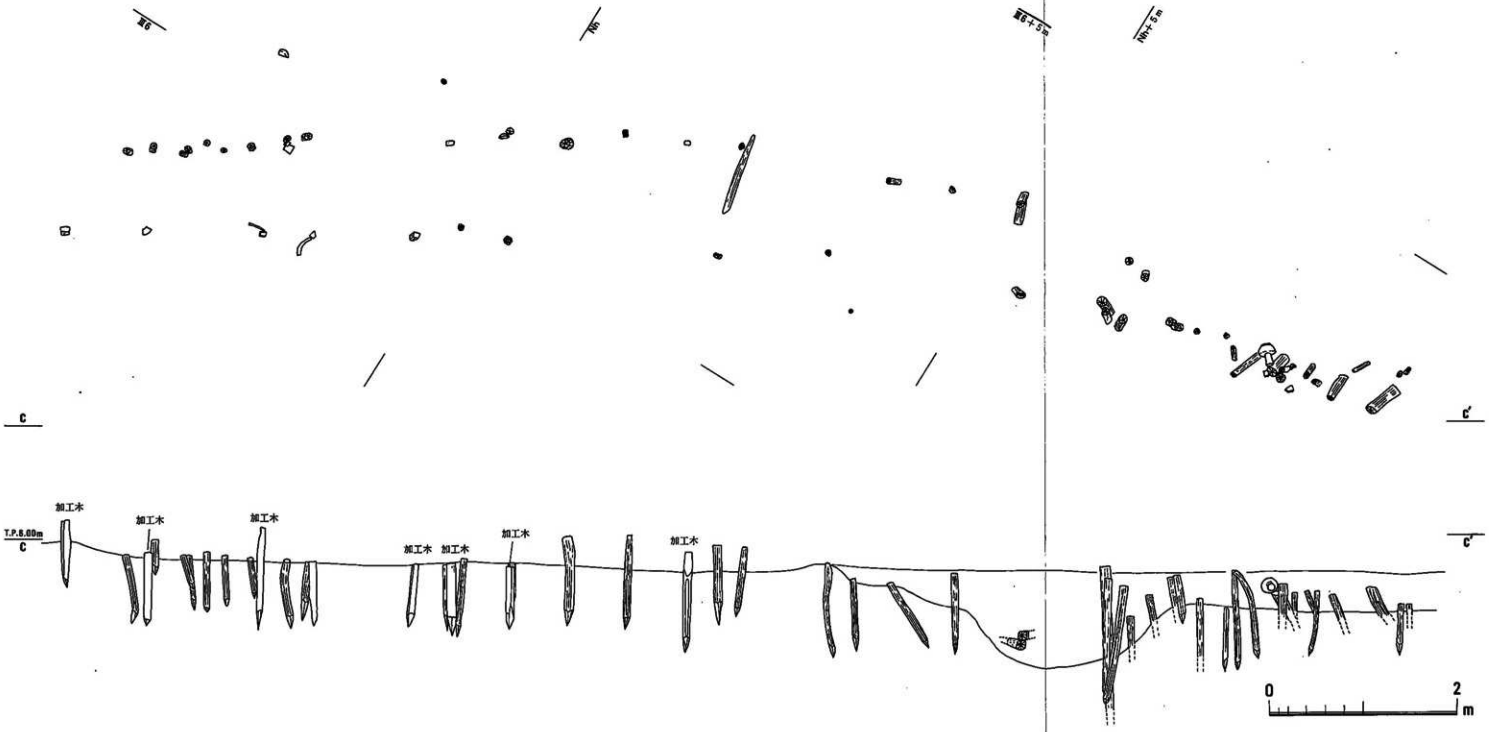
杭列1と杭列2は、約3mの間隔で平行して続いており、相互の関連性は非常に高いものといえる。しかし、ほとんどの杭が川床と同レベルかあるいは、10～30cmほど露出していたのみで、上部構造物はすべて流されてしまっている。この為、これらの杭列の用途が何であったか断定することはむずかしい。ただこの杭列、特に杭列2は弥生時代第7遺構面、落ち込み3702、3703間にある土堤状の盛り上りとその方向、位置をほぼ同じくするので、この土堤状の盛り上りの土留め杭として利用されたのかもしれない。



第40図　ＮＲ6201杭列１、杭列２平面図



第41図　ＮＲ6201杭列１平面図・断面図



第42図　ＮＲ6201杭列２平面図・断面図

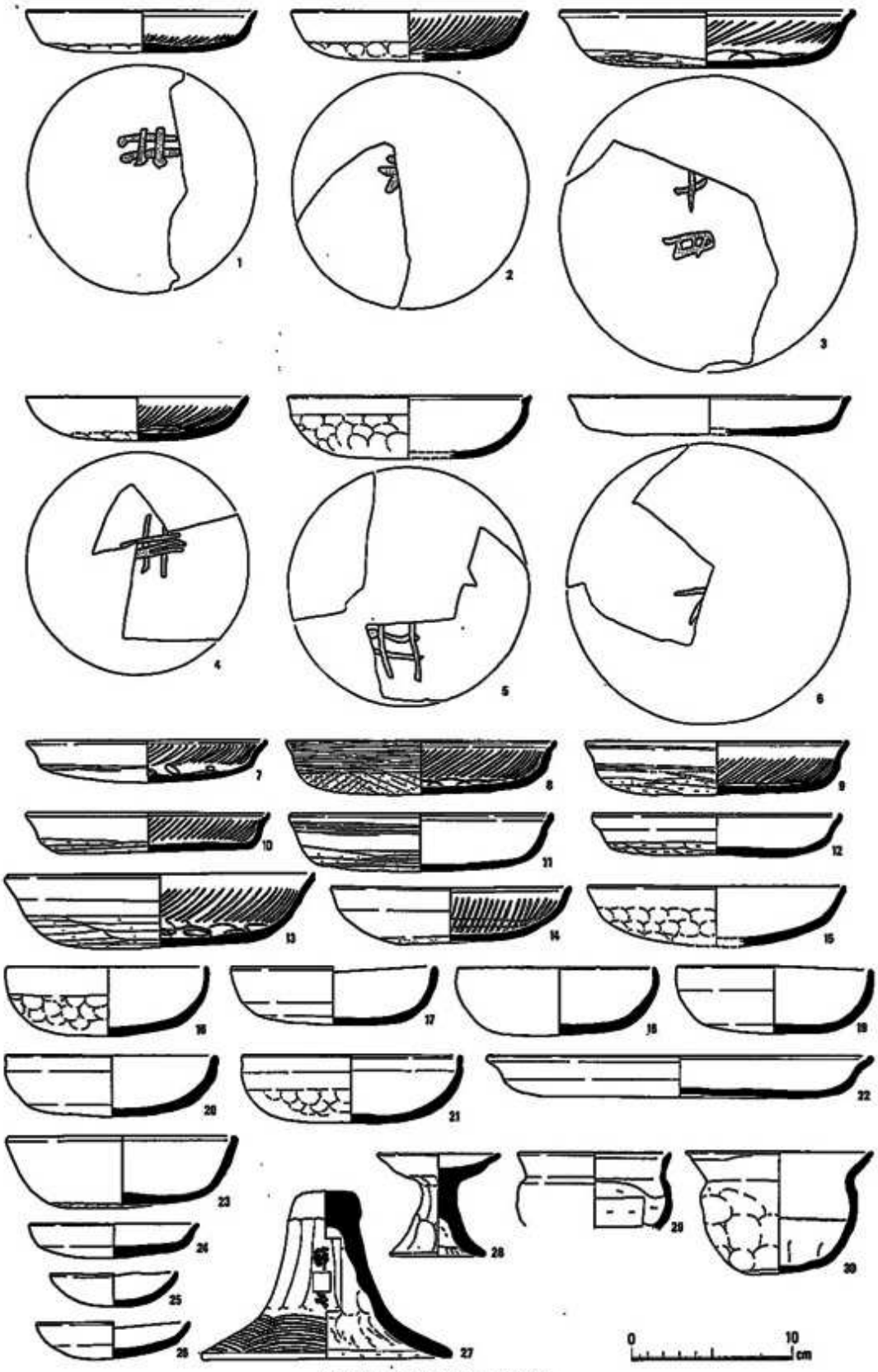
ＮＲ6201は、遺構のなかでも記したように砂層中から多量の土器が出土しているが、その時期も弥生時代から平安時代と、かなり幅がある。最も古い時期のものは、弥生時代前期（Ｉ様式新段階）のもので、壺、甕等の器種を含めて約10点存在しているが、いずれも激しいローリングを受け、器肌の荒れているものが多い。弥生時代中期後葉のものも含め、各様式ともわずかではあるが出土している。前期のものと同様に器肌の荒れたものが大半をしめる。

古墳時代の遺物も７世紀に至るまで各時期まんべんなく出土しているが、ひとつの特徴は、円筒埴輪片を含むことであろう。調査区内では、古墳は検出されておらず、現在のところ上流から流れてきたものと考えておくこととするが、周辺地域において、今後古墳の検出される可能性は極めて高いといえるであろう。

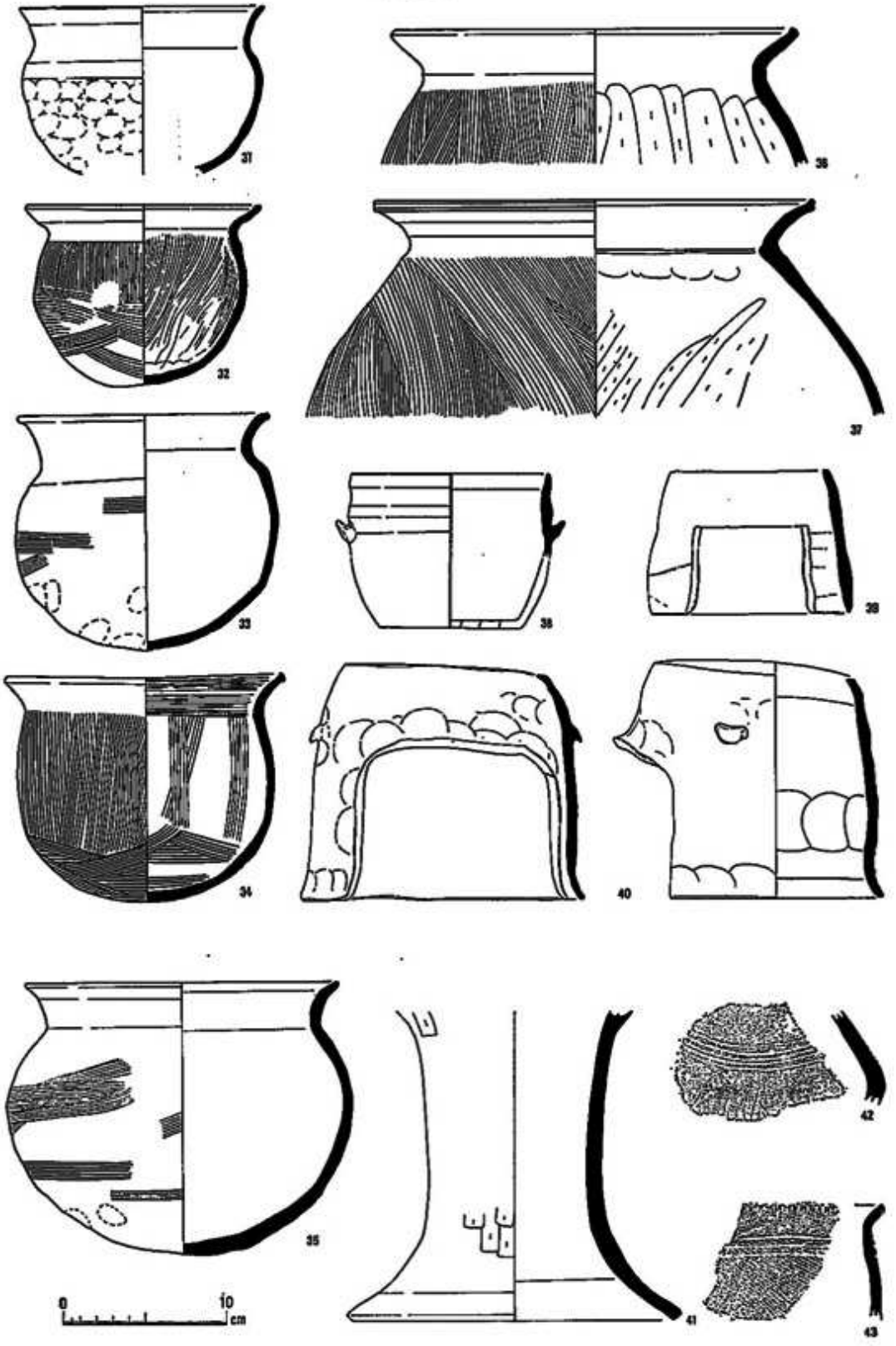
ＮＲ6201の砂層中、最も多く出土する土器は、奈良時代のものである。時期的には、８世紀初頭と考えられる二段放射線暗文を有する坏身（平城宮土器Ｉ）を初限として、平安時代に至る各時期のものがみうけられるが、その特徴は、ほとんど摩滅しておらず、保存状態は極めて良好なことであろう。土器類を概観すると、細片も含めれば、平城京において出土する器種の大半が出土しており、近接する集落を彷彿とすることができるが、時期別では平城京土器Ⅱに比定された土器類がもっとも多く、この時期に集中して墨書がみられる。また、竈が、図化しなかったものも含めて、計６個体が出土しており、他の土器と比べれば圧倒的に多いことが知られる。

１～６および27は、墨書土器である。１～５は、いわゆる坏Ａで、６は皿Ａである。外面底部に墨書が認められる。１、５は、墨書の大半が残っており、「井」と読める。２は、墨書の大半を失なっているが、「井」の一部であると思われる。４は、横線が一本多いが、他の墨書土器と比較して、これも「井」ではないかと考えられる。３は、「十四」と読める。27は、高坏Ａの脚部であるが、その面取りの一面に「薗□□」の墨書が認められた。意味は不明である。７、22は、皿Ａ、８～15は坏Ａである。１～４、７～10、13、14には、内面に放射線１段暗文が施され、２～４、７～９、13には、底部内面にラセン状暗文が施される。外面調整は、ヘラケズリ、ヘラミガキ、指押えと多様である。16～21は、椀Ｃである。16、18、21は、外面底部に指押えによる調整を施している。他は、ヨコナデである。23は、鉢Ｂである。24～26は、坏Ｃである。28は、手づくねの高坏ミニュチュア土器である。29、30は、壺Ｂ、31～37は甕Ａであるが、多様な調整のあり方を示している。38は、ミニュチュアの甑、39、40は、ミニュチュアの竈である。41～43は、流入した弥生式土器である。41は、杭列１にひっかかって出土している。

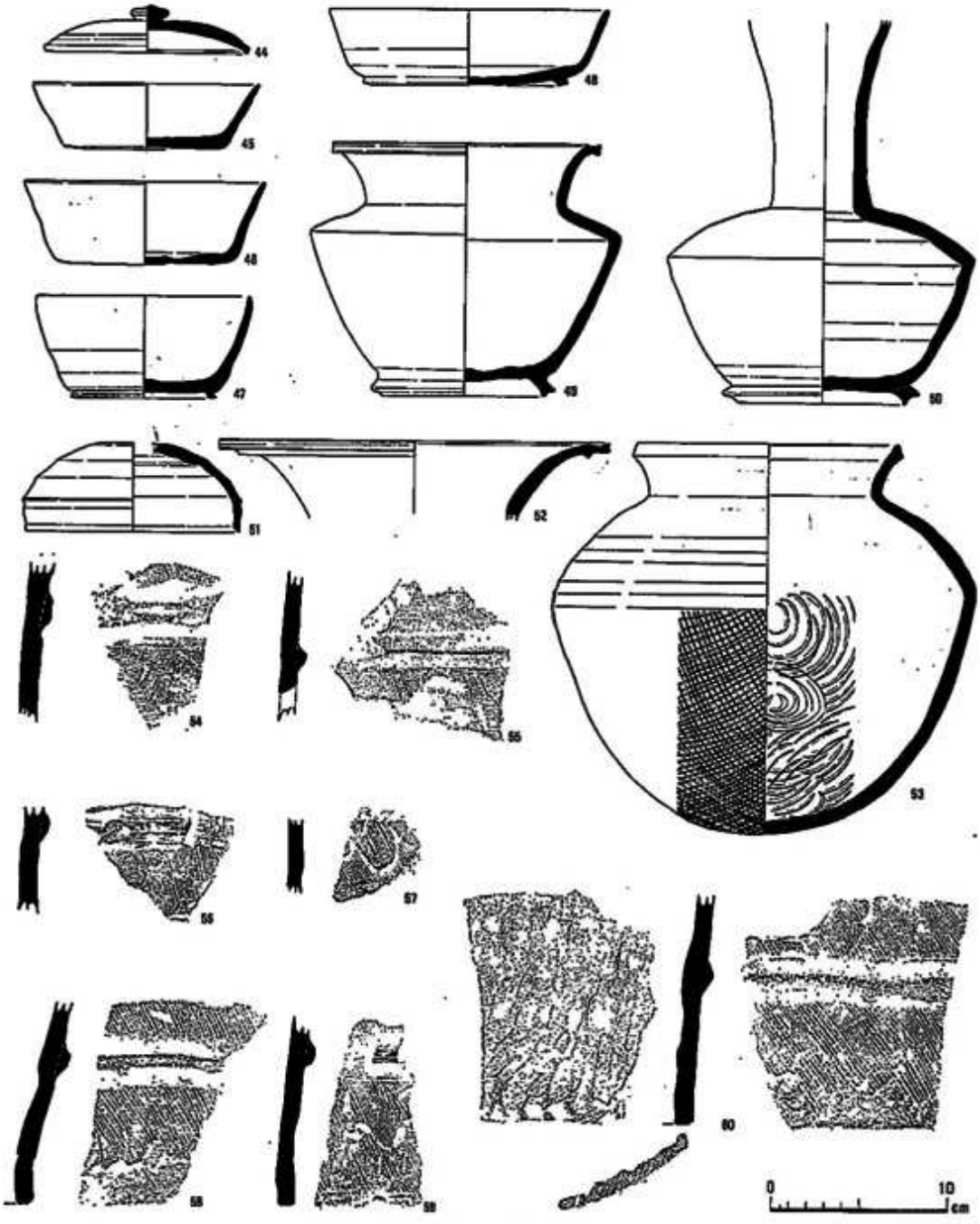
44～50、53は須恵器である。44は、杯ＢのＢ形態の蓋である。45、46は坏Ａである。47は椀Ｃである。48は、坏Ｂである。調整は内外面とも、ナデ、ヨコナデが多い。45、46の底部外面には、ヘラおこし、ヘラ切りの跡がみられる。49は、壺Ｈ、50は壺Ｋである。50は、杭列２にひっかかって出土した。53は、甕Ａである。外面格子目タタキ、内面青海波タタキを施している。51、52は、流入した古式須恵器である。51は坏蓋、52は広口壺の口縁部である。51、52とも、陶邑編年１段階の１に相当するものと思われる。54～60は、円筒埴輪片である。



第43図　ＮＲ6201出土遺物(1)



第44図　ＮＲ6201出土遺物(2)

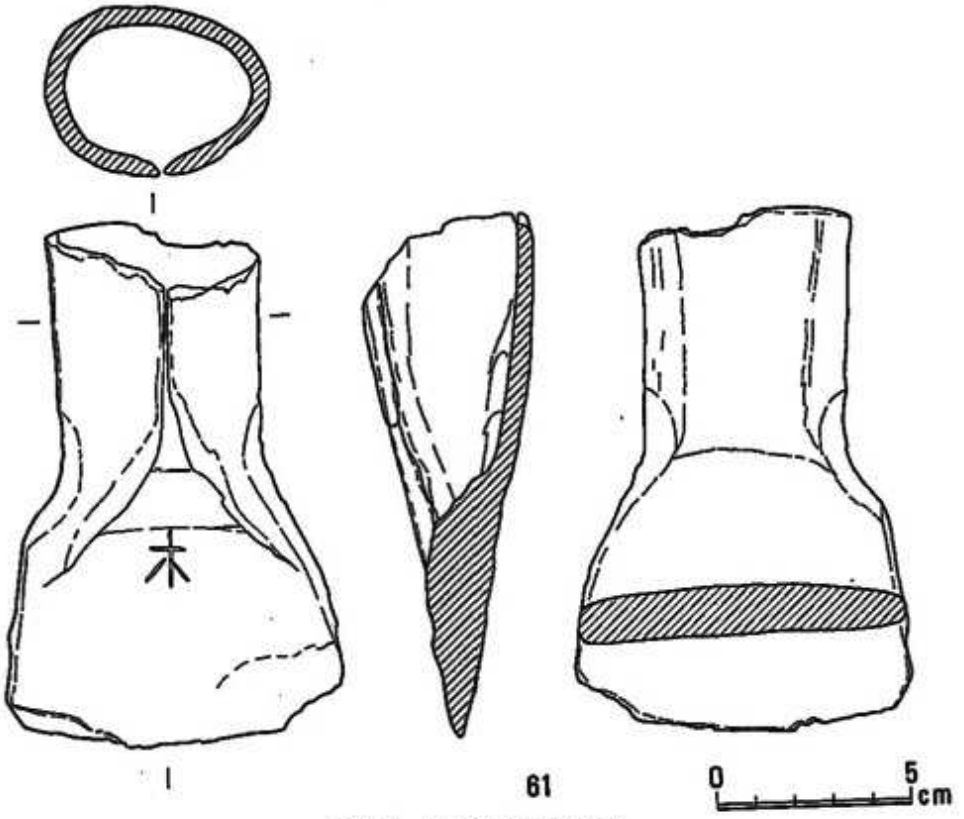


第45図　ＮＲ6201出土遺物(3)

ＮＲ6201から遺物は、砂層中よりまんべんなく出土した。しかし、土師器坏、皿は、一部分に集中して出土することが多く、何枚も重なった状態で出土したものもあった。このことから、土師器坏、皿は、一度に何枚か一括して河中に投棄したのではないかと考えられる。また、土器の内面に一部煤が付着しているものもあった。墨書された土器との関連性も合わせて、何の目的で使用され、このような捨て方をされたのか興味ある所である。

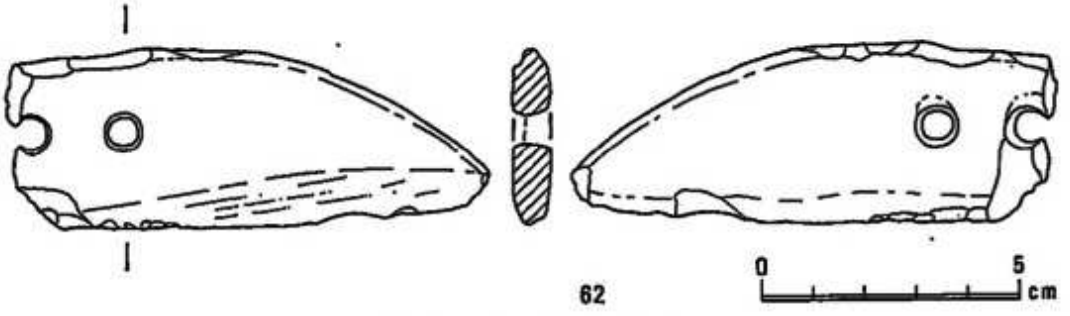
なお、奈良時代土器の名称は、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』で用いられたものを利用している。

61は、杭列１に引っかかって出土した鉄斧である。基部は欠損している。基部側を折り返し、袋部を作り出している。刃部は、袋部より広がる形態をもつ。長さ8.6cmを測る袋部は、長内径約５cm、短内径3.5cmの楕円形を呈する。正面、刃部中央上にタガネで「木」と彫ってある。これは、漢字の「木」のことなのか、あるいは、単なる記号なのか不明である。残存長13.5cm、刃部幅8.6cm、袋部外幅5.3cm、厚さは、袋部4.5cmを測る。



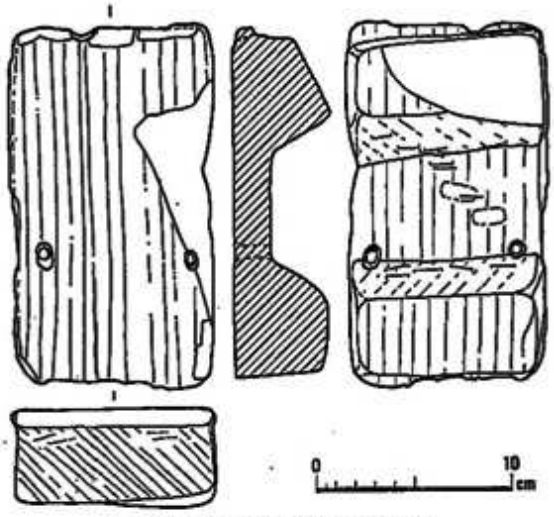
第46図　ＮＲ6201出土遺物(4)

62は、６Ｉトレンチ、ＮＲ6201砂層中より出土した石庖丁である。全体の約½ほどを欠損している。やや外彎する刃部をもつ片刃石庖丁である。中央背よりに紐孔が２ヶ所認められる。紐孔周辺には、紐擦れと考えられる摩滅痕が若干みられる。背部には敲打痕がみられる。現存長9.2cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmを測る。石材は、緑色凝灰岩である。



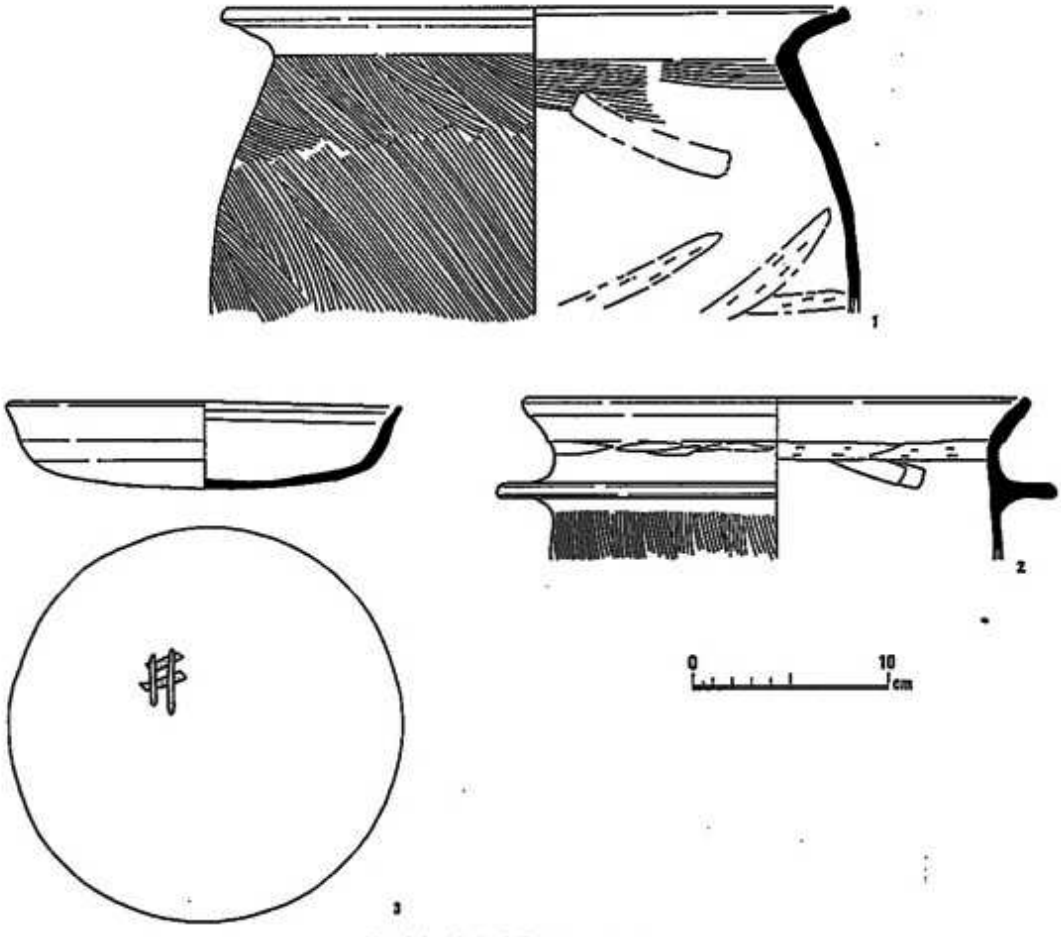
第47図　ＮＲ6201出土遺物(5)

第48、49図は奈良時代包含層中からの遺物である。第48図は、1Gトレンチ古墳時代砂層の直上より出土した下駄である。形態的にみて、奈良時代のものであると思われる。台と歯を一木から作る連歯下駄である。前壺は左の方によっており、右足用である。ケヤキを材としている。



第48図　奈良時代包含層出土遺物

第49図はGトレンチ淡茶褐色粘質砂泥中より出土した。1は甕Aの口縁部である。外面胴部は、ハケメ、内面ハケメとケズリの調整が施こされている。2は鍋釜の口縁部である。外面胴部は、ハケメ、内面は、頸部にケズリの調整を施こしている。3は坏Aである。口縁部は内外面ともヨコナデ、他はナデ調整である。底部外面より「井」の墨書が確認された。



第49図　奈良時代包含層出土遺物

第５節　中　　世

亀井北その３調査区では、中世の遺構面は２面検出された。いずれも、ＮＲ6201の自然堤防上に立地している。

中世第１遺構面は、Ｆ、Ｇ、Ｉトレンチ Ｎｂライン以南で確認した。標高約Ｔ．Ｐ．+6.9～8.0ｍを測り、奈良時代遺構面と同様、南に行くに従い高くなっている。掘立柱建物跡、柱穴、井戸、溝、土壙を検出した。

中世第２遺構面は、Ｉトレンチ Ｎｂライン以北を除き、全トレンチで確認した。標高約Ｔ．Ｐ．+7.0～8.3ｍを測り、この遺構面も南に行くに従い高くなっている。掘立柱建物跡、柱穴、井戸、溝、土壙を検出した。

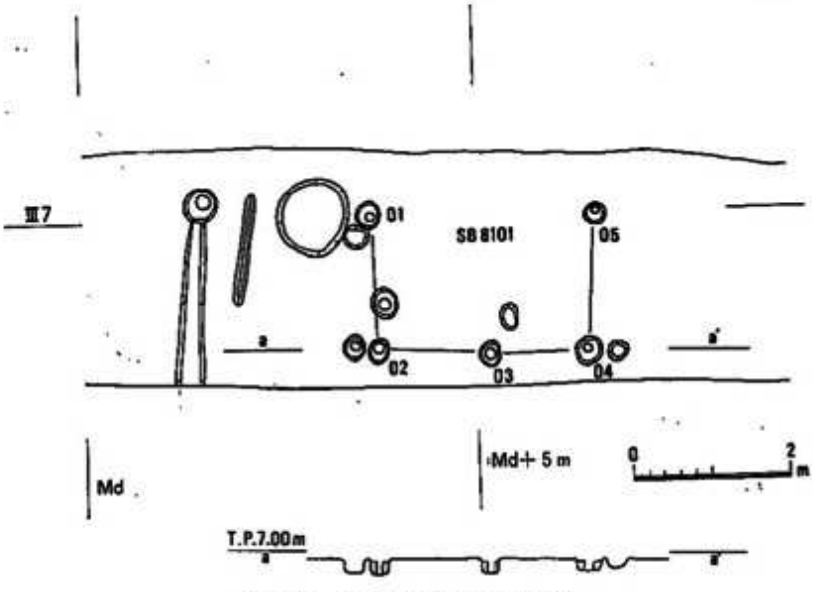
これらの遺構面は、いずれもＮＲ6201の堆積物を整地し、その上に構成されている。この遺構面で特徴的なことは、Ｉトレンチ Ｎｆ＋５ｍ付近から比高差約70cmをもって、南側が一段高くなっていることである。亀井遺跡Ａトレンチでは、現代の盛土以下、すぐにＮＲ6201の砂層が続いていた。今回５Ｉトレンチで、この砂層と整地土層の境界を検出した。この境界線は、北に向かって傾斜している。このことから、ＮＲ6201の堆積物を北に押しならして、この面を作出していったことが理解できる。この一段高い面からは、柱穴、井戸、溝、土壙などを多数検出した。一方、下段は、溝などが主要な遺構であった。このことから上段は居住域、下段は生産域として、利用されていたのではないかと考えられる。

中世第１遺構面（付図22・23　第50図～55図　図版26～28・33）

中世第１遺構面は、暗茶褐色砂泥、淡茶褐色シルト、暗灰茶色粘土など、多数の整地土層をベースとしている。掘立柱建物跡１棟、井戸１基、溝46条（畝７条）、土壙９基を検出した。

ＳＢ8101（第50図）

Ｇトレンチ、Ⅱ６・Ｍｄ区で検出した。２間×１間以上の掘立柱建物跡である。規模は、桁行約1.7ｍ以上、梁行約3.0ｍを測る。柱間距離は、桁行約1.7ｍ、梁行約1.5ｍを測る。南北

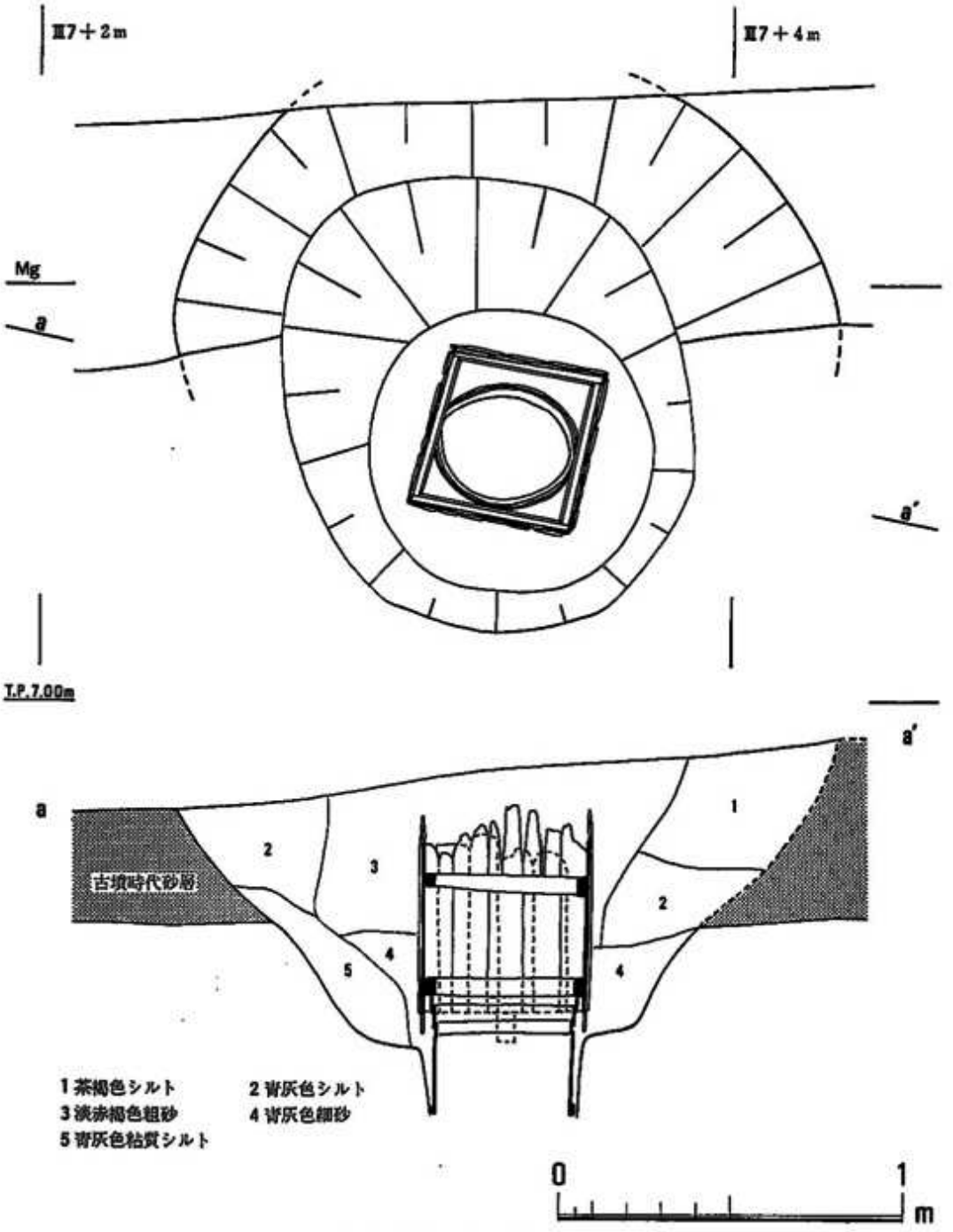


第50図　ＳＢ8101平面図・断面図

主軸方向は、ほぼN—90°—Eである。柱穴掘り方は、直径約0.4mの円形で、深さは、約0.2mであり、底面は、T.P.+6.7m前後で一致している。全ての柱穴から柱あたりを確認した。埋土は、暗灰褐色粗砂、暗茶灰色粘質土などである。遺物は出土しなかった。

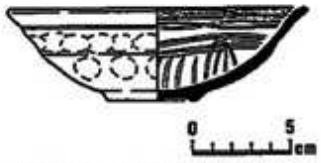
この他、1Fトレンチ、6Iトレンチで柱穴を検出したが、建物の復元はできなかった。

SE8101（第51図・52図）



第51図　SE8101平面図・断面図

Gトレンチ、Ⅱ7・Mf、Mg区で検出した。古墳時代砂層を掘りぬいた井戸である。径約2mほどのプランを呈する井戸である。埋土は第51図の通りであり、井戸枠内には砂が埋まっていた。井戸枠は、比較的良好に残っていた。木組は、2段であり、1辺約4mの角材を使用している。この木組の外側に側板を2重にあてている。下段の木組の下に、曲物を3段重ねている。曲物内から出土した瓦器椀を1点図化した。法量は、口径15.4cm、器高4.8cm、高台径4.5cmである。口縁部外面はヨコナデ、外面は指押え、内面はナデの後、見込み部は平行線暗文、側面は圏線状に暗文が施されている。



第52図　SE8101出土遺物

SD8101～8124　Fトレンチ、1F、2Fトレンチ全域で検出された溝群である。主軸を南北にとる溝群と、東西にとる溝群がある。両溝群とも、主軸方向は、ほぼに方位上にのっているものが多い。幅は0.3～1.0m、深さは0.05～0.15mを測る。埋土は、茶灰色粘質土、あるいは灰褐色粘質土が多い。前後関係は、切り合いからみて、東西主軸の溝群が新しい。遺物は、瓦器、土師器、須恵器などが出土したが、細片の為図化できなかった。

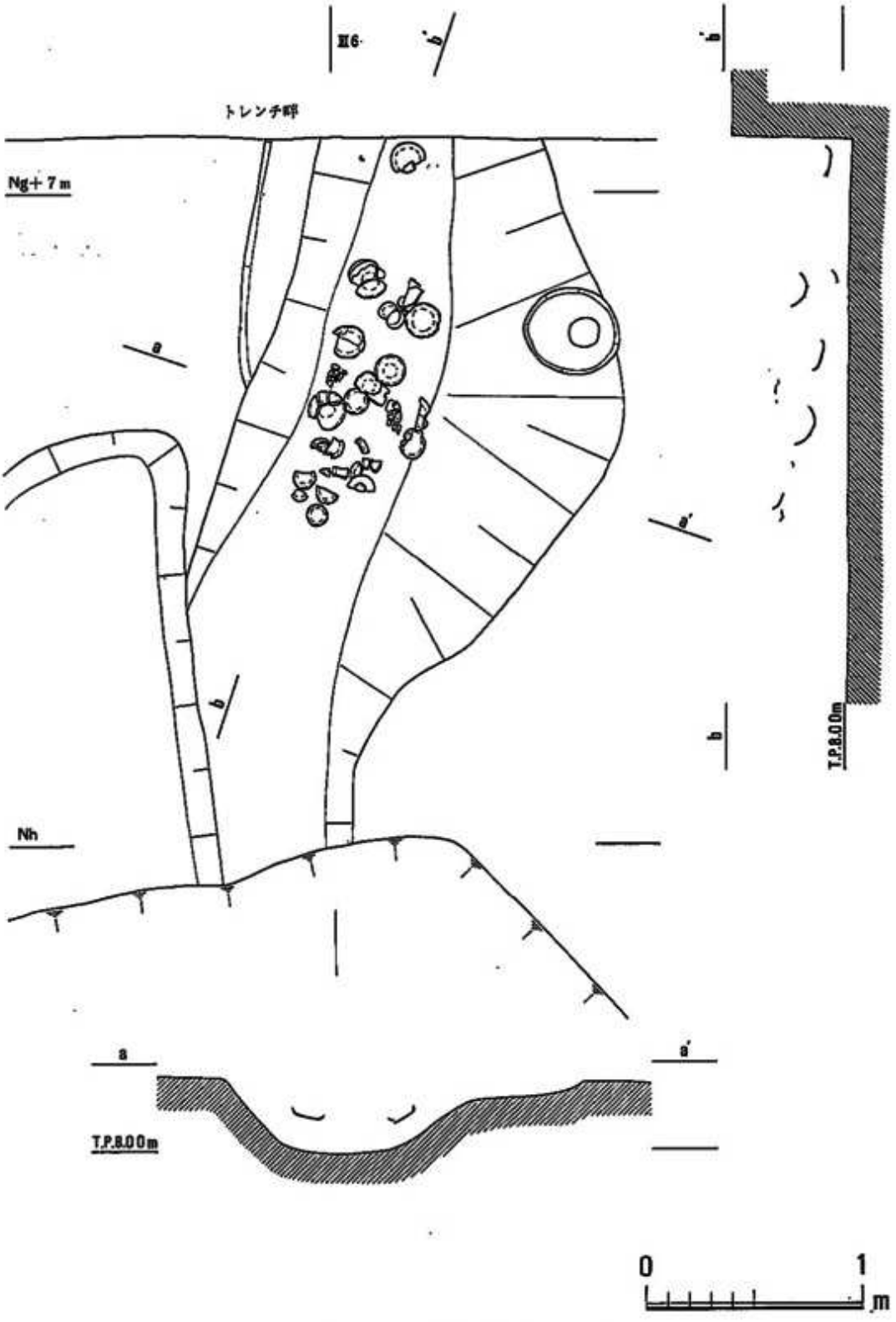
SD8125～8129　Gトレンチ北部、1G、2Gトレンチ、Ⅱ6、Ⅱ7、Ⅱ8・Mc区で検出した溝群である。東西主軸の溝を中心とし、南北主軸の溝は、SD8127のみである。主軸方向は、ほぼ方位にのっている。幅は約1.2～1.5m、深さは約0.1～0.5mを測る。埋土は、茶褐色、茶灰色、灰茶色の粘質土とシルトなどである。遺物は、瓦器、土師器、須恵器などが出土したが、細片の為、図化できなかった。

SD8130・8131　Gトレンチ中央部、Ⅱ6・Md区で検出した。主軸は、ほぼ東西である。幅は約0.3m、深さはSD8130が約0.1m、SD8131が約0.03mである。埋土は、灰茶色土である。これらの溝は、SB8101の北約1.5mに位置しており、SB8101と何か関係があるかもしれない。遺物は出土しなかった。

SD8132～8142　Gトレンチ南部、Ⅱ6、Ⅱ7、Ⅱ8・Me、Mf、Mg区で検出した。東西主軸の溝群である。主軸方向は、SD8135のみN－80°－Eであり、他はN－80～85°－Wである。幅はSD8132のみ約4mと広いが、他は0.3～1.2mである。深さは約0.05～0.15mである。埋土は、茶褐色砂質シルトなどである。遺物は、瓦器、土師器、須恵器などが出土したが、細片の為、図化できなかった。

SD8143・8144・畝8101～8107　Iトレンチ中央部、Ⅱ6、Ⅱ7・Nb、Nc区で検出した。SD8143も畝の一部と思われる。畑のウネと認定できるような遺構は、この地区のみであった。高さは、0.03～0.05mほどで、ほとんど削平されている。畝の間隔は、約0.6mである。ベースである淡茶褐色シルトをそのまま盛り上げている。主軸方向は、N－10°－Eである。幅は約0.3m、深さは約0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

SD8145・8146（第53図・54図）　5Iトレンチ、Ⅱ5、Ⅱ6・Ng、Nh区で検出した。SD8145はSD8146に切られており、西側肩の一部を検出したのみである。深さは約0.2mである。

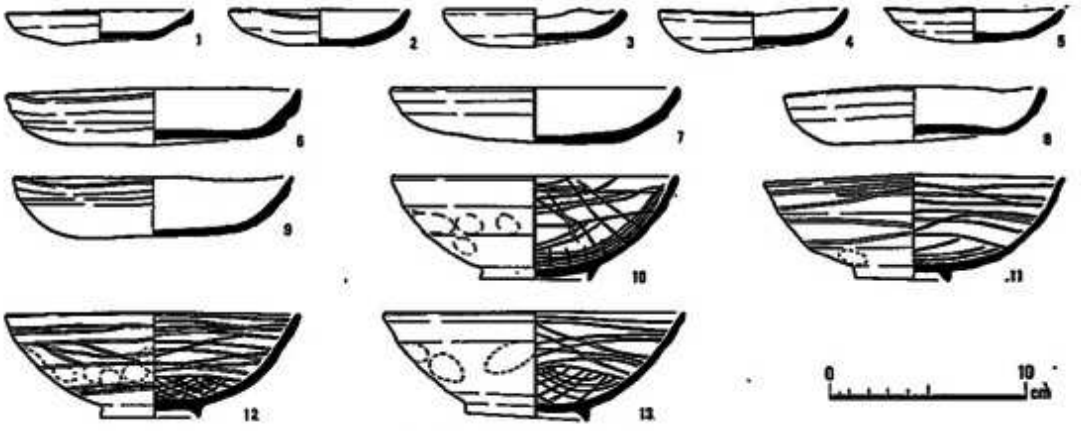


第53図　ＳＤ8146遺物出土状況図・断面図

遺物は出土しなかった。

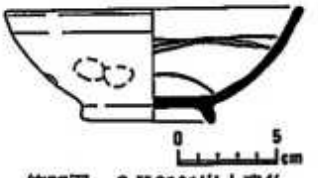
ＳＤ8146は、南北を主軸とする溝で、主軸方向は、Ｎ－80°－Ｅである。幅は約1.1～1.6mであり、東にふくらんでいる。深さは約0.35mである。埋土は２層に分かれ、上層が暗茶褐色砂泥、下層が茶褐色砂土である。この溝からは、第54図のように遺物が一括して出土した。遺物は、ほぼ茶褐色砂土中より出土した。遺物はこの他にも、瓦器、土師器の細片が出土している。今回は、一括遺物のなかから13点図化した。

１～５は、土師器小皿、６～９は土師器皿である。いずれも口縁部内外面ヨコナデ、内外面ナデ調整を施している。10～13は、瓦器椀である。暗文は、11が見込み部に平行線状暗文、他は格子状暗文を施している。11、12は、外面にミガキが施されている。



第54図　ＳＤ8146出土遺物

ＳＫ8101（第55図）　１Ｆトレンチ、Ⅱ７・Ｌｊ区で検出した。東西方向を主軸とする、長辺径3.2m、短辺径0.8mの長方形プランを呈する土壙である。深さは約0.3mを測る。西端部から完形の瓦器椀が１点出土した。風化の為、細かい調整はわからなかったが尾上実氏の編年によるⅠ－２期にあたり、11世紀末の時期が与えられている。



第55図　ＳＫ8101出土遺物

ＳＫ8102　２Ｇトレンチ、Ⅱ７・Ｍｂ、Ｍｃ区で検出した。北側は調査区外であるが、一辺約１～1.5mの６角形状プランを呈する。深さは約0.1mを測る。埋土は、淡灰褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ8103　Ｇトレンチ、Ⅱ７・Ｍｃ区で検出した。径約１mほどの円形プランを呈する。深さは約0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＫ8104　Ｇトレンチ、Ⅱ６・Ｍｄ区で検出した。径約１mほどの円形プランを呈する。深さは約0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＫ8105　４Ｇトレンチ、Ⅱ８・Ｍｆ区で検出した。東側は調査区外であるが、長径1.3m以上、短径約1.9mの楕円形プランを呈するものと思われる。深さは約0.5mを測る。埋土は、灰褐色砂泥である。

ＳＫ8106　４Ｇトレンチ、Ⅱ７・Ｍｆ区で検出した。一辺約1.6mの方形プランを呈する。深さは約0.4mを測る。埋土は、２層に分かれ、上層が灰茶色粘質土、下層が淡灰色粗砂である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ8107　６Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｈ区で検出した。西側を攪乱で切られているが、直径約1.6mの円形プランを呈するものと思われる。深さは約0.2mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ8108　６Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｈ区で検出した。西側を攪乱で切られ、南側は調査区外である。プランは、楕円形を呈するものと思われるが、規模は不明である。深さは約0.4mを測る。遺物は出土しなかった。

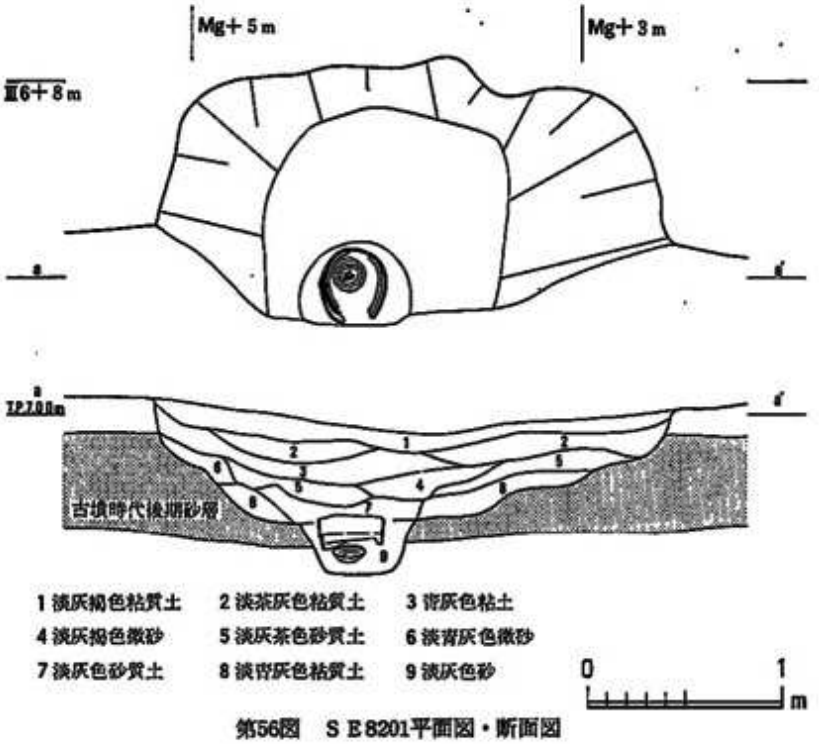
中世第２遺構面（付図23・24　第56～76図　図版29～33）

中世第２遺構面は、茶灰色粘質土、茶褐色土、淡茶褐色砂泥、暗灰褐色土などの整地土層をベースとしている。掘立柱建物跡、柱穴、井戸５基、溝68条、土壙23基を検出した。

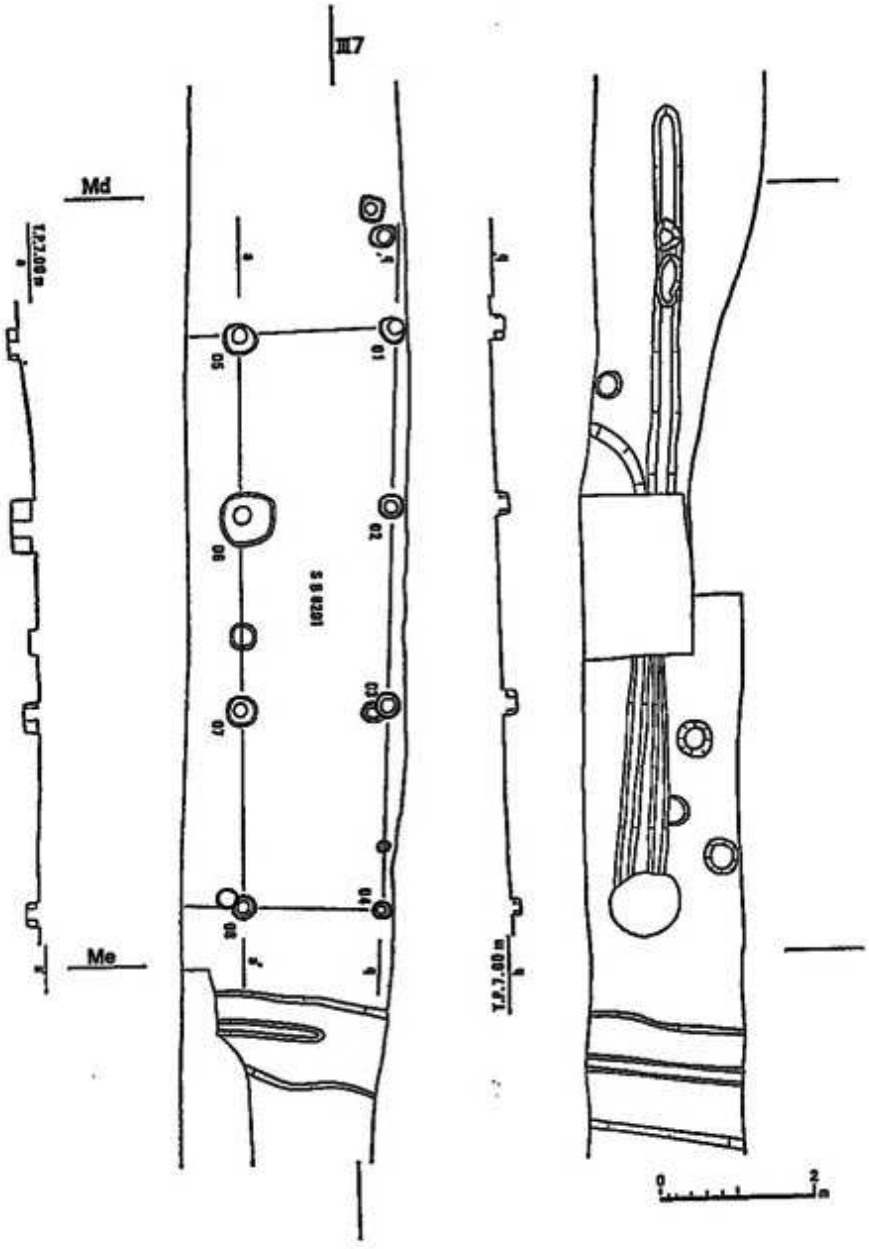
ＳＢ8201（第57図・58図）　Ｇトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｍｄ区で検出した。３間×１間以上の廂付の掘立柱建物跡である。建物主体は、西側にのびる為検出できなかった。梁行は、約7.4mで、廂までは約1.8mを測る。柱間距離は、2.3～2.5mである。主軸方向は、ほぼ東西である。柱穴掘り方は、建物側は、直径約0.4～0.7m、廂側は、直径約0.3mの円形である。深さは0.1～0.3mである。底面は建物側が、Ｔ.Ｐ.+6.7m前後、廂側が、Ｔ.Ｐ.+6.8m前後で、それぞれ一致している。全てのピットから柱あたりを確認した。埋土は、茶灰色土、茶褐色土である。遺物は、Pit 8206より羽釜口縁部が出土した。

ＳＥ8201（第56図・59図）　Ｇトレンチ、Ⅱ６・Ｍｇ区で検出した。曲物井戸である。東側は攪乱によって切られているが、一辺約2.5mの方形プランを呈するものと思われる。古墳時代砂層を掘りぬいた井戸である。埋土は第56図の通りである。肩は、なだらかに落ちていき、中央部を掘りくぼめて、曲物を１段おいている。

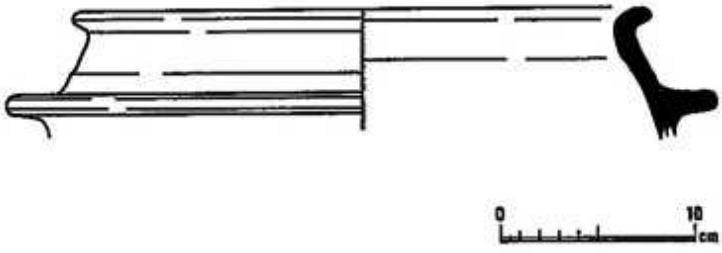
曲物内部より、完形の瓦器塊が一点出土した。



第56図　ＳＥ8201平面図・断面図

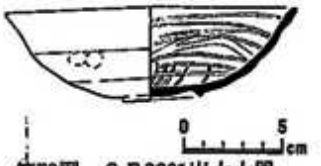


第57図　ＳＢ8201平面図・断面図



第58図　ＳＢ8201、Pit 8206出土遺物

口径15cm、器高5.0cm、高台径4.0cmを測り、見込み部には平行線状暗文、側面にはラセン状暗文を施している。

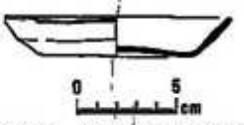


第59図　ＳＥ8201出土土器

ＳＥ8202（第60図）　６Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｇ区で検出した。東側は、調査区外であるが、一辺約2.2mの方形プランを呈するものと思われる。ＮＲ6201の砂層を掘りこむ井戸である。深さ約1.4mを測る。埋土は、２層に分かれ、上層が茶灰色土、下層が灰黄色粘質砂泥である。井戸底に曲物の痕跡を認めた。瓦器、土師器が出土したが、ここでは土師器小皿１点のみを図化した。

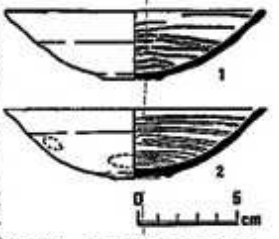
第60図　ＳＥ8202出土遺物

ＳＥ8203（第61図）　６Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｈ区で検出した。東側は、調査区外で検出できなかったが、一辺約2.2mの方形プランを呈するものと思われる。ＮＲ6201の砂層を掘りこむ井戸である。深さは約1.5mを測る。埋土は、５層に分かれる。井戸掘方の埋土として、黄褐色砂泥、黄茶色細砂、茶灰色粘質砂泥が堆積し、曲物内に暗灰黄色粘質泥砂、淡灰黄色粘質砂泥が堆積している。井戸底に曲物の痕跡を認めた。瓦器、土師器が出土したが、ここでは土師器皿のみを図化した。



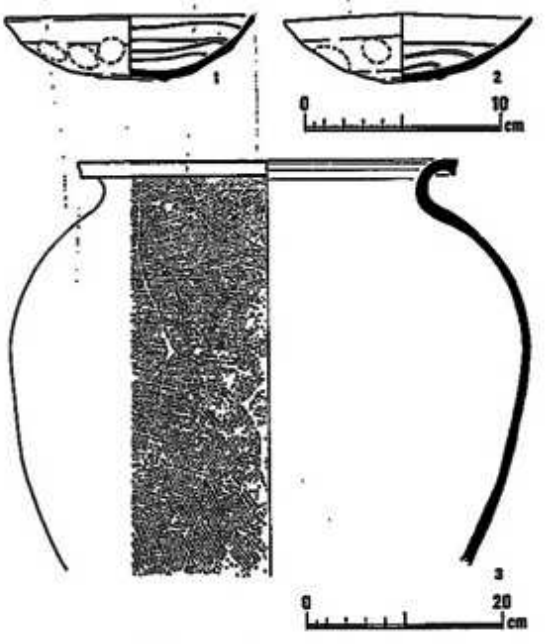
第61図　ＳＥ8203出土遺物

ＳＥ8204（第62図）　６Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｈ区で検出した。一辺約1.5mの方形プランの井戸である。ＮＲ6201の砂層を掘りこんでいる。深さは約1.3mを測る。埋土は、３層に分かれる。井戸掘方の埋土として、茶褐色砂泥、淡茶灰色細砂、曲物内に、暗褐色砂泥が堆積している。井戸底に曲物の痕跡を認めた。曲内より瓦器椀が出土した。



第62図　ＳＥ8204出土遺物

ＳＥ8205（第63図）　６Ｉトレンチ、Ⅱ７・Ｎｈで検出した。羽釜井戸である。ＳＥ8203の西に接して検出した。径約1.2mの円形プランをもつ。深さは約1.5mである。３は、この井戸最下部に置かれた、魚住の大甕である。この上段に、２段ほど土師器羽釜を重ねていたようだが、くずれており、復元できなかった。埋土内より瓦器、土師器が出土したが、ここでは、瓦器椀を２点図化した。１、２とも、器高は低く高台は退化しており、粘土紐をはりつけるだけのものである。暗文も少ない。３は魚住の大甕で、外面は、全面タタキの調整が施こされている。内面はナデている。口縁部38.4cm、胴部53cm、残存高42cmを測る。



第63図　ＳＥ8205出土遺物

ＳＤ8201～8215・ＳＤ8218　Ｆトレンチ北部Ⅱ６、Ⅱ７、Ⅱ８・Ｌｉ、Ｌｊ区で検出した南北、東西主軸方向の溝群である。主軸の方向は、南北を主軸とするものはＮ－10°－Ｅであり、東西を主軸とするものは、方位にのっている。幅は、大別して、３つに分けることができ、ＳＤ8201、8218が、約3.5～5.5m、ＳＤ8203、ＳＤ8213、ＳＤ8214が約1.5～2.5m、ＳＤ8202、ＳＤ8204～8211が約0.2～0.5mである。深さは、ＳＤ8201が約0.3m、ＳＤ8203、ＳＤ8213、ＳＤ8214が約0.15m、その他が約0.05mを測る。埋土は、茶灰色粘質土、青茶色粘質土などである。遺物は、瓦器、土師器、須恵器などが出土したが、細片の為図化することはできなかった。

ＳＤ8216、8217・ＳＤ8219～8222　Ｆトレンチ南部、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｍａ、Ｍｂ区で検出した、東西主軸方向の小溝群である。主軸の方向は、Ｎ－85°－Ｗである。幅は約0.2m、深さは約0.05mを測る。埋土は、灰色粘質土、茶灰色粘質土である。遺物は、瓦器、土師器などが出土したが、細片の為、図化できなかった。

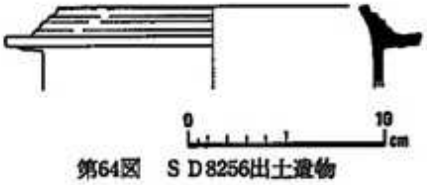
ＳＤ8223～8225　２Ｇトレンチ、Ⅱ７、Ⅱ８・Ｍｃ区で検出した。ＳＤ8223は、南北主軸方向の溝であり、西側肩は、攪乱によって切られていた。ＳＤ8223、8224は、東西主軸方向の溝で、ＳＤ8225の南側肩は調査区外の為検出できなかった。主軸の方向は、３溝とも、ほぼ方位にのっている。幅は、ＳＤ8224が約2.0m、深さは、３溝とも約0.15mである。埋土は、灰色粘質シルトである。遺物は、瓦器、土師器などが出土したが、細片の為図化できなかった。

ＳＤ8226～8238　Ｇトレンチ全域で検出した溝群である。主軸を南北にとる溝は、ＳＤ8226、8227のみで、他は、主軸を東西にとっている。主軸の方向は、ほぼ方位にのっている。幅は、ＳＤ8226、8227が約0.2mを測る他は、約0.6～2.0mである。深さは、約0.05～0.2mを測る。埋土は、淡茶褐色粘質土などである。遺物は、瓦器、土師器などが出土したが、細片の為図化できなかった。

ＳＤ8239～8244　１Ｈトレンチ、２Ｈトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｍｉ区で検出した溝群である。東西主軸方向の溝群である。主軸の方向は、Ｎ－75°－Ｗである。幅は約0.2～1.4mである。深さは0.05～0.2mである。埋土は、暗茶灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ8245～8254　Ｉトレンチ中央部、Ⅱ５、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｎｂ、Ｎｃ、Ｎｄ、Ｎｅ区で検出した溝群である。ＳＤ8252、ＳＤ8253以外は、全て主軸は東西方向である。主軸の方向は、南北主軸のものは、ほぼ方位にのっており、東西主軸のものは、Ｎ－80°－Ｗである。幅は約0.5～５mである。深さは約0.1～0.7mである。暗茶灰色砂質シルト、淡褐灰色砂泥、暗褐灰色粘質砂泥などである。遺物は、瓦器、土師器などが出土したが、細片の為図化できなかった。

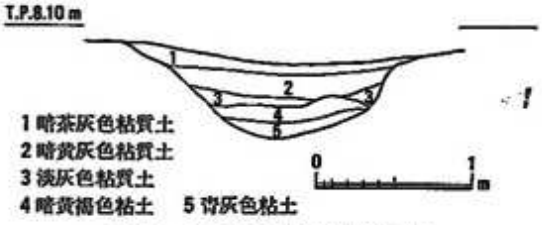
ＳＤ8255～8260、ＳＤ8262～8268（第64図）　Ｉトレンチ南部、５Ｉ、６Ｉトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７、Ⅱ８・Ｎｇ、Ｎｈ区で検出した溝群である。この地区は、整地によって一段高くなった所である。主軸を南北にとるものと、東西にとるものがある。主軸の方向は、東西主軸のものが、Ｎ－80°－Ｗを



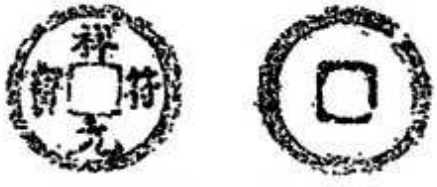
第64図　ＳＤ8256出土遺物

とるものが多い。南北主軸のものは、ほぼ方位にのっているが、ＳＤ8262は、Ｎ－45°－Ｅである。幅は約0.2～0.5mを測り、深さは約0.2～0.3mである。埋土は、暗茶褐色砂泥、茶褐色土、淡茶褐色土、黒褐色土などである。遺物は、瓦器、土師器などが出土したが、ここでは、ＳＤ8256出土の瓦器羽釜を図化した。

ＳＤ8261（第65図・66図・68図・69図）　Ｉトレンチ南部、Ⅱ６・Ｎｆ、Ｎｇ、Ｎｈ区で検出した。南北主軸方向の溝である。主軸はほぼ方位にのっている。長さ約18m、幅約２m、深さ約0.6mの溝である。埋土は、第65図の通りである。５層に分かれ、1. 暗茶灰色粘質土、2. 暗黄灰色粘質土、3. 淡灰色粘質土、4. 暗黄褐色粘土、5. 青灰色粘土の順に堆積している。遺物は、暗茶灰色粘質土、暗黄灰色粘質土、暗黄褐色粘土中より多く出土した。遺物は、図化したものも含めて、コンテナにして約４箱ほど出土した。このなかでも、特徴的なことは、今回は図化しなかったが、丸瓦、平瓦片が多量に出土したことである。コンテナ約２箱分出土している。また、祥符元宝が１点出土した。これは、北宋銭でその鋳造開始年代が1008年であることが知られている。



第65図　ＳＤ8261北壁土層断面図

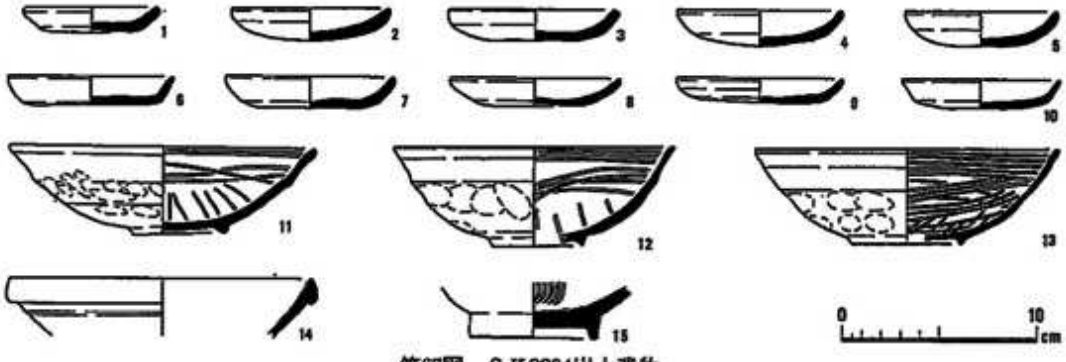


第66図　ＳＤ8261出土遺物(1)実大

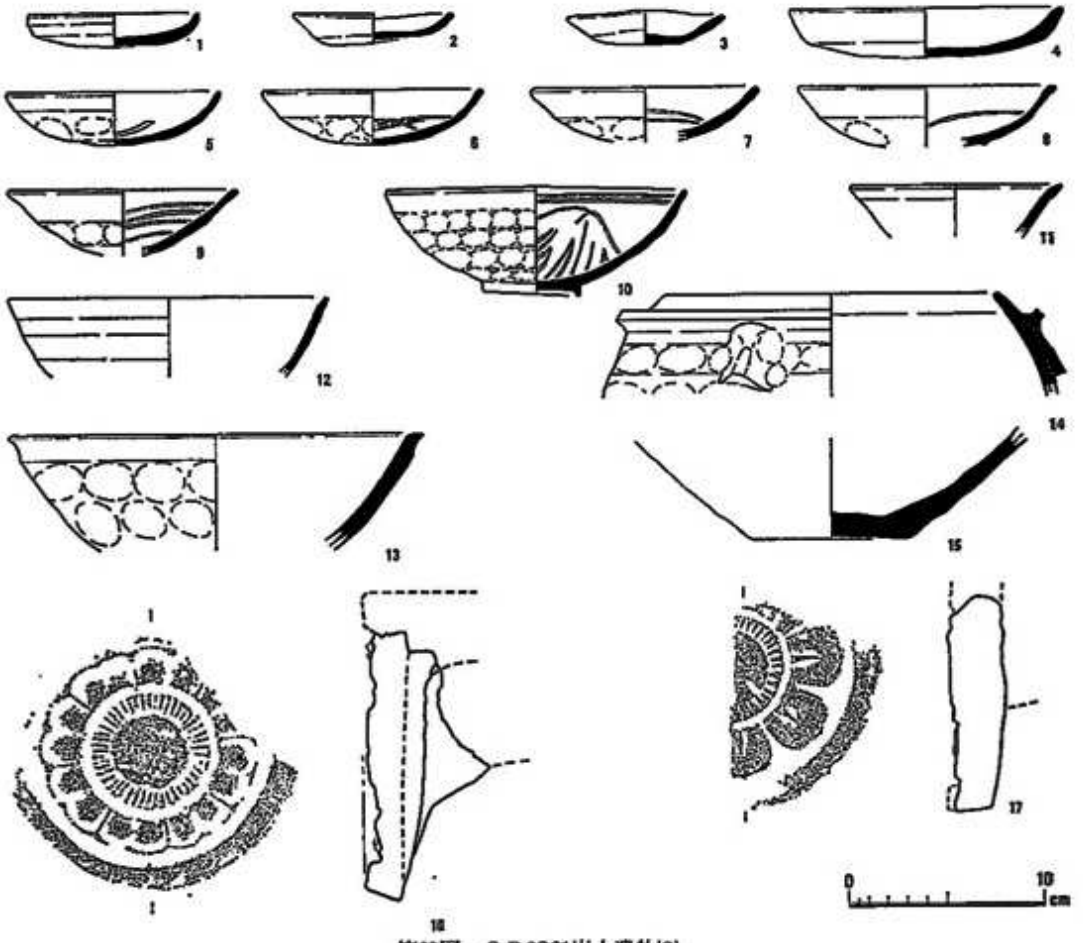
ＳＤ8261から出土した遺物は、この他に第68図、第69図に示した。土師器小皿、皿（１～４）瓦器椀（５～10）脚つき羽釜（14）白磁碗（11、12）陶器（15）などが出土している。また軒丸瓦が２点出土した（16、17）。16は、複弁八弁蓮華文、17は単弁八弁蓮華文軒丸瓦である。第69図は、硯である。

ＳＫ8201・8202・8203　２Ｆトレンチ南部、Ⅱ８・Ｌｊ区で検出した。ＳＫ8201は、東側が調査区外であるが、長径1.3m以上、短径約1.2mの楕円形プランを呈するものと思われる。主軸方向は、ほぼ東西である。ＳＫ8202、8203は、一辺約1.3mの方形プランをもつ。深さは、0.05～0.15mである。埋土は暗茶灰色粘質シルトである。遺物はＳＫ8202、8203で若干出土した。

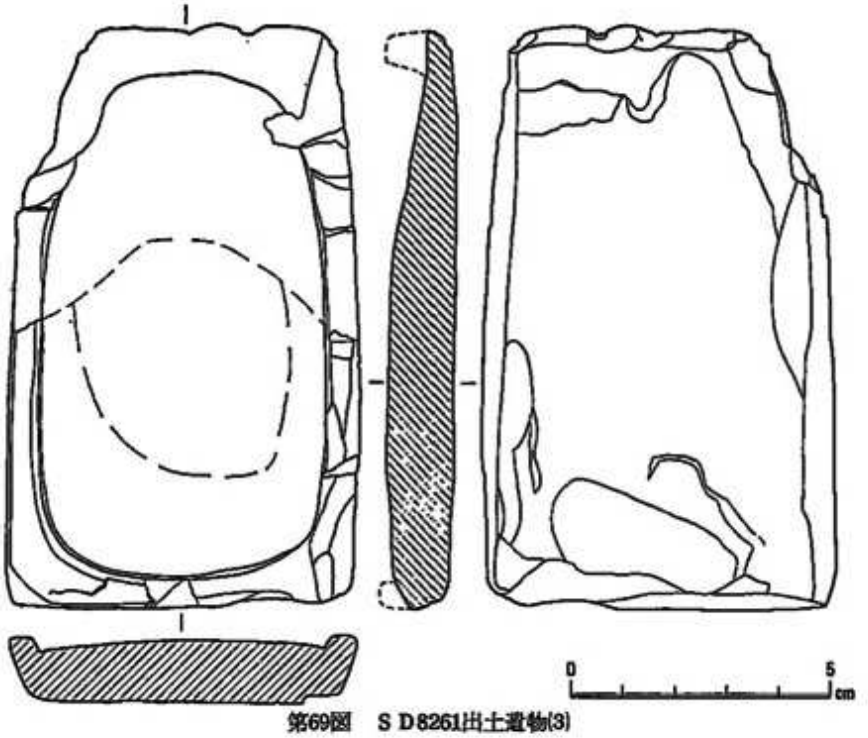
ＳＫ8204（第67図）　Ｇトレンチ、Ⅱ７・Ｍｄ区で検出した。西、南側を攪乱で切られており、



第67図　ＳＫ8204出土遺物



第68図　ＳＤ8261出土遺物(2)



第69図　ＳＤ8261出土遺物(3)

プランは不明である。深さは約0.6cmである。埋土は、6層に分かれ、上から順に暗黄褐色砂質シルト、暗灰色砂質シルト、黄褐色砂質シルト、暗灰色粘質シルト、暗灰黄色砂質シルト、青灰色砂質シルトである。遺物は、瓦器、土師器の細片がコンテナ1箱ほど出土した。ここでは、15点ほど図示した。土師器小皿（1～10）瓦器椀（11～13）白磁碗（14、15）である。

ＳＫ8205～8209　4Ｇトレンチ、Ⅱ7、Ⅱ8・Ｍｅ、Ｍｆ区で検出した土壙群である。ＳＫ8205～8208は、東側は調査区外で検出できなかった。切り合いが激しく、規模がわかるものは、ＳＫ8209のみである。ＳＫ8209は、長辺約2ｍ、短辺約1.5mの長方形プランを呈する。深さは約0.15～0.2mを測る。埋土は、青灰色粘土、茶褐色土などである。ＳＫ8205～8207、ＳＫ8209から、瓦器、土師器、瓦などが出土したが、細片の為図化できなかった。

ＳＫ8211　3Ｇトレンチ、Ⅱ6・Ｍｆ区で検出した。長径約2.7m、短径約1.7mの楕円形プランを呈する。深さは約0.5mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ8212～8214　3Ｉトレンチ、Ⅱ6・Ｍｅ区で検出した土壙群である。規模は、ＳＫ8212が長径0.7m以上、短径約0.6mの楕円形プランを呈するものと思われる。ＳＫ8213は、一辺約1.4mの方形プランを呈する。ＳＫ8214は、一辺約1.3mの方形プランを呈する。深さは約0.2～0.6mである。埋土は、茶灰色粘質土、黄褐色粘質土、明灰黄色粘土などである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ8215・8216（第70図～74図）　Ｉトレンチ、Ⅱ6・Ｎｆ、Ｎｇ区で検出した。ＳＫ8215は、西、南側を、ＳＫ8216は、西、北側を攪乱で切られている為、プランは不明確で確認できなかった。ＳＫ8215は、深さ約1ｍ、ＳＫ8216は、深さ約0.5mを測る。埋土は、両土壙とも淡黄灰色シルトである。

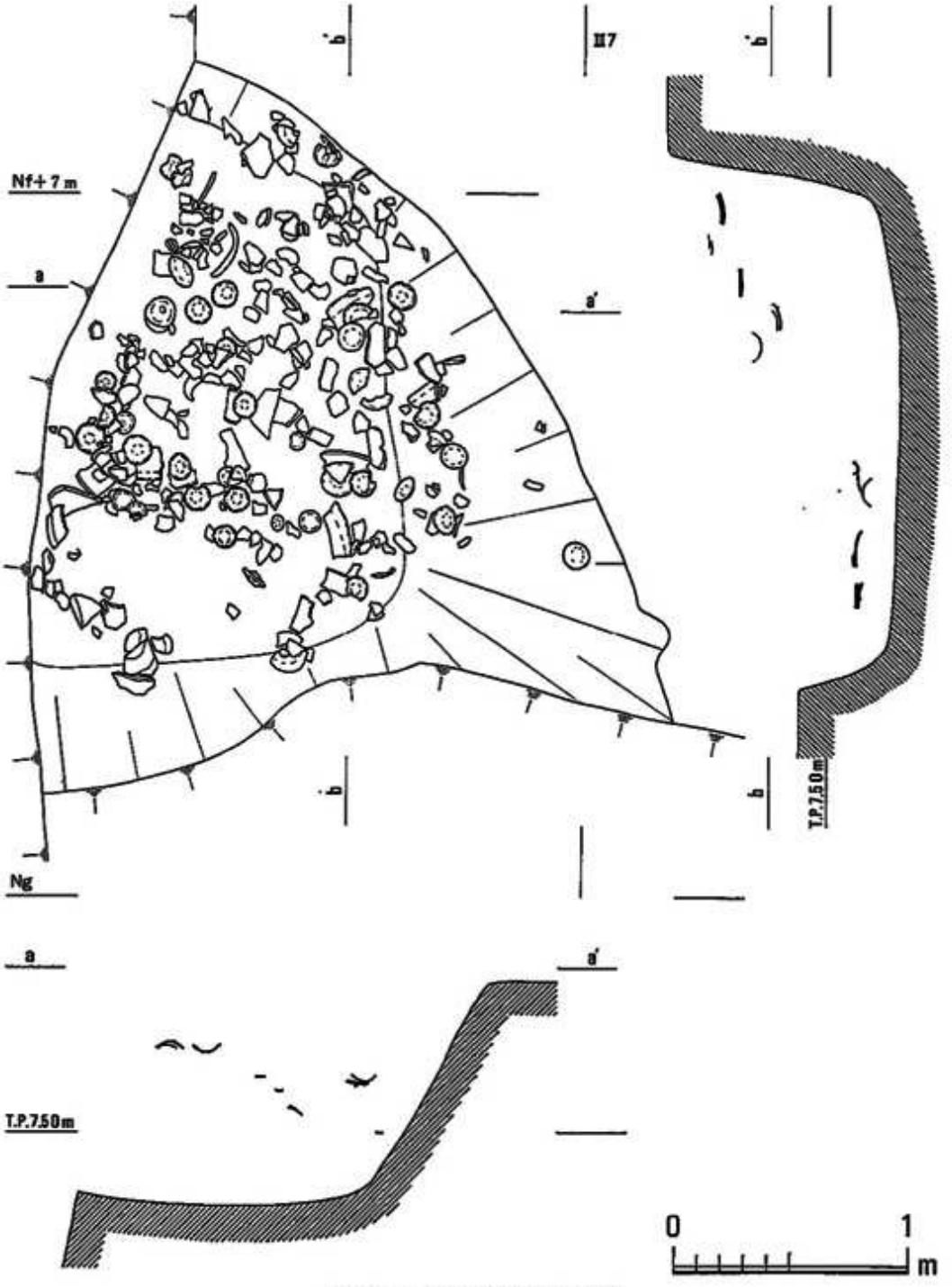
ＳＫ8215からは、コンテナ5箱ほど、ＳＫ8216からは、コンテナ2箱ほどの遺物が出土した。瓦器、土師器、瓦などが主な遺物である。特にＳＫ8216からは、遺物がぎっしりつまった状態で出土した。ここでは、瓦器、土師器などを中心に図化したが、この他に、瓦がコンテナ2箱ほど出土している。その多くが、平瓦、丸瓦であり、軒平瓦、軒丸瓦は、ほとんど出土しなかった。

ＳＫ8215から出土した瓦器椀は、器高が低く、高台が退化、あるいはないものがほとんどをしめる。これは、尾上実氏の編年によるⅣ－2期に比定される。しかし、101～103のようなⅡ－3期に比定されうる瓦器椀も出土している。

このことは、ＳＫ8216についても同じことがいえる。第73図9～12の瓦器椀と13～16の瓦器椀が同時に出土している。

ＳＫ8115出土遺物として、ここに図化したものは、土師器小皿（1～39）土師器皿（40～46）瓦器椀（高台のないもの）（47～57）瓦器椀（高台のあるもの）（58～95、101～103）、脚つき羽釜（104、105）土師器羽釜（106）青磁碗（96、98、99）白磁碗（97、100）陶器（107）三ツ巴文軒丸瓦（108）である。

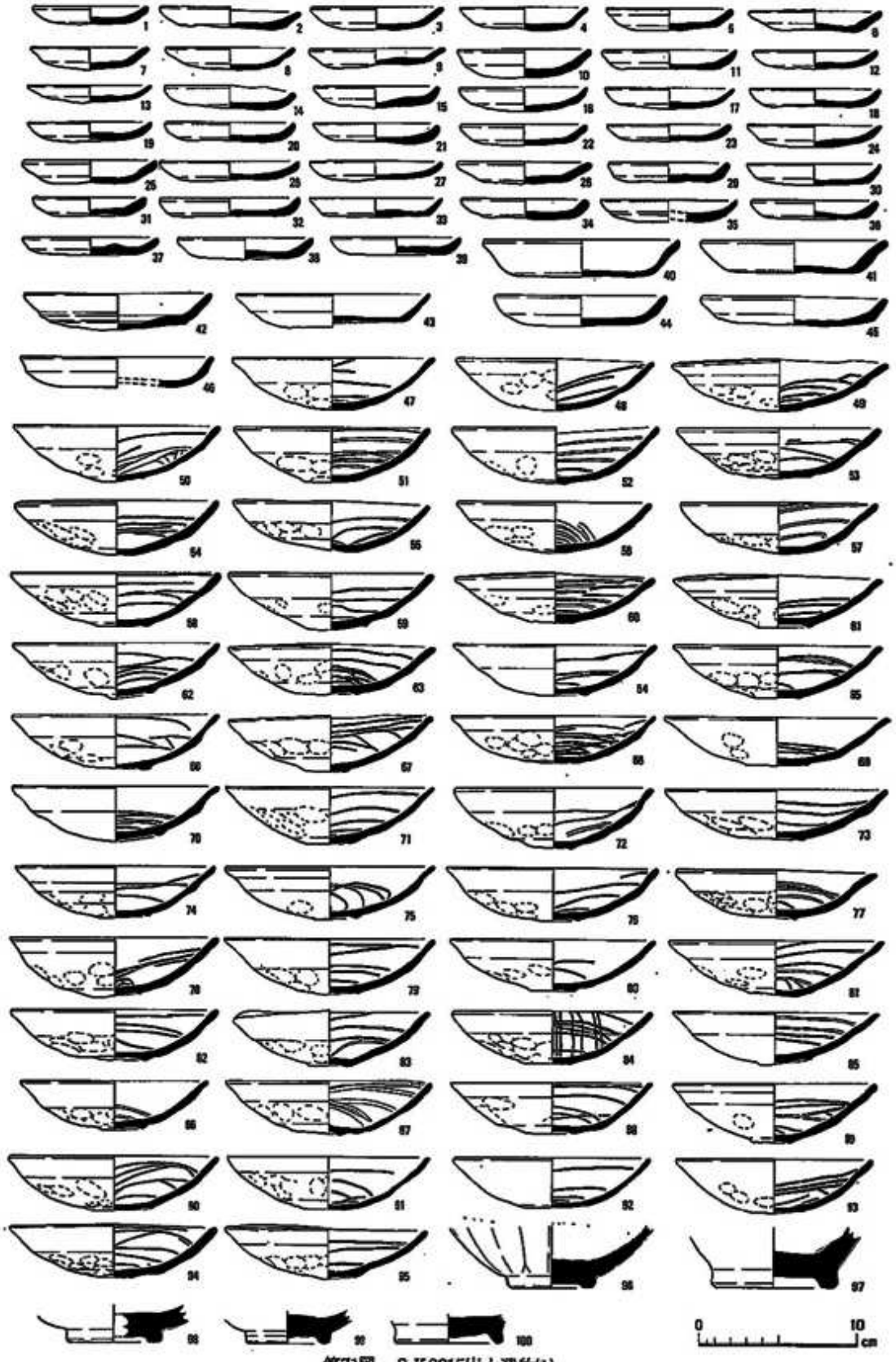
ＳＫ8116出土遺物として、図化したものは、土師器小皿（1～5）土師器皿（6～8）瓦器椀



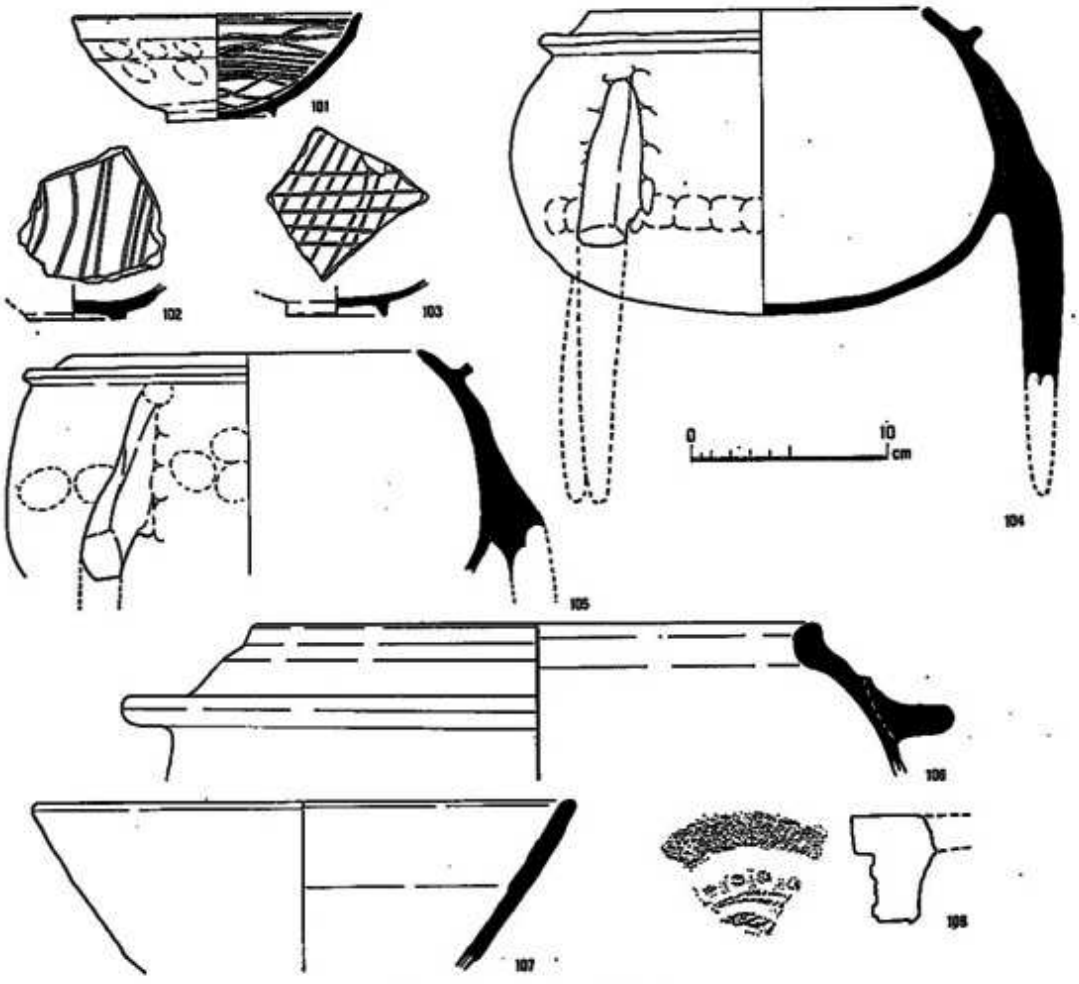
第70図　ＳＫ8215平面図・断面図

（９～16）青磁碗（17）土師器羽釜（18）である。

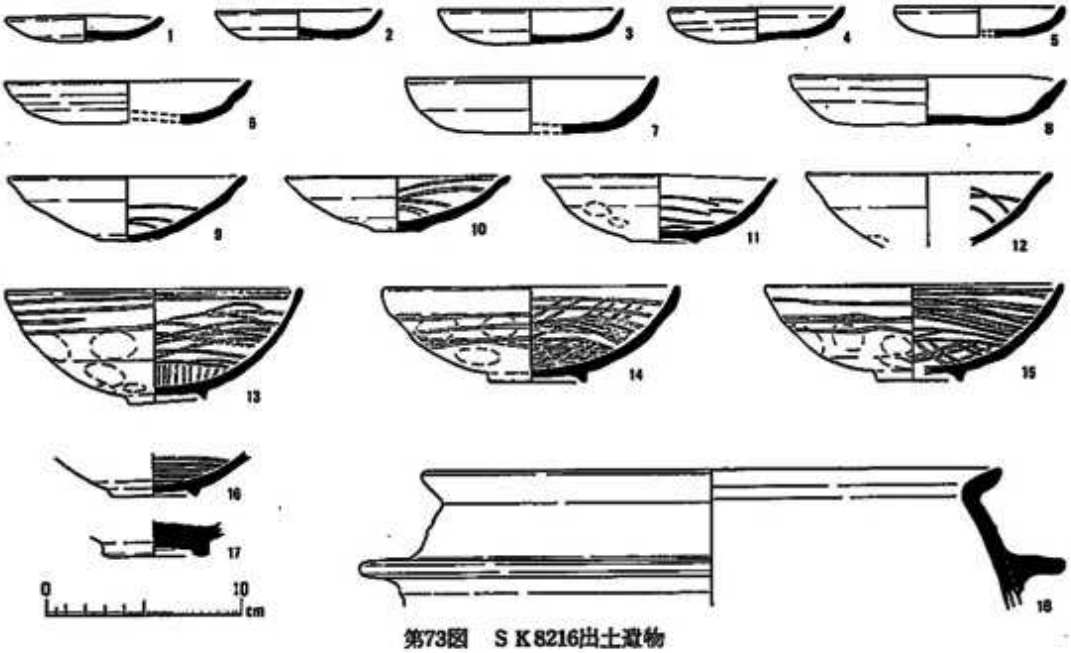
ＳＫ8217（第75図）　Ｉトレンチ、Ⅱ６、Ⅱ７・Ｎｇ区で検出した。長辺約1.8m、短辺約0.8mの長方形プランをもつ。深さは約0.15mである。遺物は、瓦器小皿（１）、瓦器椀（２）が出土した。



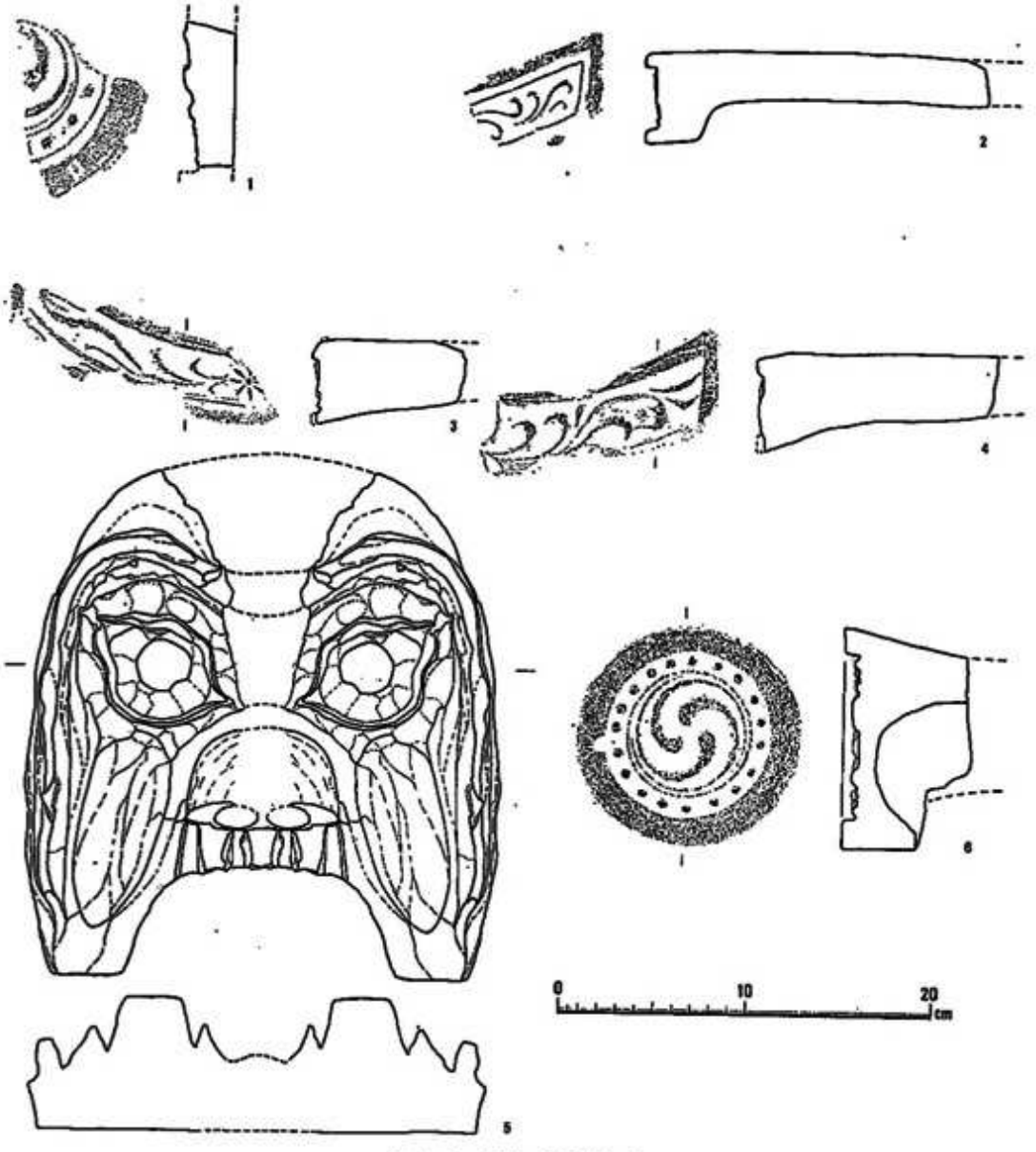
第71図　ＳＫ8215出土遺物(1)



第72図　ＳＫ8215出土遺物(2)



第73図　ＳＫ8216出土遺物



第77図　中世包含層出土瓦

丸瓦で、珠文帯の外側に圏線をめぐらしている。2は、唐草文軒平瓦で、唐草文の周囲に圏線をめぐらしている。

第77図6はGトレンチ古墳時代砂層直上より出土した。

これらの盛土中より出土した多量の瓦、およびSK8215、SD8261から出土した多量の瓦は、この付近に、寺院址の存在を想像させるが、その存在は明らかでない。

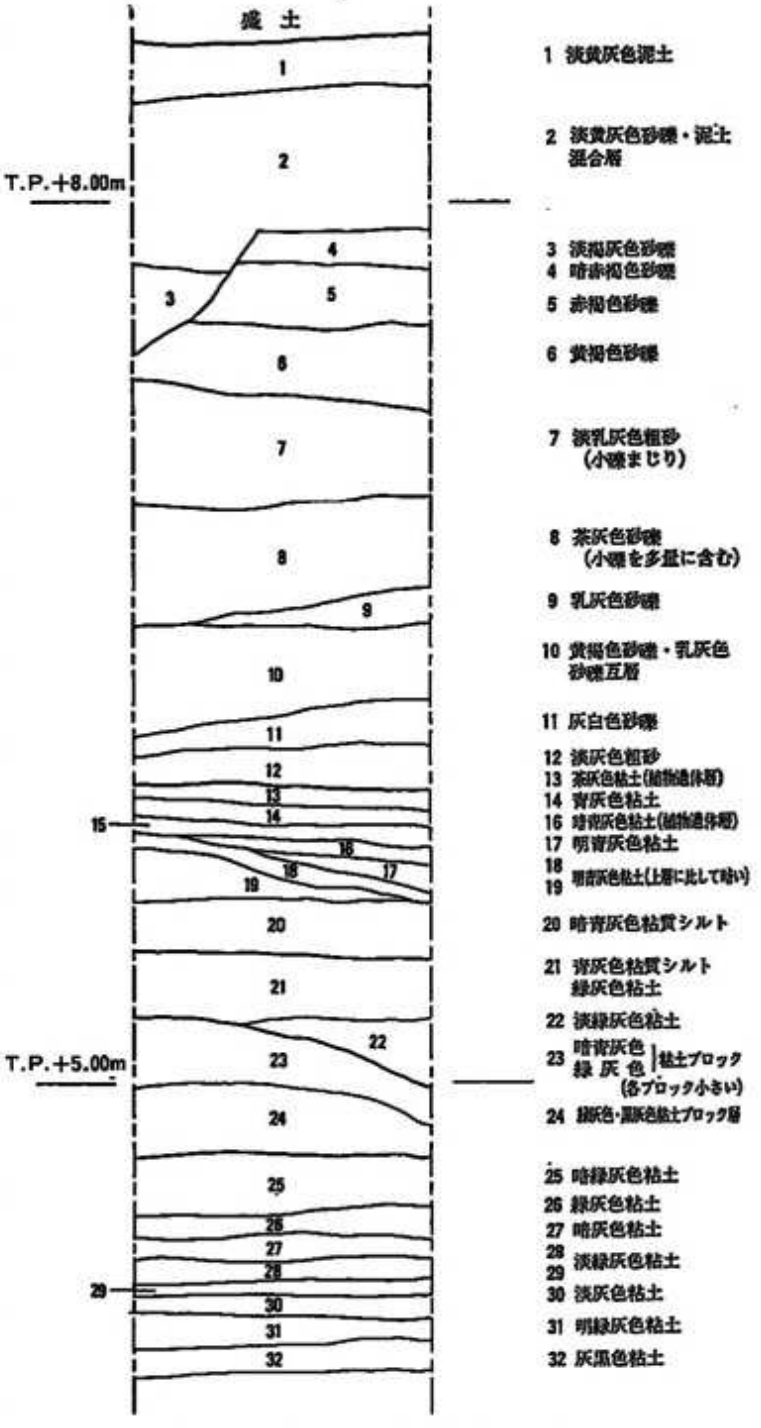
第６節　Ｊトレンチ（KM２-30トレンチ）の調査

Ｊトレンチは、第１章でも述べたように、亀井遺跡の範囲内にはいる。このトレンチは本来、亀井遺跡その２調査区として、亀井遺跡の近畿自動車道部分での第２次調査の対象地区であった。しかし、この部分は、八尾市水道、大阪ガスの地下埋設管が走っており、この移設協議が整わず、調査は見送られた。

今回、この地下埋設管を橋脚部から迂回させることで協議がなり、迂回部分の調査を行ったのち、埋設管を設置した。これにより橋脚部分の調査が可能となり、亀井北遺跡その３調査区に含めて発掘調査を行った。

このため、亀井北遺跡その３調査区は、亀井北遺跡と亀井遺跡をまたがって調査したことになる。便宜上、この部分をＦ～Ｉトレンチと同様にＪトレンチとよんだ。亀井遺跡においてはKM２―30トレンチという名称である。亀井北遺跡その３調査区とあわせて報告する。

Ｊトレンチは、Ｉトレンチ南壁より約75m隔たり、地区割では、Ⅱ７・Ｏｅ区にそのほとんどがはいる。トレンチ北西隅に一部亀井遺跡のＡトレンチ南東コーナーがかかる。トレンチは東西約10m、



第78図　Ｊトレンチ土層断面図（部分）

遺物は、最下層の暗青灰色粘土からの出土がほとんどである。壺２点を図化したが、他には、甕、壺の破片などコンテナ半分の土器と臼が出土している。

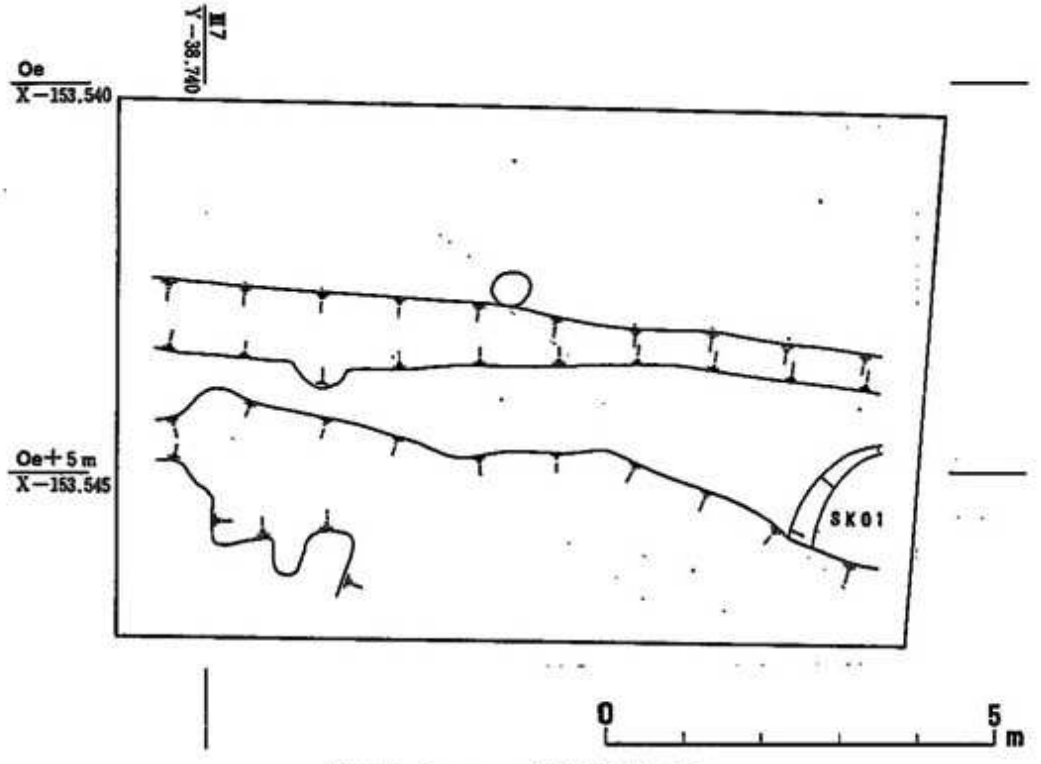
１は長頸壺で、かなり丸みのある胴部をもつ。口径13.2cm、器高29.4cm、底部径5.1cmを測る。調整は外面がハケの後ヘラミガキ、内面は胴部がヘラケズリ、口頸部はハケである。頸部外面にヘラ描き沈線による、記号線の文様がある。２は長頸壺で、やや肩のはった胴部をもつ。口径13.2cm、器高27.0cm、底部径5.3cmを測る。調整は、外面が比較的粗いヘラミガキ、内面は胴部、口頸部ともに細かいハケである。

臼はＳＤ01から鉢部と底部が２つにわかれて出土した。鼓形を呈するが、鉢部の径が底部の径よりかなり大きいと思われる。かなり細かく割れており、図化できなかった。

中世遺構面　（第82図　図版35）

この遺構面は、奈良時代～平安時代の大河道ＮＲ6201（ＫＭ２－ＮＲ6001）の埋没砂層の上面に堆積した淡黄灰色泥土層などをベースとする面である。後世の削平、撹乱がひどく、土壙を１基検出するにとどまった。

ＳＫ01　トレンチの南東隅で検出した。南は撹乱に削られ東側は調査範囲外となるため、全体はまったく不明である。検出部分では南北1.5m、東西1.0mを測り、深さは0.4mほどである。埋土は淡灰褐色・淡褐灰色混合粘質シルトである。遺物は瓦器の細片が若干出土したが、図化できるものはなかった。



第82図　Ｊトレンチ中世遺構面平面図

第3章　ま　と　め

第2章中で、遺構、遺物の報告を述べてきた。第3章では、亀井北遺跡その3調査区において検出した遺構、あるいは、出土した遺物について、個別に報告すべきことを述べていきたい。また、奈良時代遺構面、中世遺構面については、本文中に示さなかったその年代観について、若干の補足報告を行っていきたい。

鳥形木製品

亀井北遺跡その3調査区の自然流路ＮＲ3201で出土した鳥形木製品について、これまでの出土類例と比べながら、若干述べてみたい。

鳥形木製品は、昭和44年に大阪府池上遺跡において初めて、6点出土した。[1] これまでに池上遺跡出土例も含めて、弥生時代～古墳時代と考えられている鳥形木製品は、全国で30点あまりが出土している。亀井北遺構が位置している河内平野においては、本例以外に、山賀遺跡[2]（弥生時代前期）、瓜生堂遺跡[3]（弥生時代中期）、巨摩廃寺遺跡[4]（弥生時代中期末～同後期前半）において類例がある。

年代的には本例は、共伴遺物などから、弥生時代中期、畿内第Ⅳ様式と考えられる。弥生時代中期頃と思われる鳥形木製品は他に、池上遺跡例など14点あり[5]、この時期のものがもっとも多い。

形態的には、池上遺跡出土例では、丸彫製のもの―第Ⅰ型式―と板を鳥形に切り抜いた偏平なもの―第Ⅱ型式―に分類されている。[6] これに従うと本例は第Ⅰ型式にあたる。ただ、池上遺跡例は背部に枘をもつものがあり、翼をつけたであろうと想定されており、本例が翼をたたんだ状態を表現しているのとは明確な差がある。鳥形木製品のもつ意味を考える上で、その形態は重要であるが、本例はその点で新知見である。

出土状況からみると、池上遺跡の鳥形木製品は、池上の弥生集落をめぐる溝（Ｂ溝及びＣ溝）からの出土であり、金関恕氏が指摘されるように、[7] 集落の南に位置する墓地とは正反対の、集落の北の大溝中である。

この状況は、狐山遺跡の大方形周溝墓群を南側にもつ亀井の弥生集落の北縁から出土した本例とは共通するところである。鳥形木製品が出土したＮＲ3201は第2章でも述べたように、川幅20ｍほどの大河道で、最終的には幅10ｍ程度の浅い流路となる。この流路は、亀井遺構の弥生時代の遺構が集中する地点つまり亀井の弥生集落の北側を流れる。この流路より北はほとんど主だった遺構がみられない。したがってこのＮＲ3201が亀井の弥生時代中期後半の集落の北限をなすものといえよう。

鳥形木製品の性格については、池上遺跡での出土例以来、多くの議論がなされており、金関恕氏は、早くから、鳥形木製品の用途については、宗教祭祀的なものとして考えられた。氏は、鳥形木製品は杆頭につけられ、集落内の祭儀にあたって、鳥杆として立ち並べられたものと理解し、

そのモデルとなった鳥は、記紀にあらわれる「しとどどり」ではないかとされている。[8] 本例は、それだけで、鳥形木製品の性格を示すような資料にはなりえないが、本例のもつ特徴を最後に述べる。

亀井北遺跡その3調査区出土の鳥形木製品は、形態的に、他例などと同じく杆頭を差し込むのであろう孔が穿たれてはいるが、池上遺跡例などとは異なり、翼を休めた状態を表現している。また、モデルとなった鳥の細部をも十分に観察した写真的なものであり、「冠羽」と呼ばれる突起をその頭上にもつ。また、出土地点は池上遺跡例と同じく、集落の北縁であり、おそらくは廃棄されたものであると考えられる。

（1） 第二阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池』1970・(財)大阪文化財センター『池上』第4分冊—2 木器編 1978
（2） (財)大阪文化財センター『山 賀』1983
（3） 同 『瓜生堂』1983
（4） 同 『巨摩・瓜生堂』1981
（5） 京都府深草遺跡1点、山口県宮ケ久保遺物1点、大阪府瓜生堂遺跡1点、同巨摩廃寺遺跡5照、同池上遺跡6点、計14点
（6） (財)大阪文化財センター『池上』第4分冊—2 木器編 1978
（7） 金関恕「神を招く鳥」『考古学論考』平凡社 1982
（8） 金関恕「神を招く鳥」前掲

弥生時代～古墳時代の溝の方向性

亀井北遺跡その3調査区においては、弥生時代～古墳時代の遺構は、水田址をのぞけば、特筆すべきものはない。遺構のほとんどが溝であるといってよい。本調査区においては、幅0.3mの小溝から幅5m以上におよぶ大溝を含めて、43条の溝を検出している。また、Jトレンチにおいても、5条の溝を検出している。

これらの溝は各時代・各時期におよんではいるが、いくつかの溝の走る方向に共通性が認められる。概ね、溝の方向がN—50°—EからN—80°—Eの範囲内にはいるものである。あげると、弥生時代第2遺構面SD3201（N—68°—E）、同第4遺構面SD3401（N—83°—E）、同第6遺構面SD3602（N—70°—E）、同第7遺構面SD3705（N—64°—E）、古墳時代第1遺構面SD4102（W—60°～70°—E）・SD4103（W—60°～70°—E）、同第2遺構面SD4201（N—60°～70°—E）・SD4202（N—52°—E）、同第3遺構面SD4301（N—60°～65°—E）・SD4302（N—60°～70°—E）・SD4303（N—60°—E）・SD4304（N—60°～70°—E）の12条の溝である。

この12条の溝は、かなりしっかりした溝が多い。古墳時代第3遺構面を除いては、幅が2m以上あり、深さも0.5m以上のものもある。これらの溝は何らかの方向性、つまり区画によって開削された可能性が高いものと思われる。

亀井北遺跡の弥生時代から古墳時代にかけては、南接する亀井遺跡の北縁を構成しており、これらの一定の方向性をもった溝が、集落の境—北限を示すものである可能性が高いと思われる。またこれらの溝の方向は、おおまかに言えば、自然流路や河川の方向に直角に交わっているよう

であり、この自然流路と方向がN—50°—EからN—80°—Eの範囲内にはいる溝とに区切られた部分が、亀井遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての範囲であり、その時代の亀井の集落の人々の居住の場であったのではないかと思われる。

奈良時代における亀井北遺跡

亀井北遺跡その3調査区においては、奈良時代遺構面は、第2章第4節中に述べたように、2枚の遺構面を確認した。以下、これらの遺構面について、前章中では示さなかった年代観もふまえ、概観したい。

1.　奈良時代第1遺構面

亀井北遺構その3調査区においては、古墳時代第4面NR4401による堆積層である古墳時代砂層が全調査区を埋めつくして以降、奈良時代後半になるまで、明確な遺構は検出されなかった。これは、本調査区のみならず、本調査区の北側にあたる亀井北その1、その2調査区、あるいは南側の亀井遺跡についても、ほぼ同様なことがいえる。このことは、ただ単にNR4401の流入および、古墳時代砂層の堆積のみに起因するものではないと思われるが、本調査区周辺において、古墳時代以降奈良時代の後半になるまで土地は荒廃し、人々は他の所に集落の中心地を求めていたと思われる。

そして、奈良時代後半、人々が生活を営み始めた時には、本調査区は集落の中心として位置づけられていたと考えられる。それは、掘立柱建物跡および、総数約280個にもなる柱穴群を検出したからである。これらの掘立柱建物跡及び柱穴群は、古墳時代砂層上面を整地し、その上に築かれていた。これは、古墳時代後半以降、荒廃していた本調査区も、土木技術やその他の技術の発達により、人々が生活できるような環境に改変されたのではないかと想像される。

また、本調査区の南側には国道25号線、奈良街道が通っている。奈良街道は、古代より注目されていた道で、大阪～奈良間を唯一山越えを必要としない道であった。本調査区付近の奈良時代後半における奈良街道がどこを通っていたか不明であるが、この近辺を通っていたことは間違いなく、本調査区で検出された掘立柱建物および柱穴群は、この奈良街道にも何か関係していたのではないかと考えられる。

本調査区では、奈良時代第1遺構面については、遺構に伴う遺物の出土が非常に少なくそれも細片が多かった。わずかに、ピット6144から出土した鉢のみが、ほぼ時期がわかるものとして出土したのみである。この土器と後述するNR6201出土の土器とも考えあわせ、奈良時代第1遺構面を8世紀中頃から後半と位置づけたい。

2.　奈良時代第2遺構面

奈良時代第2遺構面の時期になると、本調査区内では、遺構のあり方が奈良時代第1遺構面とは異なってくる。それは、奈良時代第1遺構面では、一部削平を受けていたものの、全トレンチで検出された、掘立柱建物跡と柱穴群が、Hトレンチ以北にしか検出されなくなることである。そして、Iトレンチには、N—70°～80°—Wで主軸の角度がほぼ一致する溝群が検出されるよう

になる。これらの溝群は、ほぼ耕作に起因するものであると思われる。つまり、Ｉトレンチは、居住区から生産域へと変化していったことが考えられる。

これの一因となるものに、ＮＲ6201が考えられる。ＮＲ6201は、前記したように、亀井遺跡でその南岸が検出され、今回の調査で北岸が検出された。川幅約195ｍにもおよぶ大河川である。(1)

一時期に、これだけの川幅をもっていたとは思われないが、大河川であったことはまちがいなく、この時期における平野川であったことが考えられる。

この川の流入の為、本調査区Ｉトレンチ付近は、川の氾濫やその他の理由で、人々の居住の場としては適さなくなり、生産の場へと変化していったのではなかろうか。

ＮＲ6201からは、前記したように、時期的には弥生時代から平安時代までの土器が出土している。この中でも、もっとも多量に出土したのは、奈良時代後半の土器である。これらの土器は、他の時期の土器と比べて、ほとんどローリングを受けていない。この為、この川の流入していた時期を、この時期周辺に置くことは可能であると思う。また、亀井遺跡の概報では、この川の時期を他の遺構等からの関係を含めて、この川の埋没年代を８世紀末から９世紀初頭に位置づけている。(2)

この亀井遺跡における調査結果もふまえ、そしてＳＥ6201出土土器などから、奈良時代第２遺構面の時期を８世紀末から９世紀初頭と位置づけたい。

以上のことから奈良時代第１遺構面と奈良時代第２遺構面は、わずかな時間差しかなく、本調査区における奈良時代第１遺構面は非常に短期間の間に、廃絶してしまったことがうかがえる。これについても、ＮＲ6201が大きな原因のひとつであったと思われる。

中世における亀井北遺跡

奈良時代以降、本調査区において遺構が再び検出されるのは、中世になってからである。また、「亀井」という地名が、歴史上の文書にあらわれてくるのは鎌倉時代以降のことである。このことから、本調査区では、奈良時代以降、人々の生活が再び活発になるのは中世以降のことといってもよいであろう。

中世における本調査区の特徴は、Ｉトレンチ、Ｎｆ＋５ｍライン以南に一段高い部分があることである。この部分は、現在の地表面とレベル的にはほぼ同一である。この高い部分は、ほぼＮＲ6201による砂層と整地土層で構成されている。これは、ＮＲ6201の自然堤防の高まりをそのまま利用して、その上面を整地し生活面を作り出していったのではないかと考えられる。また、この一段高い部分から、柱穴、土壙、井戸などを多数検出し、下段よりは、溝などを検出したことから上段を居住域、下段を生産域として区別していたことが考えられる。

1.　中世第１遺構面

本調査区における生活面の上段、下段の区別は、中世第１遺構面からみられる。この上段の部分を整地する際の整地土層のなかから、平安時代末期に比定されうる瓦が出土した（第77図、3、4）。このことから、この整地が行なわれたのは、平安時代末期とも思われるが、上段において

は、この時期の明確な遺構は検出できなかった。

中世第1面を時期的に比定する資料として、SK8101とSD8146があげられる。SK8101よりは、表面の風化が激しく、細かい調整は不明であるが、器形からすると尾上実氏の編年[3]によるⅠ－2期にあたる瓦器椀が出土した（第55図）。また、SD8146よりは、Ⅱ－3期にあたる瓦器椀が出土した（第54図）[3]。これらの瓦器椀は、尾上氏によるとⅠ－2期が、11世紀末に、Ⅱ－3が12世紀末に位置づけられている。

以上のことから、中世第1遺構面を11世紀末から12世紀末、平安時代末から鎌倉時代初頭に位置づけたい。

2.　中世第2遺構面

中世第2遺構面になると、上段、下段とも中世第1遺構面の上に、約15～30cmほど整地土層がのる。上段の整地上層からは、室町時代初頭の瓦が出土した。また、遺構内から出土した遺物で時期が比定されるものとして、SB8201、SE8201～8205、SD8256、SD8261、SK8204、SK8215、8216出土のものがあげられる。

これらの土器は、瓦器椀としては、その形態、法量からⅡ－3期、Ⅲ－1、2期、Ⅳ－2期にあたると考えられる。これらの土器の出土地点からの特徴をみてみると、上段にあたるSE8202～8205、SD8261、SK8215、8216、特に、SD8216、SK8215、8216からは、Ⅱ期、Ⅲ期のものも若干出土したが、そのほとんどはⅣ－2期に比定されうるものだった。一方、下段から出土したものは、Ⅱ期、Ⅲ期に比定されるもののみであった。

尾上氏によると、Ⅱ－3期を12世紀末に、Ⅲ－1期を13世紀中頃に、Ⅳ－2期を14世紀中頃に位置づけられている[4]。

以上のことから、中世第2遺構面は、2つに細分することができると思われる。つまり、下段の部分に中世第2面が形成された時に、上段はまだ中世第1面のままであり、その後、しばらくして上段にも土盛りがされ、中世第2面が形成されたのではないだろうか。時期的には、下段が12世紀末から13世紀中頃に、上段が14世紀中頃に位置づけられよう。そして、近世、近代、現代とそのまま亀井村、あるいは亀井町として存続してきたのである。

以上、はなはだ素描であるが、弥生時代については、鳥形木製品、弥生時代～古墳時代の溝の方向性について述べ、また、奈良時代、中世においては、その遺構面の附属時期について検討を行なった。特に奈良時代以降については、自然環境と人間との戦いのあとを、部分的にではあるが認めることができた。まだ残された問題は多岐にわたってはいるが、総て今後の課題としたい。

（1）（財）大阪文化財センター「亀井」1982
（2）（1）に同じ
（3）尾上実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983　及び尾上実氏の御教授による。
（4）尾上実「南河内の瓦器椀」前掲

あとがき

亀井北遺跡その3調査区の発掘調査は、10年以上にわたって実施した近畿自動車道天理～吹田線（通称大阪線）の調査の中では、一番最後の遺跡となった。また最後の遺跡ゆえに、調査の方法などにもこれまでと違うものがあったように思われる。

たとえば、本体工事の発注が工事期間を短縮するため、発掘調査の終了を待てずして行われた。このため調査区を発掘調査の終了した部分から本体工事へ引き渡すことになった。近畿自動車道を一刻も早く建設し、供用を開始するために必要な措置ではあるが、続々と遺構が検出され、遺物が出土するトレンチのすぐ隣で、橋脚の基礎を建設する大型重機が稼動している姿は、調査を担当した者としても不思議な光景であった。

また、これまではトレンチ部分（幅10m）から切り拡げ部分への移行は、協議・設計に時間がかかり、しばらく調査が中断するのが常であるが、今回は協議・設計が各方面で勢力的に行われ、ほとんど待ち時間なしに移行した。このため、トレンチ部分での遺構の検討を十分に行わずに切り拡げ部分の調査にはいったため、当初、若干の混乱が調査担当者にあった。

いずれにしても、河内平野に1条の巨大トレンチを設定することになった近畿自動車道天理～吹田線予定地内における発掘調査の最終の地区をうけもった亀井北遺跡その3調査区が、関係各位の格別なご配慮とご理解によって、無事に終了でき、本書が上梓された現時点では道路建設が順調に進行しているということであり、調査担当者として胸をなでおろすばかりである。

最終になったが、一日何千、何万台という車が通る、府道中央環状線と国道25号線の交差する調査区で、排気ガスやほこりに悩まされながらも、また夏期のむしぶろのようなトレンチの中で調査に協力していただいた学生諸氏には「ありがとう」ということば以外には申すことばも考えつかない。概報という性格上、遺構に重点をおいた記述になり、遺物についても、担当者の目にとまったものばかり詳説した感はあるが、本書が古代河内平野の歴史を考える上での基礎資料となることを願い筆をおく。

付　　載

付載１　花粉・珪藻分析報告

付載２　奈良時代・中世出土土器観察表

付載１　花粉・珪藻分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　花粉分析

１　試　料

今回の分析に供した試料は、亀井北遺跡（その３）２Ｇトレンチ北壁・５Ｉトレンチ西壁で採取された合計47点である。各々の試料採取層位及び岩質等については図１に示す。

２　分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料15ｇを秤量し、48％ＨＦ一重液分離（$ZnBr_2$・比重2.15)一アセトリシス処理一10％ＫＯＨの順に物理・化学処理を行った。分析処理後の残査をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

３　分析結果

計数においては、プレパラート全域を走査した。その間に出現したすべての分類群を花粉ダイアグラム（図２）として示した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本・胞子は樹木花粉・草本花粉・胞子の合計を基数として百分率で算出した。図中複数の分類群をハイフォンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。また、樹木花粉の検出数が100個以下の試料については、統計的にみて十分なデータとは言えないので花粉ダイアグラムとして図示しなかった。

考古学的知見による時代区分と花粉の出現傾向から、４つの局地花粉群集帯を設定した。下位より、ＫＭ一Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ帯とした。なお、亀井北遺跡（その１）（その２）で設定した花粉帯は、ＫＩＫ一Ⅰ帯がＫＭ一Ⅱ・Ⅲ帯に、ＫＩＫ一Ⅱ帯がＫＭ一Ⅳ帯、ＫＩＫ一Ⅲ帯がＫＭ一Ⅴ帯に対比される。

・ＫＭ一Ⅰ帯（５Ｉトレンチ№14～８、時期不明）

アカガシ亜属が高率に出現することにより特徴づけられる。他にコナラ亜属が比較的高率に出現し、上部でシイノキ属が増加傾向を示す。草本花粉・シダ類胞子は比較的少なく、イネ科が優先する。

・ＫＭ一Ⅱ帯（５Ｉトレンチ№６～１、２Ｇトレンチ№38～28、時期不明～弥生時代後期）

アカガシ亜属が僅かに減少するが依然高率に出現し優占する。シイノキ属が増加し、コウヤマキ・モミ・ツガ・スギ各属・ヒノキ科一イヌガヤ科などの針葉樹が比較的多く出現することによ

り特徴づけられる。草本花粉・シダ類胞子は比較的多く出現し、上部に向かって種類数が多くなる。上部でイネ科が高率に出現し、中部で他の胞子（単条溝型）が高率に出現する。

・KM—Ⅲ帯（2Gトレンチ№27～11、弥生時代後期～古墳時代後期）

アカガシ亜属が高率に出現し、優占する。前時代で比較的多く出現していたコウヤマキ・モミ・ツガ各属が減少し、スギ属・ヒノキ科—イヌガヤ科が増加することにより特徴づけられる。下部でシイノキ属が増加する。草本花粉・シダ類胞子は比較的多く出現する。イネ科が中・上部で高率に出現し、水生植物であるガマ・オモダカ・イボクサ・ミズアオイ各属・胞子のミズワラビ属などが連続して出現する。

・KM—Ⅳ帯（2Gトレンチ№5、古墳時代後期～中世）

コナラ亜属・シイノキ属の増加、スギ属・ヒノキ科—イヌガヤ科の減少により特徴づけられる。草本花粉・シダ類胞子は比較的多く出現するが、KMⅡ—帯で見られた水生植物がほとんど出現しなくなる。イネ科も減少し、胞子がわずかに増加する。

・KM—Ⅴ帯（2Gトレンチ№3～1、中世～現代）

マツ属複維管束亜属の急増により特徴づけられる。草本花粉・胞子は高率に出現し、イネ科が40%以上の出現率を示し優占する。他にアブラナ科が高率に出現する。水生植物は少ないが、アカウキクサ属・サンショウモ属などの出現が認められる。

4 考 察

KM—Ⅰ帯は、アカガシ亜属が高率に出現し、照葉樹林を構成するシイノキ・アカメガシワ・シキミ各属などを伴うことから、カシ類を中心とした照葉樹林が上町台地や生駒山地などに広く分布し、隆盛を極めていたと推定される。大阪湾沿岸地域では、約6,500年前を境にして、それまで優占していたナラ類などの落葉広葉樹林からカシ類などの照葉樹林へ遷移した（前田，1977）。しかし、九州の板付遺跡（中村他，1976）などで認められるようなシイ類・カシ類が共に優占するような照葉樹林ではなく、今回の分析で認められるようなシイ類の少ないカシ類を中心とした照葉樹林であったと推定される。同様な結果は、淡路島・志知川沖田南遺跡の花粉分析でも認められ、その現象は瀬戸内海地域の降水量の少ないことに起因するシイ林の発達の悪さを示すとしている（三好，1982）。これに従えば、シイ林の発達は降水量の増減により変化することになるが、それだけではなく照葉樹林が成立する立地環境がそれぞれ異なっていたためではなかろうか。南関東の村田川流域の花粉分析結果において照葉樹林が隆盛を極めるのは約3,500年前以降で、西日本のそれと比較してかなり遅れている。これは土地条件の影響を受けたためとみられている（辻他，1983）。このようにシイ林の発達が、単に降雨量の増加とするよりむしろ立地環境などの様々な要因が発達を促進したと考えるのが妥当であろう。

本帯の珪藻分析結果から、当時は潮間帯のような環境が推定されており、縄文海退期の堆積物の可能性が高いとしている。この見解に従えば、本帯から現代までの花粉の変遷は、亀井・城

山遺跡の縄文時代晩期から現代までの花粉の変遷と極めて調和的である。

KM—Ⅱ帯に入っても、依然、照葉樹林が隆盛を極めていたと推定される。しかし、本帯ではシイノキ属が増加し、コウヤマキ・ツガ・モミ・スギ各属・ヒノキ科—イヌガヤ科などの針葉樹も比較的高率に出現するようになる。ここでのモミ・ツガ各属は照葉樹林帯に接する中間温帯林要素のモミとツガである可能性が高い。このような針葉樹の増加を那須・坂本（1980）が指摘しているように降雨量の増加による分布地域の拡大とするならば、シイノキ属の増加も先述したように降雨量の増加によって分布地域を拡大した結果とみることができる。しかし、一方、それらの針葉樹が降雨量の増加によって分布地域を拡大したとは断言できない面もある。それは、コウヤマキのように山地のやせ尾根（おそらく生駒山地）に分布していたと考えられる樹木の花粉は、水や風などによって運ばれて低地で堆積したと考えられ、そのため堆積環境によって出現率が異なり、花粉組成を歪曲していると考えられる。このように考えると、シイノキ属の増加は、弥生時代に入ってからの人類の生業活動の活発化によって、森林破壊が進行し、二次林としてのシイ類の崩芽林が増加した結果とも考えられる。現時点では、縄文海進以後の沖積地が広く形成された当時の植生の変化については、まだまだ問題が多く今後、多くの地点を分析することにより明らかにされるであろう。

本帯では、ガマ・オモダカ・コウホネ各属などの水生植物が検出されている。また、イネ科・カヤツリグサ科が比較的多く出現していることから、低地は沼沢地的な環境に変化したと考えられる。本帯上部でイネ科が急増し、ガマ・オモダカ各属が連続して出現するようになることなどから、水田耕作が行われていた可能性が示唆される。これは2Gトレンチ№27の堆積物が弥生時代後期の水田面であるという見解に極めて一致する。KM—Ⅲ帯に入ると、イネ科が中部と上部で増加し、ガマ・オモダカ・イボクサ・ミズアオイ各属、胞子のミズワラビ属・サンショウモなどの水生植物が多く出現する。このことから低地は湿地的な環境へ変化したと推定される。また、それらの水生植物が水田雑草の分類群であることを考慮すると水田耕作が行われていた可能性も考えられる。このように、低地は、弥生時代後期以降大きく景観を変えたであろう。

KM—Ⅲ帯の花粉ダイアグラムでは、モミ・ツガ・コウヤマキなどの針葉樹が減少し、スギ・ヒノキ科—イヌガヤ科などの針葉樹が増加傾向を示す。このような変化は、環境の変化と深く関係しているのではなかろうか。また、瓜生堂遺跡の分析結果（安田，1980）では、このようなスギ・ヒノキ科—イヌガヤ科の花粉の増加は認められていない。このことは、スギの分布拡大が、大阪平野全域におこったものではないことを意味しているように思われるが、大和川の後背湿地という特殊な堆積環境により、花粉組成に繁栄されなかったとも考えられる。

KM—Ⅳ帯になると、コナラ亜属・シイノキ属が増加傾向を示し、KM—Ⅴ帯では、マツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツなど）が急増し、照葉樹が減少する。このような変化は、照葉樹の伐採が繰り返されると、シイの崩芽林が多くなり、伐採が頻繁になるとシイよりアラカシの崩芽林が増え、更にその影響が強くなるとアカマツ林やコナラ林へ退行していく（山中，1979）

という見解にきわめて一致し、森林破壊が進んだ結果と推定される。

KM—Ⅴ帯で認められるマツ属複維管束亜属の増加は、関東平野でも認められており、急増に転ずるのが宝永スコリア（1,707年）降下以降という見解（辻，1985）もある。大阪平野において、関東平野と同一時間面でマツ属が急増したかは不明であるが、現在の植生調査結果、立地環境をみるかぎり関東と関西のマツ属の増加の意味は異なったものではなかろうか。この問題に関しては、今後の研究に期待するところが大きい。

KM—Ⅴ帯では、イネ科・アブラナ科が多産する。またアカウキクサ・サンショウモなどの水生植物が検出されることにより、湿地あるいは水田の可能性が示唆され、アブラナ科の多産は慶長・元和のころ盛んに行われていた搾油に起因するものと考えられる。

引 用 文 献

中村　純・畑中健一（1976）　板付遺跡の花粉分析学的研究。福岡市埋蔵文化財調査報告書　35。P.29～52。

那須孝悌・坂本清子（1980）　亀井・城山・寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書。大阪文化財センター。P.423～431。

前田保夫（1977）　大阪湾の自然史一潜函でとらえた海と森の変遷一。科学。Vol. 47. No. 9.

三好教夫・新井靖子（1982）　淡路島・志知川沖田南遺跡（兵庫県）の花粉分析学的研究。

パリノ・サーヴェイ株式会社（1985）　亀井北遺跡（その1）（その2）採取土壌の花粉分析報告。大阪文化財センター。

辻誠一郎・南木睦彦・小池裕子（1983）　縄文時代以降の植生変化と農耕一村田川流域を例として一第四紀研究。22巻3号。

辻誠一郎（1985）　関東平野における弥生時代以降の植生史をめぐる諸問題。日本第四紀学会講演要旨集。15。P.128。

山中二男（1979）　日本の森林植生。P.88。築地書館。

安田喜憲（1980）　瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析Ⅰ。瓜生堂。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、大阪文化財センター、P.427～436。

2　珪 藻 分 析

1　試 料

分析試料は、亀井北遺跡その3、2Gトレンチが33点、5Iトレンチが14点の計47点である。これらの試料の岩質・試料採取層位については、花粉分析試料と同じである。

2　分析方法

珪藻の抽出は、以下の方法で行った。

試料の秤量（湿重8.0～11.0g）—過酸化水素水処理（試料の泥化・有機物の分解漂白）—傾斜法にて粗粒砂を除去—分散剤（ピロリン酸ナトリウム）を加えた粘土分を除去—L字形管分離法にて細砂分を除去—希釈—散布（18×18m/m カバーガラス上に0.5cc）—自然乾燥—封入（プリ

ュクラックス使用)一検鏡（1,000倍)。珪藻殻の算定は、メカニカルステージを用い縦線に沿って移動させ任意に出現する珪藻化石200個体以上になるまで行った。この際、半分以上破損したものや溶解を受けたものについては、1個体としてかぞえなかった。

珪藻殻の同定及び生態性については、Hustedt (1930, 1959, 1961～1966) Patrick and Reimer (1966, 1975)、Florin (1970)、Foged (1971, 1974, 1976, 1977, 1978, 1980, 1981, 1982)、小林（1964, 1960)、小林・原口（1966)、安藤（1969)、安藤・原口・小林（1971）などを参考とした。

3　分析結果

各試料から検出された珪藻は、塩分濃度に対する適応性（Halobion rate）を基準として真塩性（＝海水生)，半塩性（＝汽水生)，貧塩性（＝淡水生）に分類し、貧塩性についてはさらに、塩分，水素イオン濃度（pH)，水の流動性の各生態区分も行い表2にまとめた。

産出頻度の高い種については、全体を基数とする比率のダイアグラムを図3に示した。図中の帯グラフのうち塩分濃度（海水・海水～汽水・汽水・淡水）に対するものは全体基数、貧塩性（淡水生）の各生態性に対するものは貧塩性の合計を基数としたものである。帯グラフ・ダイアグラムは合計で100個体以上検出されたものについて作成した。主要種は、写真2－1・2－2に示した。

次に、各地点ごとに珪藻群集の特徴を述べる。

＜5Ⅰトレンチ＞

珪藻群集の特徴から2帯に分帯できる。

○Ⅰ－Ⅰ帯（№14～8）

海水生で沿岸浮遊性の *Hyalodisous scoticus*，沿岸付着性の *Grammatophora oceanica* var. *macilenta* (*syn. G. macilenta*)、汽水・付着性の *Nitzschia gran*-ulata が優占することにより特徴付けられる。この外、低率であったが、海水～汽水生で浮遊性の *Cyclotella striata-styrorum*，付着性の *Diploneis smithii* var. *pumila* それに、海成層の上限の認定に役立つとされる潮間帯特徴種の *Terpsionoe americana* が検出された。

流水生種は非常に少なかったが、*Diploneis ovalis*, *Navicula mutica*, *Rhopalodia gibberula* などの付着性種が検出された。これらの種は、海水～汽水域にも生育可能な広域適応種である。

○Ⅰ－Ⅱ帯（№7～2）

塩分濃度の高い水域に生育する珪藻はほとんど検出されず、有機酸に伴う弱酸性の草炭質湿原から一般的に検出される Eutania 属の産出が高いことにより特徴づけられる。なかでも、*E. praerupta* var. *bidens* が優占する。

この外、*Navicula mutica*, *N.* sp-1, *Hantzschia amphioxys*, *Achnanthes inftata*,

Amphora ovalis var. *affinis* などの付着性種も多産した。

＜2Gトレンチ＞

珪藻群集の特徴からG－Ⅰ～Ⅴ帯に分帯される。

○G－Ⅰ帯（№38・39）

Eunotia praerupta var. *bidens*, *Diploneis ovalis*, *Navicula mutica*, *Hantzschia amphioxys* などが多産することにより特徴づけられ、Ⅰ－Ⅱ帯に近似した組成を示す。

○G－Ⅱ帯（№36・31）

珪藻の含有に乏しい貧珪藻帯である。

○G－Ⅲ帯（№29）

貧塩不定・好アルカリ性・流水不定の *Fragilaria pinnata* var. *lancettula*, *F. pinnata*, *F. construens*、貧塩不定・pH 不定・流水不定の *Diploneis ovalis* が優占もしくは多産することにより特徴づけられる。

この外、*Amphora ovalis* var. *affinis*, *Caloneis schroederi*, *Pinnularia leptosoma* などの付着性種が多産する。

○G－Ⅳ帯（№28～11）

全般的に、好流水性種が多産し、好止水性種は少ない。

重要種は、貧塩不定・pH 不定・流水不定の *Navicula mutica*, *N. pupula* で、当帯の全域から検出される。また、*Gyrosigma kuetzingii G. scalproides* は下部、*Eunotia praerupta* var. *bidens*, *Navicula confervacea* は中部、*Cymbella minuta*, *C. sinuata*, *C. turgidula* は上部で多産する。

以上の他、*Achnanthes lanceolata*, *Anphora ovalis* var. *affinis*, *Caloneis schroederi*, *Cymbella turgidula* var. *nipponica*, *Diploneis ovalis*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta* fo. *biceps*, *N. elginensis* var. *neglecta*, *N. viridula*, *Pinnularia subcapitzata* などの付着性種が検出された。

○G－Ⅴ帯（№5～1）

珪藻が非常に少ない貧珪藻帯である。

4 考 察

以上のことから堆積環境を述べると、深掘り西壁5ⅠトレンチのⅠ－Ⅱ帯は、縄文海進によって形成された河内湾が陸水の影響を受けて汽水化した海退期の環境を表していると考えられる。特に、潮間帯特徴種の検出は、海成層の上限つまり古海岸線を示すと考えられ（前田他，1982）、№10のT.P.＋2.75m付近が海水の及んだ高度といえる。安田（1980）は、瓜生堂遺跡の花粉・珪藻報告の中で当時の海水面高度をT.P.±0m前後に推定しているが、今回の分析ではさらに約3m上廻ることになる。また、那須・樽野（1980）は、T.P.＋2mを越えるとしている。地

理的にみると、亀井遺跡は、河内湾の湾奥部（最南部）に位置しており、海退の時期も比較的早かったものと思われる。

海退後は、Ⅰ—Ⅱ帯に表されるような草炭～泥炭質の湿地または沼沢地が形成されたことが推定される。このような環境は、2Gトレンチ下部のG—Ⅰ帯にも認められ、対比される。その後、弥生時代（時代の詳細は不明）の貧珪藻帯をへて、G—Ⅲ帯へ移行する。

G—Ⅲ帯は、富栄養水域に特徴的な *Fragilaria pinnata* 及びその変種の *F. pinnata* var. *lancettula*, *F. construens* が多産することから、富栄養でしかも弱アルカリ性の浅い水域が存在したことが推定される。これと同様な群集は、前回のDトレンチのDS—2帯にみられ対比される。

弥生後期～古墳前期になるとG—Ⅳ帯で示されるような珪藻の個体数、種数共に安定出現するような環境へと変化したことが考えられる。特に、好流水性種の多産は、旧大和川などの河川の影響を受けたものと考えられる。これに近似する群集は、前回のDトレンチのDN—2帯、DN—3帯にみられ対比される。

珪藻の対比は、あくまで堆積環境の対比であって、時代の対比ではない。したがって、異なる時代であっても同じような環境であれば対比した。

亀井北遺跡周辺の古環境変遷は、縄文前期の6,300年前頃、縄文海進の盛期をむかえ、河内湾最奥部に位置する当遺跡は海底下に没し、T.P.+2.75m付近に海成層の上限（Marine limit）つまり、古海岸線があったと考えられる。花粉分析から周辺には、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林の存在が推定される。海退後、弥生の初め頃まで沼沢地環境となり、貧珪藻帯をへて旧大和川等による流水の影響の強い環境へと変化したことが考えられる。時代的には、弥生後期に当てはまるが、場所によっては古墳時代前期まで引き続く地点もある。なお、流水の環境に移行する直前は、比較的安定した富栄養浅水域の存在が推定される。

弥生後期から中世の堆積層は、砂分が多く、珪藻の生育には不適当な環境となった。

引用文献

前田　他　1982　海成層の上限（Marine limit）の認定。第四紀研究 vol. 21. no. 3. p. 195～201。

(財)大阪文化財センター編　1980　亀井・城山一本文編一p. 464。

前田保夫　1980　縄文の海と森　蒼樹書房。p. 238。

安田喜憲　1980　瓜生堂。(財)大阪文化財センター編。p. 427～436。

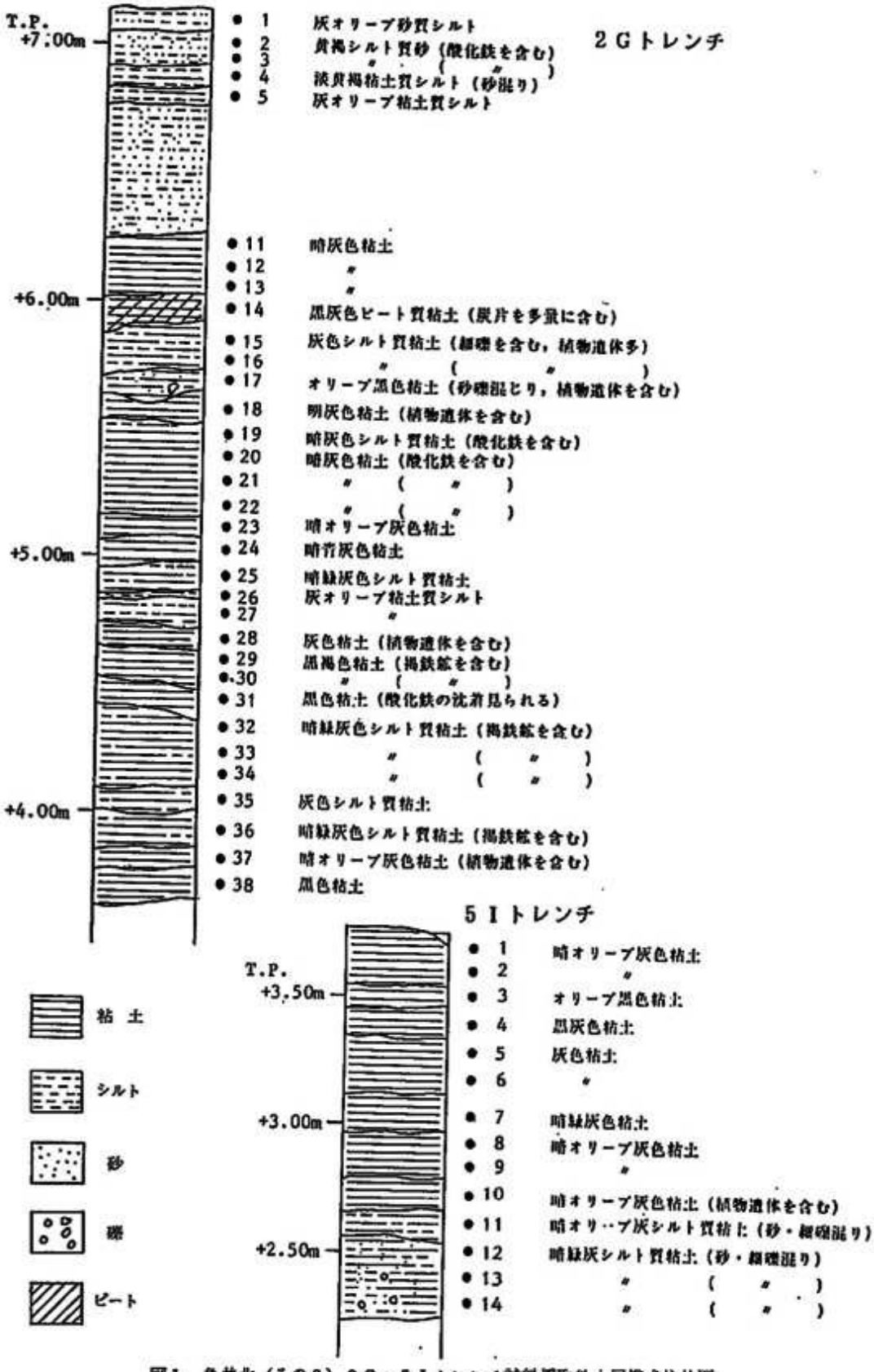
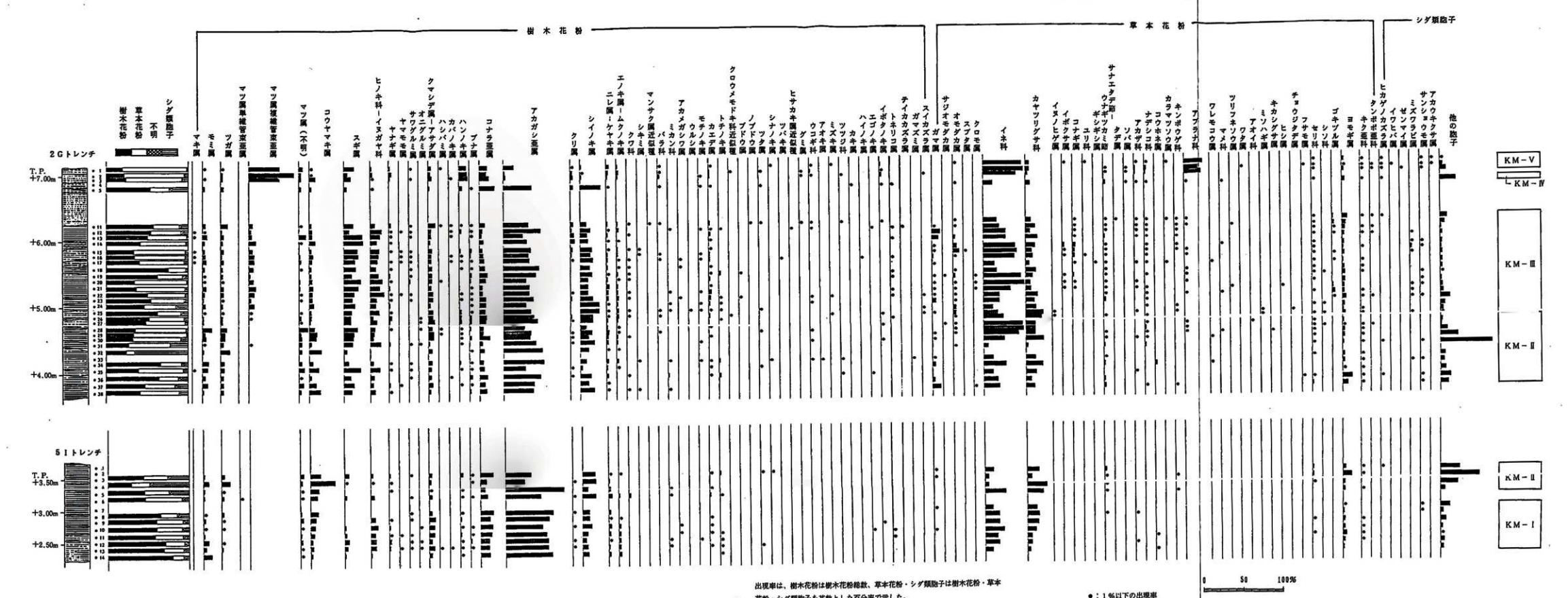


図1　亀井北（その3）2G・5Iトレンチ試料採取地土層模式柱状図



出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は樹木花粉・草本花粉・シダ類胞子を基数とした百分率で示した。

●：1％以下の出現率

図2　亀井北遺跡（その3）試料 花粉ダイアグラム

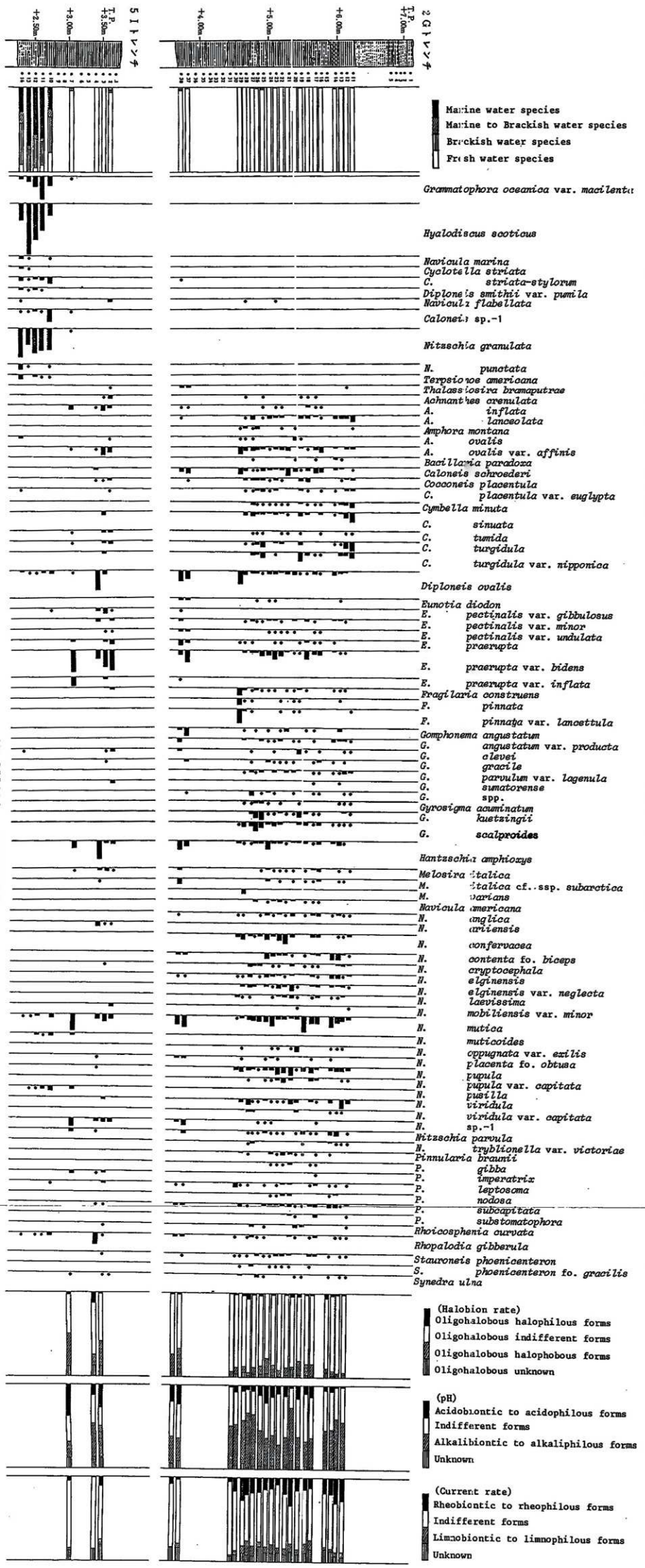
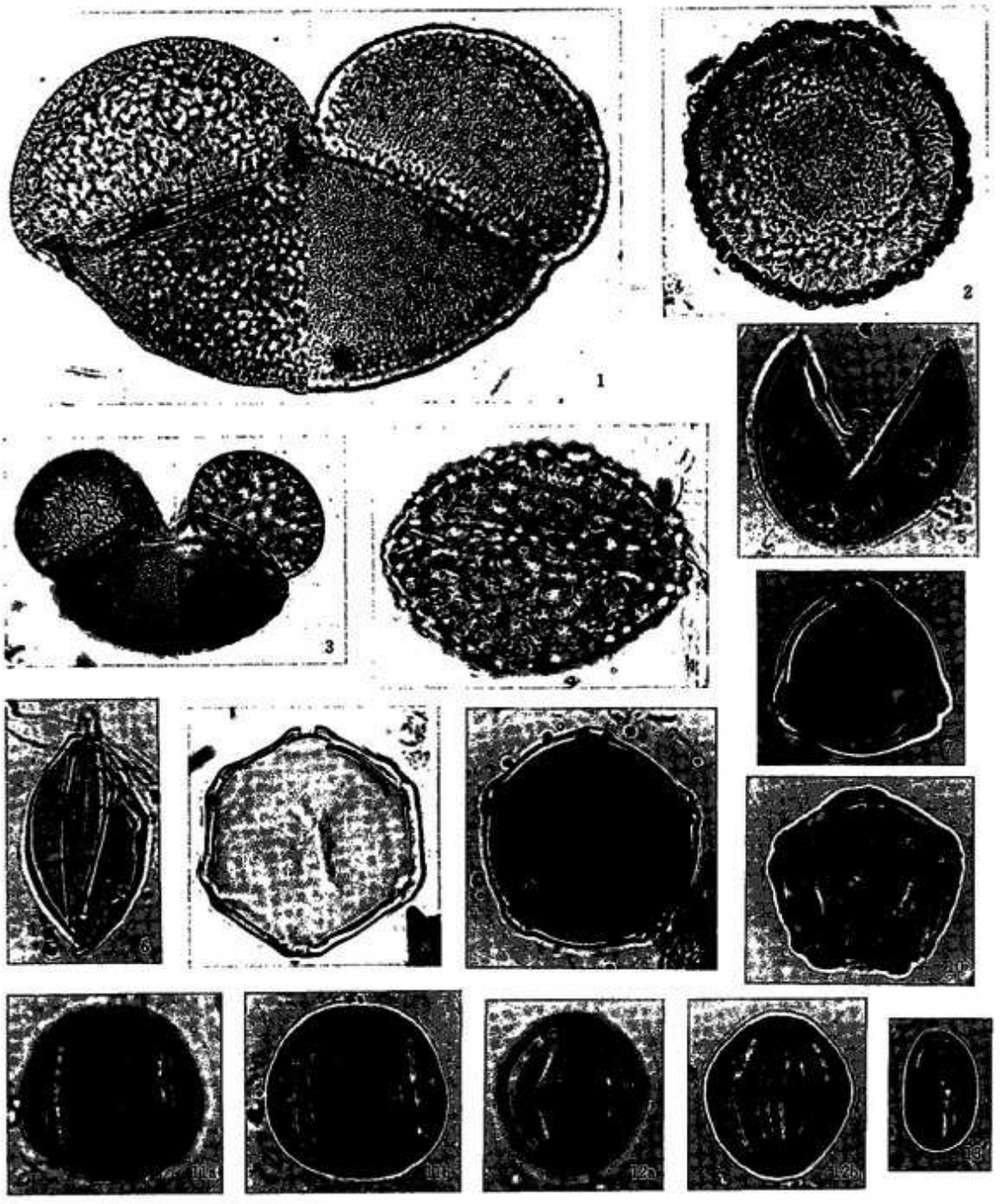


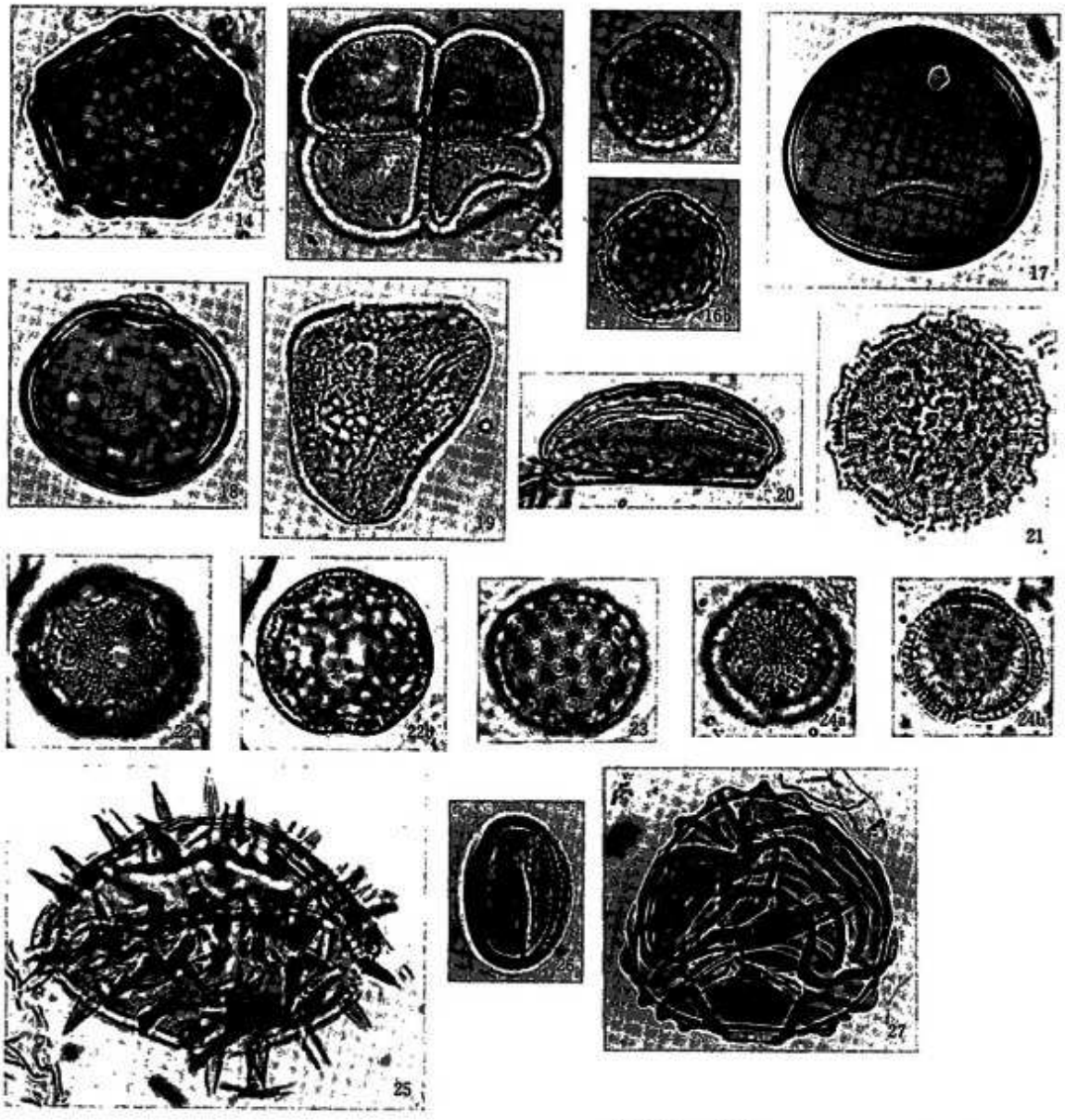
図 3 電中研(3)地点珪藻遷移図

写真1　花粉化石



1　モミ属(2G—34)，　2　ツガ属(2G—22)，　3　マツ属(2G—22)，　4　コウヤマキ属(2G—20)
5　スギ属(2G—20)，　6　ヒノキ科—イヌガヤ科(51—13)，　7　ヤマモモ属(2G—17)，
8　サワグルミ属(2G—15)，　9　クマシデ属—アサダ属(51—13)，　10　ハンノキ属(51—11)
11a.b　コナラ亜属(51—13)，　12a.b　アカガシ亜属(2G—23)，　13　シイノキ属(2G—23)，

写真2　花粉化石



50μ（1～4,21）　　（4～20, 22～26）

0　100μ（27）　0　50μ

14　ニレ属―ケヤキ属(51―13)，15　ガマ属(2G―17)，16a.b　オモダカ属(2G―16)，
17　イネ科(2G―15)，18　イネ科(2G―17)，19　カヤツリグサ科(2G―15)，
20　ミズアオイ属(2G―20)，21　サナエタデ節―ウナギツカミ節(2G―20)，
22a.b　ナデシコ科(2G―30)，23　アカザ科(2G―20)，24a.b　アブラナ科(2G―1)，
25　コウホネ属(2G―35)，26　ヨモギ属(2G―15)，27ミズワラビ属(2G―15)

写真3　珪藻化石

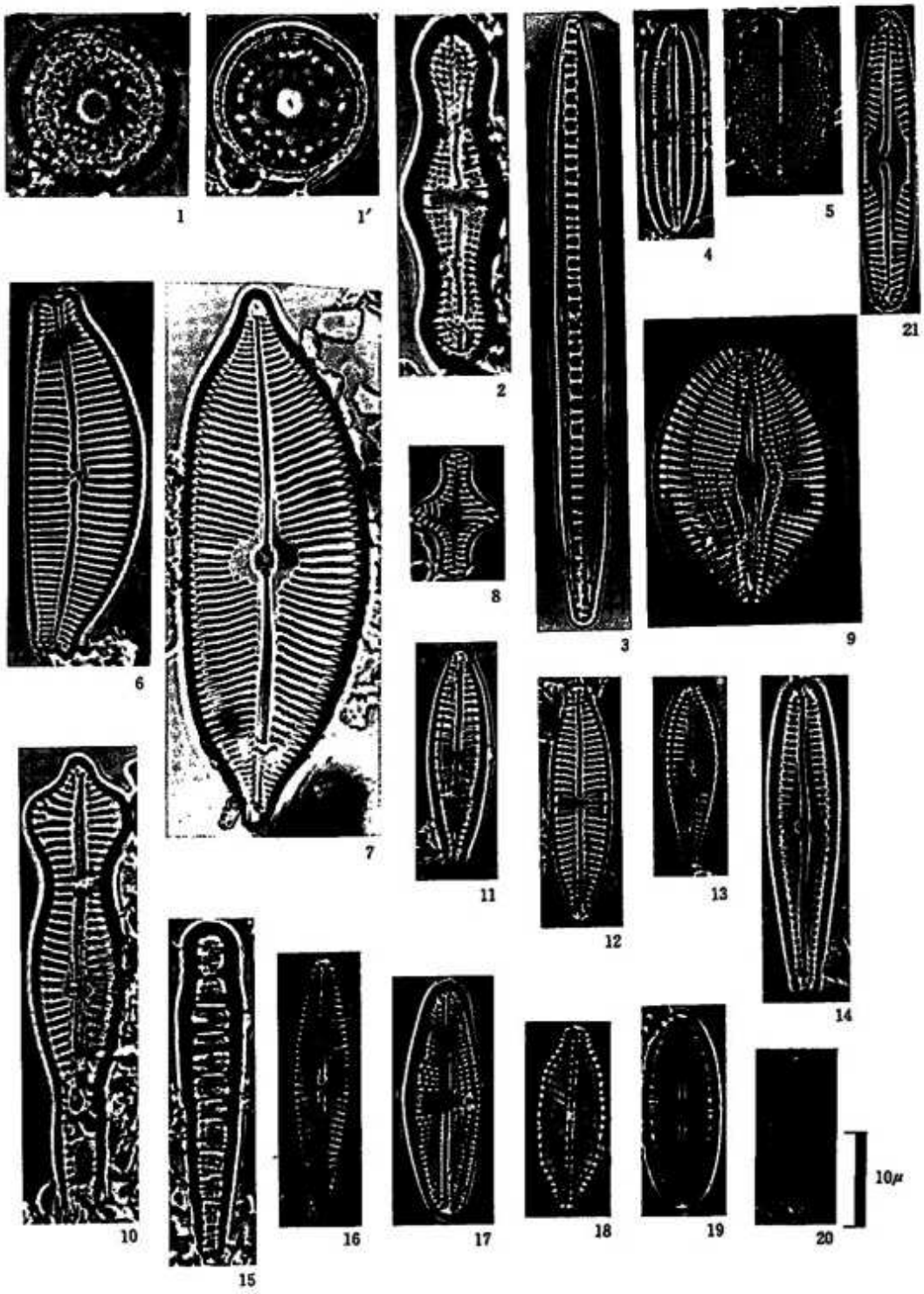
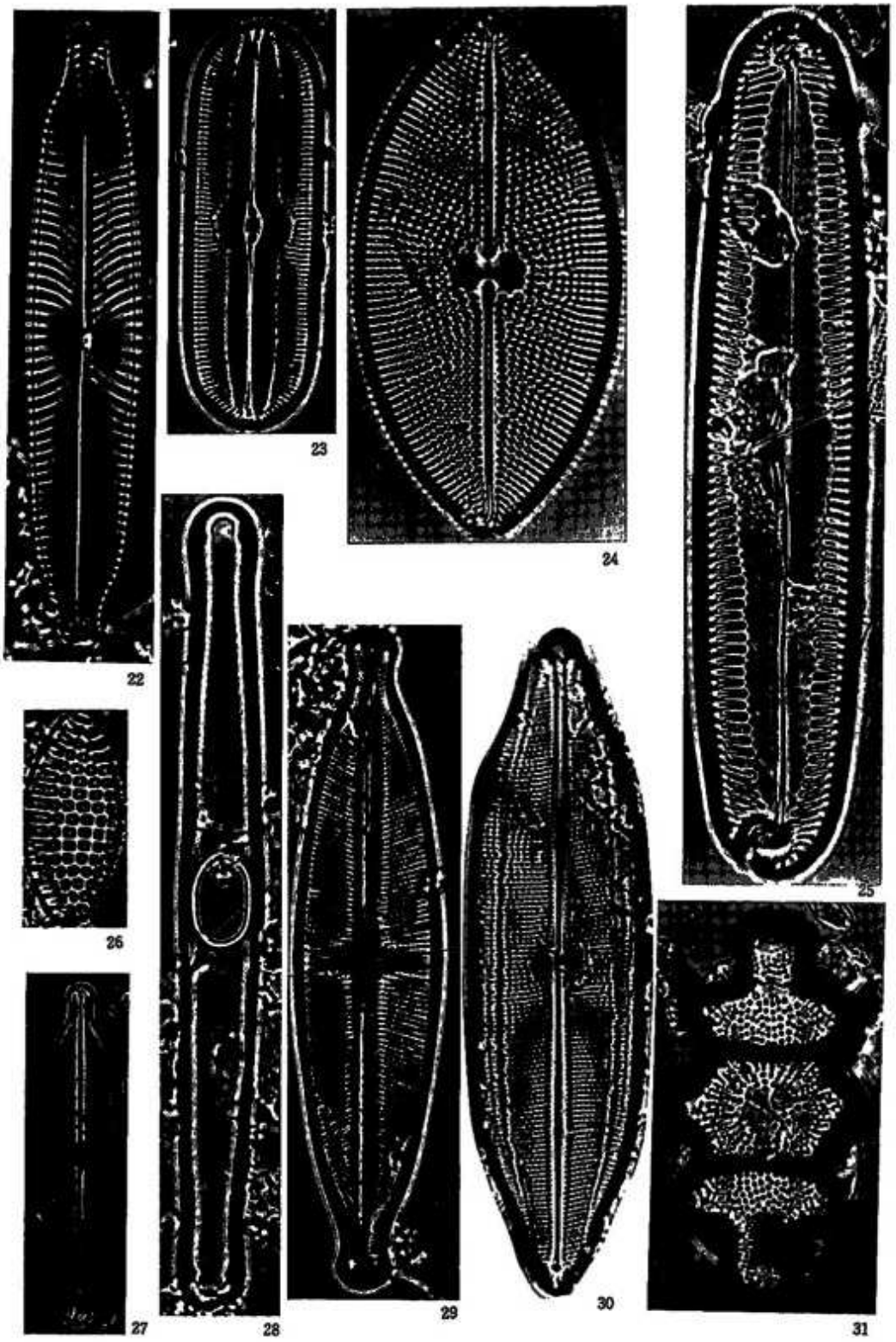


写真4　珪藻化石



写 真 説 明

写真番号	珪藻化石種名	トレンチ及び試料番号
写真3		
1	*Hyalodiscus scoticus* (Kuetz.) Grunow	5 I -14
1′	*H. scoticus* (Kuetz.) Grunow	〃
2	*Achnanthes inflata* Kuetzing	2G-22
3	*Bacillaria paradoxa* Gemelin	2G-27
4	*Caloneis bacillum* (Grun.) Cleve	2G-21
5	*Cocconeis placentula* (Ehr.) Cleve	2G-21
6	*Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow	2G-19
7	*C. cuspidata* Kuetzing	2G-16
8	*Fragilaria construens* (Ehr.) Grunow	2G-28
9	*Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve	〃
10	*Gomphonema acuminatum* Ehrenberg	2G-24
11	*G. angustatum* (Kuetz.) Rabenhorst	〃
12	*G. angustatum* var. *producta* Grunow	2G-28
13	*G. parvulum* Kuetzing	〃
14	*G. sumatorense* Fricke	2G-13
15	*Meridion circulae* var. *constricta* (Ralfs) V. Heurck	2G-28
16	*Navicula cryptocephala* Kuetzing	2G-26
17	*N. mutica* Kuetzing	2G-28
18	*N. elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick	〃
19	*N. confelvacea* (Kuetz.) Grunow	〃
20	*N. grimmei* Krasske	2G-27
21	*Pinnularia subcapitata Gregory*	2G-16
写真4		
22	*Navicula viridula* var. *capitata* Mayer	2G-27
23	*N. americana* Ehrenberg	2G-26
24	*N. marina* Ralfs	5 I -14
25	*Pinnularia brevicostata* var. *sumatorana* Hustedt	2G-24
26	*Nitzschia granulata* Grunow	5 I -14
27	*Stauroneis anceps* Ehrenberg	2G-17
28	*Grammatophora oceanica* var. *macilenta* (W. Sm.) Grunow	5 I -13
29	*Stauroneis phoenicenteron* fo. *gracilis* (Dippel) Hustedt	2G-23
30	*Neidium iridis* var. *ampliata* Ehrenberg	2G-16
31	*Terpsionoe americana* (Bail.) Ralfs	5 I -12

付載2　奈良時代、中世出土土器観察表

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
ピット6141	第35図	土師器	鉢	22.6	8.8	平底に近い底部を持ち、口縁は垂直に立ちあがる。 口縁端部はやや外反する。	内外面ともにナデ、及びヨコナデ。 底部外面に指頭圧痕残る。	密、堅緻 外面　橙 内面　〃 反転復元
SE−6201	第39図	土師器	壺	9.2	5.7	丸底の小型広口壺。 頸部はゆるく内弯する。	内外面ともにヨコナデ。 口縁端部にヘラによる沈線。	密、堅緻 外面　橙 内面　〃 完形
NR−6201	第43図−1	土師器	坏	14.3	2.6	平たい底部より肥厚した口縁部がゆるく立ちあがり、口縁端部はつまみ上げ丸く仕上げる。	内外面とも口縁部ヨコナデ。 底部外面に指オサエ。 口縁部内面下半放射状一段暗文。 底部内面にラセン暗文。	密、堅緻 外面　にぶい橙 内面　〃 底部外面に「井」の墨書有り 反転復元
	第43図−2	土師器	坏	14.5	3.1	平底、底部と口縁部の境は丸味をおびる。 口縁端部は丸い。	同上。	密、堅緻 外面　燈 内面　〃 底部外面に「井」の墨書有り 反転復元 内面一部スス付着
	第43図−3	土師器	坏	18.1	3.6	平底から丸味をもって立ち上る口縁部を持つ。口縁端部は内側へ巻き込む。	内外面とも口縁部ヨコナデ。 底部外面にケズリ。 口縁部内面に放射状一段暗文。 底部内面にラセン状暗文。	密、堅緻 外面　黄燈 内面　にぶい黄燈 底部外面に「十根」の墨書有り 反転復元。
	第43図−4	土師器	坏	13.8	2.75	丸底に近い平底。 口縁端部は丸く仕上る。	内外面とも口縁部ヨコナデ。 底部外面に指オサエ。 口縁部内面に放射状一段暗文。 底部内面にラセン状暗文。	密、堅緻 外面　燈 内面　にぶい黄燈 底部外面に「井」の墨書有り 反転復元
	第43図−5	土師器	坏	15.0	3.9	平底で底部と口縁の境は丸味をおび、口縁は垂直にたちあがる。口縁端部に一面を成す。	内外面とも口縁部ヨコナデ。 外面口縁部下半から底部に指オサエ。	密、堅緻 外面　燈 内面　〃 底部外面に「井」の墨書有り 反転復元
	第43図−6	土師器	皿	17.5	2.4	平底で口縁部は強く屈曲して立ち上る。口縁端部に内傾する一面を成す。	内外面とも口縁部ヨコナデ。 内面は底部もナデ。 底部外面指オサエ。	密、堅緻 外面　橙 内面　〃 底部外面に墨書有り 反転復元
	第43図−7	土師器	皿	14.8	2.6	底部は丸味をおび、屈曲して立ち上る口縁部は外反する。 口縁端部は内側へ巻き込む。	内外面とも口縁部ヨコナデ。 内面は底部もナデ。 外面口縁部と底部の境にヨコ方向ケズリ。 底部外面に一方向ケズリ。 口縁部内面に放射状一段暗文。 底部内面にラセン状暗文。	密、堅緻 外面　淡黄 内面　淡赤燈 内面一部スス付着
	第43図−8	土師器	坏	16.7	3.4	平底、底部と口縁部の境は丸味をおびる。 口縁端部はゆるく内側へ巻き込む。	内面ナデ。 口縁部外面ヨコ方向ヘラミガキ。 底部外面ケズリ。 口縁部内面放射状一段暗文。 底部内面ラセン状暗文。	密、堅緻 外面　にぶい燈 内面　〃
	第43図−9	土師器	坏	16.2	3.4	同上。	口縁部外面ナデとヘラミガキ。 外面口縁部下半から底部にかけてケズリ。 口縁部内面放射状一段暗文。 底部内面ラセン状暗文。	密、堅緻 外面　にぶい黄燈 内面　〃
	第43図−10	土師器	坏	15.0	2.45	同上。	底部外面ケズリ。 口縁部内面放射状一段暗文。 底部内面ラセン状暗文。	密、堅緻 外面　淡黄 内面　淡赤燈 内面　一部スス付着

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
NR－6201	第43図－11	土師器	坏	16.2	3.65	平底、底部と口縁部の境は丸味をおびる。口縁端部はゆるく内側へ巻き込む。	内面ヨコナデ。口縁部外面上半ヘラミガキ。外面口縁部下半から底部ヘラケズリ。	密、堅緻 外面　にぶい橙 内面　〃
	第43図－12	土師器	坏	15.6	2.7	同上。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。底部内面ナデ。	密。堅緻。 外面　にぶい燈 内面　淡黄燈色 一部スス付着。完形
	第43図－13	土師器	坏	19.1	4.6	平底、丸味をもって口縁部につづく。口縁端部は垂直につまみあげ、外側に沈線が巡る。	口縁部内外面共にヨコナデ。外面口縁部下半ヘラケズリ。底部外面ナデ。口縁部内面放射状一段暗文。底部内面ラセン状暗文。	密、堅緻 外面　橙 内面　黄橙 断面　にぶい黄橙 完形
	第43図－14	土師器	坏	14.9	3.6	やや丸味をおびた平底で中央に凹面をなす。体部はなだらかに立ち上る。口縁端部はやや外反気味につまみ上げる。	口縁部上半内外面ヨコナデ。底部内面と口縁下半外面ナデ。底部外面指頭圧痕。	密、堅緻 外面　にぶい黄燈 内面　〃 一部スス付着。完形
	第43図－15	土師器	坏	15.8	3.8	丸味をおびた底部、体部はなだらかに立ち上る。口縁端部は軽くつまみあげる。	内面及び口縁部外面上半はナデ。口縁部外面下半から底部は指オサエ。	密、堅緻 外面　にぶい黄燈 内面　〃 断面　〃 半転復元
	第43図－16	土師器	椀	12.4	4.35	やや丸味をおびた底部。口縁部は丸く立ち上りやや内傾する。口縁端部は丸くなる。	内面ナデ、口縁部外面ナデ。外面体部及び底部指オサエ。	密、堅緻 外面　橙 内面　〃 完形。
	第43図－17	土師器	椀	12.9	3.7	やや丸味をおびた平底から丸味をもって口縁へ続く。口縁部は垂直に立ち、端部はつまみ上げ。	口縁部内外面ヨコナデ。底部から体部内外面ナデ。	密、堅緻 外面　明赤褐色 内面　燈色 完形
	第43図－18	土師器	椀	12.0	4.2	平底から丸味をもって立ちあがり口縁部は内傾する。口縁端部は丸くなる。	口縁部内外面強いナデ。内面ヨコナデ。外面体部及び底部指による調整。	密、堅緻 外面　燈 内面　〃 一部赤変。完形
	第43図－19	土師器	椀	12.2	4.2	平底から丸味をもって立ちあがり口縁は垂直に立ち上る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部及び底部内外面ヨコナデ。	密、やや軟 外面　明赤褐色 内面　〃 完形
	第43図－20	土師器	椀	13.2	3.8	同上。	同上。	密、やや軟 外面　にぶい橙色 内面　〃 断面　〃 完形
	第43図－21	土師器	椀	13.5	4.3	同上。	内面及び口縁部外面ヨコナデ。体部及び底部外面指オサエ。	密、やや軟 外面　にぶい橙色 内面　淡黄色
	第43図－22	土師器	皿	24.0	2.6	平底、口縁と底部の境は丸味を持つ。口縁部は外反し端部は内側へ巻き込む。	口縁部内外面ヨコナデ。その他内外面ヨコナデ。	密、やや軟 半転復元
	第43図－23	土師器	鉢	14.5	4.5	平底、口縁は外傾してまっすぐに立ち上る。口縁端部は内側へつまみ上げる。	内面ヨコナデ。外面口縁及び体部ヘラミガキ。底部ヘラケズリ。	密、堅緻 外面　橙 内面　にぶい黄橙 断面　明黄褐色
	第43図－24	土師器	坏	10.8	2.1	丸味をおびた平底から屈曲して立ちあがる口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面指オサエ後ナデ。	密、やや軟 外面　にぶい黄橙色 内面　にぶい橙色

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
NR—6201	第43図—25	土師器	坏	8.0	2.2	丸底で丸味をもって口縁に続く。	内外面ともナデ。	密、やや軟 外面　淡黄色 内面　〃 完形。
	第43図—26	土師器	坏	9.6	2.3	同上。	同上。	密、やや軟 外面　にぶい橙色 内面　にぶい黄橙色 スス付着。完形
	第43図—27	土師器	高坏	㊟15.4	現10.5	下にひらく脚部。	外面脚部上半ケズリ。下半ナデ後ヘラミガキ。 内面椀部上半指頭圧痕、下半ケズリ。	密、堅緻 外面　橙 内面　〃 断面　にぶい橙 脚部のみ「蓋ロロ」の墨書あり
	第43図—28	土師器	高坏	7.6	6.4	手づくねによる。脚部はゆるくひらく。	坏部内外面ナデ。 脚部内外面指オサエ。	密、堅緻 外面　にぶい橙 内面　〃
	第43図—29	土師器	壺	9.6	現4.8	頸部はゆるくすぼまる。 広口小型壺。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内面ケズリ。 外面不明。	密、堅緻 外面　橙色 内面　赤 断面　明赤褐
	第43図—30	土師器	壺	11.6	7.6	広口小型壺。	内面及び口縁部外面ナデ。 外面体部、底部指オサエ。	密、堅緻 外面　黒 内面　にぶい橙 完形
	第44図—31	土師器	壺	15.0	現10.3	広口小型壺。	口縁部、頸部内外面ヨコナデ。 体部、底部内面ナデ。 体部外面指頭圧痕。	密、堅緻 外面　橙 内面　〃 断面　明赤褐。反転復元
	第44図—32	土師器	甕	14.3	11.2	丸底、やや球胴の小型甕。	口縁部内外面ナデ。 体部、底部内外面ハケ。	密、堅緻 外面　淡黄色 内面　にぶい黄橙
	第44図—33	土師器	甕	15.5	14.5	丸底球胴、肩部は強いナデにより段をなす。口縁部は外反する。	口縁部内外面及び体部上半内面ヨコナデ。体部下半及び底部内面ナデ。体部外面ヘラケズリ。 底部外面指頭圧痕。	密、堅緻 外面　明赤褐色 内面　にぶい橙 断面　赤 スス付着
	第44図—34	土師器	甕	17.3	13.9	同上。	口縁部外面ヨコナデ。 他ハケ。	密、堅緻 外面　橙 内面　明赤褐 断面　〃 外面スス付着。完形
	第44図—35	土師器	甕	19.3	16.8	丸底、球胴、口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。 内面体部、底部ナデ。 外面体部ハケ。 外面底部ユビオサエ。	密、堅緻 外面　橙 内面　明赤褐色 外面スス付着
	第44図—36	土師器	甕	24.9	現8.2		口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ。 体部内面ヘラケズリ。	密、堅緻 外面　橙色 内面　淡黄橙色 反転復元
	第44図—37	土師器	甕	27.1	現13.1	口縁端部は上方につまみあげる。	同上。	密、堅緻 外面　黄橙色 内面　にぶい黄橙色
	第44図—38	土師器	甑（小型）	12.1	現5.1	2ヵ所に把手を有する。 直立する口縁。体部下半は欠損。	内外面ともにナデ。	密、堅緻 外面　にぶい赤褐色 内面　明褐色
	第44図—39	土師器	竈（小型）	基底部径 11.9	8.9			密、堅緻 内外面ともに明褐色

遺構名	挿図番号	種類属	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
NR－6201	第44図－40	土師器	竈（小型）	上径部 12.3 最底部径 17.4	14.6	炊き口上部が突出する。２ヵ所に把手を有する。	内外面ともにユビオサエ。	密、堅緻 外面　明褐色 内面及び炊き口上部にススが付着
	第44図－41	弥生土器	器台（口縁部欠損）	底径部 20.4	現19.0	上下がひらき中央部のせまい鼓胴形を呈する。裾端部は面をなす。	横部内外面ヨコナデ。外面ハケ。	密、堅緻 外面　赤橙色 内面　橙色
	第44図－42	弥生土器	壺（破片）			肩部に５条の沈線。		密、堅緻 内外面　暗褐色
	第44図－43	弥生土器	壺（破片）			口縁部に刻目を有する。口縁下に３条の沈線。	外面ハケ。	密 外面　灰褐色 内面　にぶい黄橙色
	第45図－44	須恵器	坏蓋	11.3	2.7	宝珠つまみ、天井部はやや丸味をおびている。端部は下方へ短かく屈曲する。	天井部の1/4を回転ヘラケズリ。	密、堅緻 内外面　灰色 内面にススが付着
	第45図－45	須恵器	坏身	12.8	3.7	平底の底部から屈曲して体部は外反する。	底部ヘラキリ。	密、堅緻 内外面ともオリーブ灰色
	第45図－46	須恵器	坏身	13.6	4.7	同上。	同上。	密、堅緻 外面　灰色 内面　黄灰色
	第45図－47	須恵器	坏	12.0	5.8	高台をもつ。		密、堅緻 外面　灰色 内面　にぶい赤褐色
	第45図－48	須恵器	坏身	15.9	4.3	同上。	底部内面ハケメ。	密、堅緻 外面　灰白色 内面　灰褐色
	第45図－49	須恵器	壺	15.0	14.3	高台をもつ広口壺。		密、堅緻 内外面ともに灰色 口縁部から肩部にかけて降灰痕有
	第45図－50	須恵器	壺	底径9.5	現21.5	高台をもつ直頸壺。		密、堅緻 内外面ともに灰色 口縁部から肩部にかけて自然釉有
	第45図－51	須恵器	坏蓋	12.1	5.1	天井部はゆるやかに内弯し、口縁部との境に稜をなす。口縁部はやや内傾し、端部は外反する。	内面および口縁部外面ヨコナデ。天井部は、反時計まわりのヘラケズリが施される。	密、堅緻 内外面　灰色
	第45図－52	須恵器	広口壺	22.0		ラッパ状に開く頸部と水平方向へのびる口縁部をもつ。	内外面ともヨコナデを施す。	密、堅緻 内面　にぶい黄橙色 外面　褐灰色
	第45図－53	須恵器	壺	14.8	22.2	底部は丸く、体部上半部に肩部を有する。頸部は外反し、口縁端部は内傾する。	肩部より上方の内外面ともヨコナデ。外面下半部は格子風叩き目、内面下半部は青海波文が施される。	密、堅緻 内面　灰色 外面　灰白色 肩部に自然釉かかる。完形
	第45図－54	紡輪	円筒				横方向のハケ目が施される。	密、堅緻 内外面　淡黄橙色
	第45図－55	紡輪	円筒				右まきりのハケ目が施される。	密、堅緻 内外面　にぶい橙色
	第45図－56	紡輪	円筒				同上。	密、堅緻 内外面　淡黄橙色
	第45図－57	紡輪	円筒				同上。	同上
	第45図－58	紡輪	円筒				同上。	密、堅緻 内外面　にぶい黄橙

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
NR—6201	第45図—59	埴輪	円筒				右さがりのハケ目が施される。	密、堅緻 内外面　淡黄橙
	第45図—60	埴輪	円筒				同上。	同上
奈良時代包含層	第49図—1	土師器	甕	31.8		胴長の体部と屈曲する口縁部をもつ。 口縁端部内面段を有する。	口縁部は内外ともヨコナデ、体部外面は右さがりのハケ目、体部内面はヘラケズリ、口頸部内面は横方向のハケ目が施される。	密、やや軟 内面　にぶい橙 外面　橙 外面に煤付着
	第49図—2	土師器	鍋蓋	25.6		水平方向へのびる鍔部と、屈曲する口縁部を有する。口縁端部内面は軽い段を有する。	口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目が施される。 鍔部内面はヘラケズリが施される。	密、堅緻 内外面　にぶい黄橙
	第49図—3	土師器	坏	20.2	4.5	平底の底部と内弯しながらのびる。口縁端部は丸くおさまりその内側は段を有する。	口縁部は内外面ともヨコナデが施される。	密、やや軟 内外面　淡黄橙色 底部外面に「井」の墨書
SE—8101	第 52 図	瓦器	椀	15.2	4.7	断面三角形の高台をもつ。 体部上半は強いナデによって段をなし、ゆるやかに外反する。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕。高台張り付け部ヨコナデ。底部ナデ。内面暗文。	密、堅緻 内外面ともに灰色 反転復元
SD—8146	第54図—1	土師器	小皿	9.6	1.6	やや凹んだ底部をもち、体部はゆるやかに屈曲した後、つまみあげ気味の口縁部に至る。	内外面ともナデ調整をほどこす。	密、堅緻 内面　にぶい黄褐色 外面　にぶい橙色
	第54図—2	土師器	小皿	9.0	1.8	平底気味の底部をもち、口縁端部は丸くおさめる。	同上。	密、やや軟 内外面ともに淡黄橙色
	第54図—3	土師器	小皿	9.0	1.9	同上。	同上。	密、緻緻 内外面ともに橙色。完形
	第54図—4	土師器	小皿	9.6	2.0	同上。	同上。	密、緻緻
	第54図—5	土師器	小皿	9.0	1.7	平底の底部をもち口縁端部は丸くおさめる。	同上。	密、やや軟 内面　橙色 外面　明黄褐色
	第54図—6	土師器	皿	14.9	2.9	平底の底部をもち、口縁端部は丸くおさめる。 口縁部は強いヨコナデにより底部との境に凹みが生じる。	同上。 口縁部に強いナデ。	密、やや軟 内外面　明黄褐色
	第54図—7	土師器	皿	14.5	2.8	同上。	同上。	密、堅緻 内外面ともにぶい橙
	第54図—8	土師器	皿	13.2	2.8	上げ底の底部をもち、口縁端部は丸くおさめる。 口縁部は強いヨコナデにより体部との境を形成する。	同上。	密、堅緻 内外面　黄橙色
	第54図—9	土師器	皿	14.3	3.0	平底の底部をもち、ゆるやかに内弯し口縁部に至る。口縁部は強いヨコナデにより体部との境を形成する。	同上。	密、堅緻 内外面　橙色
	第54図—10	瓦器	椀	14.4	5.4	断面三角形の高台をもつ。 ゆるやかに内弯する体部をもち口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ調整を施すが、体部には指頭圧痕が残る。内面はナデの後、暗文が施される。	密、堅緻 内面　暗灰色 外面　灰色（一部暗灰色） 完形
	第54図—11	瓦器	椀	15.3	5.4	断面三角形の高台をもつ。 ゆるやかに内弯する。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面ともヨコナデ調整の後、暗文が施される。	密、堅緻 内面　灰色 外面　暗灰色 完形
	第54図—12	瓦器	椀	15.1	5.4	断面三角形の高台をもつ。 ゆるやかに内弯する体部をもち口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整の後、暗文が施される。 体部外面には指頭圧痕が残る。	密、堅緻 内外面　灰白色 完形

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SD－8146	第54図－13	瓦器	椀	15.3	5.5	断面三角形の高台をもつ。ゆるやかに内弯する体部をもち口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。体部内面は暗文が施され、外面には指頭圧痕が残る。	密、堅緻 内面　灰色 外面　暗灰色 完形
SK－8101	第 55 図	瓦器	椀	15.0	5.7	「ハ」の字形にひらく高台とゆるやかに内弯してのびる体部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともヨコナデが施される。内面は暗文が施され、体部外面は指頭圧痕が残る。	密、堅緻 内外面　灰色 完形
SB－8201	第 58 図	土師器	羽釜	28.0		水平方向にのびる鍔と内傾した後、外側へ屈曲する口縁部を有する。	口縁部内外面ともヨコナデ調整を施す。	密、堅緻 内外面　橙 外面　煤付着
SE－8201	第 59 図	瓦器	椀	14.9	4.9	断面三角形の退化した高台をもつ。ゆるやかに内弯する体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。内面および外面上方に暗文を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。	密、堅緻 内面　灰色 外面　暗灰色 完形
SE－8202	第 60 図	土師器	小皿	8.2	1.4	平底の底部をもち口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ調整を施す。	密、堅緻 内外面　浅黄橙色。完形
SE－8203	第 61 図	土師器	皿	11.5	2.1	上げ底の底部と外傾する体部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。	同上。	密、堅緻 内外面　浅黄橙色。完形
SE－8204	第62図－1	瓦器	椀	13.4	3.5	退化した高台を持つ体部はゆるやかに内弯し、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。内面に暗文を施す。	密、堅緻 内外面　灰色
	第62図－2	瓦器	椀	13.4	3.65	同上。	同上。	密、堅緻 内面　灰色 外面　灰色・灰白色
SE－8205	第63図－1	瓦器	椀	12.6	3.2	同上。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には暗文が施される。	密、堅緻 内面　灰色 外面灰白色
	第63図－2	瓦器	椀	12.6	3.4	同上。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色
	第63図－3	須恵質土器	甕	36.0		ゆるやかに内弯する体部をもつ。頸部は外側へ屈曲し、端部は下方へのびる。口縁端部は閉じ。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。外面は平行目が施される。	密、堅緻 内面　暗青灰色 外面　青灰色
SD－8256	第 64 図	瓦器	羽釜	15.8		水平方向へのびる鍔部と内傾する口縁部を有する。口縁部外面は強いナデにより段を形成する。	口縁部内外面はヨコナデが施される。	密、堅緻 内外面　灰色
SK－8204	第67図－1	土師器	小皿	7.0	1.3	やや凹んだ底部をもち、口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともにナデ調整。	密、やや軟 内面　にぶい黄橙色 外面　灰黄褐色 反転復元
	第67図－2	土師器	小皿	8.2	1.65	底部から体部にかけては、ゆるやかな曲線を描き、口縁端部は丸くおさめる。	同上。	密、やや軟 内外面ともに灰白色 反転復元
	第67図－3	土師器	小皿	8.7	1.6	平底に近い底部をもち、口縁端部は丸くおさめる。	同上。	密、やや軟 内外面ともににぶい橙色
	第67図－4	土師器	小皿	8.6	1.85	同上。	同上。	密、やや軟 内面　浅黄色 外面　灰白色 反転復元
	第67図－5	土師器	小皿	8.0	1.8	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともににぶい橙色 反転復元
	第67図－6	土師器	小皿	8.5	1.5	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともににぶい黄橙色

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK−8204	第67図−7	土師器	小皿	8.6	1.6	平底に近い底部をもち、口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともにナデ調整。	密、やや軟 内面　淡黄色（すす付着） 外面　にぶい黄橙色 反転復元
	第67図−8	土師器	小皿	8.7	1.55	同上。	同上。	密、やや軟 内面　にぶい黄橙色 外面　淡黄色 反転復元
	第67図−9	土師器	小皿	8.6	1.3	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともににぶい黄橙色
	第67図−10	土師器	小皿	8.2	1.5	同上。	同上。	同上 反転復元
	第67図−11	瓦器	椀	15.7	4.6	三角形の高台をもち、ゆるやかな曲線をもつ体部から、やや外反する口縁部へつづく。 口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともにナデ調整。 体部外面に指頭圧痕残る。 内面に暗文。	密、堅緻 内外面ともに灰色 反転復元
	第67図−12	瓦器	椀	14.4	5.2	同上。	同上。	同上
	第67図−13	瓦器	椀	15.6	4.9	同上。	同上。	同上
	第67図−14	白磁	碗	15.8	?	口縁端部は外側に折り返し、丸くおさめる。 体部に稜を有する。	?	密、堅緻 内外面ともに灰白色、 全面に施釉 反転復元
	第67図−15	白磁	碗	6.5（高台径）	0.6（高台高）	方形で垂直に立ち上がる高台。	内面にネコカキテ。	密、堅緻 内外面ともに灰白色 体部全面に施釉
SD−8261	第68図−1	土師器	小皿	8.7	1.7	やや上げ底の底部と内弯する体部を有する。	内外面ともヨコナデが施される。	密、堅緻 内面　明黄褐色 外面　にぶい黄橙。完形
	第68図−2	土師器	小皿	8.0	1.5	やや上げ底の底部と外傾する体部を有する。	同上。	密、堅緻 内外面　淡黄色。完形
	第68図−3	土師器	小皿	8.1	1.7	同上。	同上。	密、堅緻 内面　灰白色 外面　淡黄色。完形
	第68図−4	土師器	皿	14.0	2.6	平底ぎみの底部と内傾する体部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	同上。	密、堅緻 内面　灰白色 外面　淡黄色
	第68図−5	瓦器	椀	10.8	2.7	同上。	口縁部内外面にヨコナデが施される。外面下方には指頭圧痕が残り、内面には数条の暗文がみられる。	密、堅緻 内外面　灰色
	第68図−6	瓦器	椀	11.1	2.8	同上。	同上。	密、堅緻 内外面　灰白色
	第68図−7	瓦器	椀	11.5		同上。	同上。	密、堅緻 内外面　灰白色
	第68図−8	瓦器	椀	13.0		高台がわずかに残る。体部はゆるやかに内弯し、口縁端部は丸くおさめる。	同上。	密、堅緻 内面　灰白色 外面　灰色
	第68図−9	瓦器	椀	11.7		ゆるやかに内傾する体部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰白色
	第68図−10	瓦器	椀	15.2	5.45	断面三角形の高台と、ゆるやかに内弯する体部をもち、口縁端部は丸くおさまる。	同上。	密、堅緻 内面　灰色 外面　暗灰色

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SD－8261	第68図－11	白磁	碗	10.8		外傾する体部とやや外反する口縁部を有する。		密、堅緻 内外面　明緑灰色 断面　白灰色
	第68図－12	白磁	碗	16.2		やや内弯しながらのびる体部を有する。口縁端部内面は外傾する。		密、堅緻 内外断面　白灰色
	第68図－13	瓦器	擂鉢	21.2		やや内弯しながらのびる体部と外反する口縁部を有する。	口縁部内外面にヨコナデが施される。 体部外面は指頭圧痕が残る。	密、堅緻 内外面　灰白色
	第68図－14	瓦器	鍋つき羽釜	17.0		内傾する体部と端部が丸くおさまる口縁部を有す。 体部と口縁部の境には、斜め上方へのびる鍔がめぐる。 三脚を有する。	同上。	密、堅緻 内面　灰白色 外面　灰色 体部にススが付着 内面に炭化物付着
	第68図－15	須恵質土器	擂鉢	底8.0		平底の底部と45°でのびる体部を有する。	内外面ともヨコナデが施される。 底部には糸切りの痕跡が残る。	密、堅緻 内面　灰色 外面　青灰色
SK－8215	第71図－1	土師器	小皿	7.0	1.1	平坦な底部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともナデ調整。	密、やや軟 内面　赤橙色 外面　淡赤橙色 反転復元
	第71図－2	土師器	小皿	8.7	1.4	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに灰白色
	第71図－3	土師器	小皿	8.3	1.5	同上。	同上。	同上。反転復元
	第71図－4	土師器	小皿	8.0	1.5	同上。	同上。	同上。完形
	第71図－5	土師器	小皿	8.0	1.4	同上。	同上。	同上。完形
	第71図－6	土師器	小皿	8.3	1.45	同上。	同上。	同上
	第71図－7	土師器	小皿	7.4	1.45	同上。	同上。	密、やや軟 内面　灰白色 外面　黄灰色 反転復元
	第71図－8	土師器	小皿	8.2	1.4	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに淡黄橙色 完形。
	第71図－9	土師器	小皿	8.5	1.2	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに灰黄色 完形
	第71図－10	土師器	小皿	8.4	1.75	同上。	同上。	密、やや軟 内面　一部灰白色 外面　にぶい橙灰白色 完形
	第71図－11	土師器	小皿	8.5	1.2	同上。	内外面ともナデ調整。 底部外面未調整。	密、やや軟 内外面とも灰白色
	第71図－12	土師器	小皿	7.8	1.2	同上。	内外面ともナデ調整。	密、やや軟 内面　灰白色及び灰黄色 外面　灰白色 反転復元
	第71図－13	土師器	小皿	7.8	1.1	同上。	同上。	密、やや軟 内外面とも淡黄色 完形
	第71図－14	土師器	小皿	8.3	1.45	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともににぶい黄橙色 完形

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK−8215	第71図−15	土師器	小皿	7.9	1.35	平坦な底部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともナデ調整。	密、やや軟 内外面ともににぶい橙色
	第71図−16	土師器	小皿	8.0	1.5	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに灰白色 反転復元
	第71図−17	土師器	小皿	8.1	1.3	同上。	同上。	同上。完形
	第71図−18	土師器	小皿	8.2	1.1	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに明オリーブ灰色
	第71図−19	土師器	小皿	7.8	1.2	同上。	同上。	密、堅緻 内外面ともに灰白色
	第71図−20	土師器	小皿	8.2	1.3	同上。	同上。	密、やや軟 内面　灰黄色。 外面　橙色。一部灰黄色 完形
	第71図−21	土師器	小皿	8.0	1.3	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに淡赤橙色 完形
	第71図−22	土師器	小皿	8.0	1.3	同上。	同上。	密、やや軟 内面　灰白色及び浅黄橙色 外面　淡橙色 反転復元
	第71図−23	土師器	小皿	7.8	1.1	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに灰白色 反転復元
	第71図−24	土師器	小皿	8.4	1.4	同上。	同上。	同上
	第71図−25	土師器	小皿	8.5	1.4	同上。	同上。	同上
	第71図−26	土師器	小皿	8.8	1.2	同上。	同上。	密、やや軟 内面　灰褐色 外面　褐灰色
	第71図−27	土師器	小皿	8.4	1.3	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに灰白色 完形
	第71図−28	土師器	小皿	8.4	1.4	同上。	同上。	密、やや軟 内面　灰白色 外面　灰黄色 反転復元
	第71図−29	土師器	小皿	7.6	1.2	同上。	同上。	密、やや軟 内面　にぶい橙色 外面　浅黄橙色 反転復元
	第71図−30	土師器	小皿	8.4	1.4	同上。	同上。	密、やや軟 内外面ともに灰白色 完形
	第71図−31	土師器	小皿	7.1	1.15	やや凹面をなす底部をもち、口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、やや軟 内外断面　にぶい褐色 反転復元
	第71図−32	土師器	小皿	8.8	1.15	ほぼ平坦な底部をもち、口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、やや軟 外面　黄灰色 内面　黄灰色及び灰黄色 断面　灰白色 反転復元
	第71図−33	土師器	小皿	8.3	2.2	同上。	同上。	密、やや軟 内外面　灰白色 完形

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（粘土・焼成・色調・その他）
SK−8215	第71図−34	土師器	小皿	8.0	1.3	やや凹面をなす底部をもち、口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、やや軟 内外面　灰白色 完形
	第71図−35	土師器	小皿	8.6	1.4	ほぼ平坦な底部をもち、口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、やや軟 外面　暗灰黄色 内断面　にぶい黄橙色 反転復元
	第71図−36	土師器	小皿	8.0	1.15	同上。	同上。	密、やや軟 内外断面　灰白色 反転復元
	第71図−37	土師器	小皿	8.5	1.1	同上。	同上。	密、やや軟 内外面　灰白色
	第71図−38	土師器	小皿	8.5	1.35	やや凹面をなす底部をもち、口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、やや軟 内外面　灰白色 反転復元
	第71図−39	土師器	小皿	8.2	1.1	同上。	同上。	密、やや軟 外面　にぶい褐色 内面　にぶい黄褐 断面　にぶい褐色 反転復元
	第71図−40	土師器	皿	12.3	2.3	ほぼ平坦な底部をもち、口縁端部はわずかに内傾する。	底部内外面ナデ。 口縁部から底部にかけての内外面ヨコナデ。	密、堅緻 内外面　灰白色
	第71図−41	土師器	皿	11.8	2.1	ほぼ平坦な底部をもち、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、やや軟 外面　灰黄色 内面　灰白色
	第71図−42	土師器	皿	11.8	2.3	丸味を帯びた底部をもつ。ナデを強く施し底部及び口縁部との境に段をもつ。口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部外面指オサエ。 底部内面指オサエののち暗文。	密、やや軟 内外断面　黄橙色 完形
	第71図−43	土師器	皿	12.2	2.1	平坦な底部をもつ。強いナデを施し、口縁部下端に段をもつ。口縁端部をややとがらせる。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、やや軟 内外断面　灰黄色 内面にスス付着。完形
	第71図−44	土師器	皿	10.8	1.9	ほぼ平坦な底部をもち、口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、やや軟 外面　灰黄橙色 内面　にぶい黄橙色
	第71図−45	土師器	皿	11.7	1.9	同上。	同上。	密、やや軟 内外面　灰黄色
	第71図−46	土師器	皿	12.1	1.9	底部を欠損している。強いナデを施すため口縁部下端に段をもつ。口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、やや軟 内外断面　にぶい橙色 反転復元
	第71図−47	瓦器	椀	12.8	3.3	高台をもたない。口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 外面指頭圧痕。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内面　暗オリーブ灰色 ほぼ完形
	第71図−48	瓦器	椀	12.4	3.2	同上。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部ナデ。 外面指頭圧痕。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内面　灰色。一部灰白色
	第71図−49	瓦器	椀	13.6	3.3	高台をもたない。口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外断面　灰色
	第71図−50	瓦器	椀	13.0	3.5	高台をもたない。口縁部はやや内傾する。口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　暗灰色。一部灰白色 断面　灰白色 完形

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の種類	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK—8215	第71図—51	瓦器	椀	12.35	3.4	高台をもたない。口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部ナデ。 外面指頭圧痕。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色
	第71図—52	瓦器	椀	13.0	3.5	同上。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色 断面　灰白色 反転復元
	第71図—53	瓦器	椀	12.8	3.1	高台の痕跡をわずかにとどめる。口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色 断面　灰白色。反転復元
	第71図—54	瓦器	椀	12.8	3.45	高台をもたない。口縁端部は丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色及び灰白色 内面　明オリーブ灰色。一部暗オリーブ灰色
	第71図—55	瓦器	椀	12.4	3.1	同上。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部暗灰色 灰白色 内面　灰色。一部灰白色。完形
	第71図—56	瓦器	椀	12.2	3.15	同上。	同上。	密、堅緻 外面　灰色 内面　灰色。一部灰白色 反転復元
	第71図—57	瓦器	椀	12.4	3.3	同上。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色 断面　灰白色
	第71図—58	瓦器	椀	13.2	3.4	低い高台をもつ。口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部ナデ。 外面指頭圧痕。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 断面　灰白色 反転復元
	第71図—59	瓦器	椀	13.0	3.6	同上。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部ナデ。 外面指頭圧痕。 内面暗文。	密、堅緻 内外面　灰色。一部暗灰色 完形
	第71図—60	瓦器	椀	12.6	3.2	低い高台をもち口縁端部はやや外反し、丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部ナデ。 外面指頭圧痕。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色。一部灰白色 ほぼ完形
	第71図—61	瓦器	椀	13.2	3.3	断面が丸味を帯びた三角形の高台をもち、口縁端部はわずかに外反し、丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色 ほぼ完形
	第71図—62	瓦器	椀	13.0	3.5	断面が丸味を帯びた三角形の高台をもつ。高台は中心よりもずれて張り付けている。口縁部はやや内弯し、端部は丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰白色。一部灰色 完形
	第71図—63	瓦器	椀	13.0	3.2	断面が小さい三角形の低い高台をもつ。口縁部はわずかに外反し、端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色
	第71図—64	瓦器	椀	12.8	3.3	同上。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部から底部外面ナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色及び灰白色 内面　灰白色。一部灰色 ほぼ完形
	第71図—65	瓦器	椀	13.2	3.3	低い高台をもち口縁部はやや外反し、端部を丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面指頭圧痕。 底部ナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 反転復元

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK−8215	第71図−66	瓦器	椀	13.0	3.45	断面が四角形の低い高台をもつ。口縁部に強いナデを施す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕。底部ナデ。内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　暗青灰色及び灰白色 内面　暗青灰色及び灰色 断面　淡黄色 ほぼ完形
	第71図−67	瓦器	椀	12.8	3.6	断面が四角形の低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色
	第71図−68	瓦器	椀	12.8	3.1	高台の痕跡を残す。口縁部に強いナデを施す。	同上。	密、堅緻 外面　暗灰色。一部灰白色 内面　暗灰色 ほぼ完形
	第71図−69	瓦器	椀	14.2	3.0	断面三角形の低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、やや軟 外面　淡橙色 内面　明褐色及びにぶい橙色 断面　淡橙色 反転復元
	第71図−70	瓦器	椀	13.0	3.5	断面四角形の低い高台をもつ。高台は中心よりずれて張り付けている。口縁部を強くナデており、端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色 内面　灰色 完形
	第71図−71	瓦器	椀	13.1	3.6	高台の痕跡を残す。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色 ほぼ完形
	第71図−72	瓦器	椀	12.5	3.8	断面三角形の低い高台をもち、口縁端部を丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。外面指頭圧痕。内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 完形
	第71図−73	瓦器	椀	14.0	3.2	高台の痕跡をとどめる。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色 断面　灰白色 反転復元
	第71図−74	瓦器	椀	12.6	3.2	低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。外面指頭圧痕。内面暗文。	密、堅緻 内外面　暗灰色 断面　灰白色 完形
	第71図−75	瓦器	椀	13.2	3.3	断面三角形の低い高台をもつ。口縁部はやや外反し、端部を丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。外面指頭圧痕。内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰白色及び灰色 完形
	第71図−76	瓦器	椀	13.3	3.4	低い高台をもつ、口縁部はわずかに外反し、端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰白色 内面　灰色 ほぼ完形
	第71図−77	瓦器	椀	12.6	3.1	断面三角形の低い高台をもつ。口縁部はやや外反する。	同上。	密、堅緻 外面　灰白色。一部灰色 内面　灰色。一部灰白色 ほぼ完形
	第71図−78	瓦器	椀	13.2	3.7	低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色 内面　灰色。一部灰白色
	第71図−79	瓦器	椀	13.2	3.5	同上。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色 完形
	第71図−80	瓦器	椀	12.9	3.2	同上。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色。一部灰白色

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調製	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK－8125	第71図－81	瓦器	椀	13.8	3.5	高台の痕跡をとどめる。口縁端部を丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。外面指頭圧痕。内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色。一部灰白色 ほぼ完形
	第71図－82	瓦器	椀	13.0	3.2	断面三角形の低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。 内面　灰色及び明オリーブ灰色 断面　灰白色 反転復元
	第71図－83	瓦器	椀	12.3	3.5	低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色 完形
	第71図－84	瓦器	椀	12.6	3.35	低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色
	第71図－85	瓦器	椀	13.0	3.3	断面三角形の低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色 内面　暗灰色
	第71図－86	瓦器	椀	11.8	3.1	断面三角形の高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。外面指頭圧痕。内面暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 断面　灰白色 完形
	第71図－87	瓦器	椀	13.0	3.4	断面三角形の低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。外面指頭圧痕。内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　暗灰色。一部灰色 ほぼ完形
	第71図－88	瓦器	椀	12.7	3.2	低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰白色。一部黄灰色 完形
	第71図－89	瓦器	椀	12.8	3.7	低い高台をもち、口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰白色。一部灰色 内面　灰色。一部白色 完形
	第71図－90	瓦器	椀	13.2	3.5	断面三角形の低い高台をもつ。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色 断面　灰白色 完形
	第71図－91	瓦器	椀	12.6	3.4	高台の痕跡をとどめる。口縁部はやや内弯する。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色 断面　灰白色 完形
	第71図－92	瓦器	椀	12.4	3.1	高台の痕跡をとどめる。	同上。	密、堅緻 内外面　暗青灰色
	第71図－93	瓦器	椀	12.4	3.4	高台の痕跡をとどめる。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色
	第71図－94	瓦器	椀			低い高台をもつ。口縁端部を丸くしあげる。	同上。	密、堅緻 外面　灰色。一部灰白色 内面　灰色及び灰白色 断面　灰白色
	第71図－95	瓦器	椀	12.8	3.3	同上。	同上。	密、堅緻 内外面　灰色。一部灰白色 ほぼ完形
	第71図－96	青磁	椀	(高台径) 5.5	(高台高) 0.3	ケズリ出し高台をもつ。	内面及び外面に施釉。	釉部　灰オリーブ色 胎土　明オリーブ灰色 反転復元

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK−8215	第71図−97	白磁	碗	(高台径) 7.8	(高台高) 0.7	ケズり出し高台をもつ。	内面及び外面に施釉。	密、堅緻 釉薬　灰白色 胎土　灰白色 反転復元
	第71図−98	青磁	碗	(高台径) 6.0	(高台高) 0.35	同上。	同上。	密、堅緻 釉薬　オリーブ灰色 胎土　灰白色 反転復元
	第71図−99	青磁	碗	(高台径) 5.2	(高台高) 0.4	同上。	同上。	密、堅緻 釉薬　オリーブ灰色 胎土　緑灰色
	第71図−100	白磁	碗	(高台径) 6.8	(高台高) 0.6	同上。	同上。	密、堅緻 釉薬　明オリーブ灰色 胎土　灰黄色
	第72図−101	瓦器	埦	14.8	5.9	断面三角形の高台をもつ。 口縁端部はやや外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。 高台張り付け部ヨコナデ。 底部ナデ。 外面指頭圧痕。 内面　ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 断面　灰白色 反転復元
	第72図−102	瓦器	埦	(高台径) 5.1	(高台高) 0.4	断面四角形の低い高台をもつ。 底部、体部下半部のみ残存。	体部外面ナデ。 高台張り付け部ヨコナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内断面　灰白色
	第72図−103	瓦器	埦	(高台径) 5.2	(高台高) 0.6	断面三角形の高台をもつ。 底部、体部下半部のみ残存。	高台張り付け部ヨコナデ。 底部ナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 断面　灰白色
	第72図−104	瓦器	脚つき羽釜	17.2		丸底の底部をもち、ゆるやかに立ちあがり内傾した口縁をもつ。外面に３本の脚をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。 内面ナデ。 体部外面指頭圧痕のちナデ。 脚部たて方向面取り状のナデ。	密、堅緻 外面　灰色。底部にススが付着 内面　暗灰色
	第72図−105	瓦器	脚つき羽釜	17.8		体部上半が残存。ゆるやかに立ち上がる体部をもち、口縁は内傾する。３本の脚をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部上半外面指オサエ。	密、堅緻 外面　灰色。ススが付着 内面　暗オリーブ灰色 断面　明オリーブ灰色
	第72図−106	土師器	羽釜	28.4		口縁部は上方に立ちあがり、鍔の部分は水平につく。	ヨコナデ。	密、堅緻 外面　橙色 内面　黒褐色 断面　にぶい赤褐色 外面ツバより下ススが付着
	第72図−107	陶器	擂鉢	27.0		体部より上半が残存。口縁端部を丸くしあげ、内面に段をもつ。	ヨコナデ。	密、堅緻 外面　灰褐色 内面　赤褐色 断面　褐灰色
SK−8216	第73図−1	土師器	小皿	8.0	1.3	底部はやや凹面をなし、口縁端部は丸くしあげている。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、やや軟 外面　灰白色 内面　〃 断面　〃 反転復元
	第73図−2	土師器	小皿	8.6	1.4	底部はわずかに凹面をなし、口縁部は強くナデて下端に段をもつ。口縁端部は丸くしあげている。	同上。	密、やや軟 外面　にぶい黄橙色 内面　〃 断面　〃 反転復元。
	第73図−3	土師器	小皿	9.4	1.75	同上。	同上。	密、やや軟 外面　にぶい橙色 内面　にぶい褐色 断面　にぶい黄橙色

遺構名	挿図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK−6216	第73図−4	土師器	小皿	8.8	1.8	底部はわずかに凹面をなし、口縁部は強くナデて下端に段をもつ。口縁端部は丸くしあげている。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、やや軟 外面　にぶい黄橙色 内面（口縁部）　にぶい黄橙 （底部）　灰黄褐色 断面　にぶい黄橙色
	第73図−5	土師器	小皿	8.6	1.5	底部は一部を欠くが、ほぼ平らで、ゆるやかに口縁部にむかい端部は丸くしあげている。	口縁部内外面ヨコナデ。 外面ナデ。	密、やや軟 外面　黄灰色及び灰白色 内面　灰黄色 断面　灰白色 反転復元
	第73図−6	土師器	皿	12.6	2.2	底部は不明。口縁部下端に段をなし、斜め外方に立ち上がり、さらに強いナデを施す。 口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、やや軟 外面　にぶい黄橙色 内面　〃 断面　〃 反転復元
	第73図−7	土師器	皿	12.7	2.9	底部は一部を欠くがほぼ平らでゆるやかに口縁部にむかい口縁端部にむかってやや肥厚する。 口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 外面ナデ。	同上
	第73図−8	土師器	皿	13.8	2.5	底部はわずかに凹面をなし、口縁部は強くナデて段をもつ。 口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 内外面ナデ。	密、堅緻 内外面にぶい黄橙色
	第73図−9	瓦器	椀	12.2	3.3	高台をもつ口縁部を強くナデて段をもつ。 口縁端部は丸くしあげる。	口縁部外面ヨコナデ。 外面ナデ。 高台張り付け部ヨコナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 断面　灰白色 反転復元
	第73図−10	瓦器	椀	11.4	2.8	高台の痕跡をとどめる。口縁部を強くナデて段をもつ。 口縁端部は丸くしあげる。	口縁部外面ヨコナデ。 外面ナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内断面　灰白色 反転復元。
	第73図−11	瓦器	椀	12.0	3.5	高台をもち、ゆるやかに口縁部にむかい、口縁部を強くナデて段をもつ。 口縁部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面指頭圧痕。 底部ナデ。 内面ナデののち暗文。	密、緻緻 外面　明オリーブ灰色。一部灰色 内面　灰色
	第73図−12	瓦器	椀	12.5		底部を欠く。口縁部を強くナデて段をもつ。 口縁部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面指頭圧痕。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内面　灰白色。一部灰色 断面　灰白色 反転復元
	第73図−13	瓦器	椀	15.2	5.9	断面三角形の高台をもち、ゆるやかに口縁部にむかい、口縁端部は丸くしあげやや肥厚している。	口縁部内外面ヨコナデののちヘラミガキ。 体部外面指頭圧痕ののちヘラミガキ。 高台張り付け部ヨコナデ。 底部ナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内面　暗灰色 反転復元
	第73図−14	瓦器	椀	15.2	4.9	断面台形の高台をもち、体部上半を強くナデて段をもつ。 口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面指頭圧痕ののちヘラミガキ。 高台張り付部ヨコナデ。 底部ナデ。 内面ナデののち暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内面　明オリーブ灰 反転復元
	第73図−15	瓦器	椀	15.0	4.95	底部の一部を欠く。断面台形の高台をもち、口縁端部は丸くしあげる。	口縁部内外面ヨコナデののちヘラミガキ。 体部外面指頭圧痕ののちヘラミガキ。 高台張り付け部ヨコナデ。 底部ナデ。 内面暗文。	密、堅緻 内外面　灰色 反転復元

遺構名	掲図番号	種類	器種	法量 口径	法量 器高	形態の特徴	調整	備考（胎土・焼成・色調・その他）
SK−8216	第73図−16	瓦器	椀	(高台径) 4.4	(高台高) 0.4	断面三角形の高台をもつ。体部から口縁部を欠く。	体部(下半)外面ナデ。高台張り付け部ヨコナデ。内面暗文。	密、堅緻 外面　灰色 内面　〃 断面　〃 反転復元
	第73図−17	青磁	椀	(高台径) 5.3	(高台高) 0.35	断面やや丸味を帯びた四角形の高台をもつ。体部から口縁部を欠く。	内面、高台外面施釉。	密、堅緻 釉調　オリーブ灰色 胎土　灰色
	第73図−18	土師器	羽釜	29.6		体部より下は欠損。口縁部はなめ外方へ折り、やや内弯し、ほぼ水平な鍔をもつ。	口縁部外面 内面 鍔の部分外面 ヨコナデ 口縁部と鍔の部分の間ナデ。	密、堅緻 外面　橙色 つばの下部にすす付着 内断面　橙色 反転復元
SK−8217	第75図−1	瓦器	皿	9.1	2.0	平底の底部と外反する口縁部を有する。	口縁部内外面はヨコナデが施される。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には暗文が施される。	密、堅緻 内面　灰色 外面　暗灰色
	第75図−2	瓦器	椀	11.8	2.7	わずかに高台が残る。内傾する体部をもち、口縁端部は丸くおさまる。	同上。	同上
SK−8220	第76図−1	瓦器	羽釜	28.2		水平方向へのびる鍔部と、直立してのびる口縁部をもつ。	内面および口縁部ナデ調整。	密、堅緻 内面　赤灰色 外面　暗赤灰色 煤付着
	第76図−2	土師器	羽釜	28.0		水平方向へのび端部の丸い鍔を持つ。口縁部および端部は内傾する。	同上。	密、堅緻 内外面　橙色
	第76図−3	土師器	羽釜	31.0		同上。	口縁部および内面はヨコナデを施す。体部外面は縦方向のヘラケズリの後ナデを施す。	密、堅緻 内面　赤橙色 外面　橙色